

修 士 学 位 論 文

紙上の討議

「論壇」の知識社会学

平成19年度

社会情報学コース

56122

毛里 裕一

指導教員 北田暁大助教授

目次

第一章	問題意識	1
(A)	二つの語り口	2
(B)	危険かつ常套的な「見本」 <small>イグゼンプラー</small>	2
(C)	識者なる「位格」 <small>ペルソナ</small>	4
第二章	論壇の(不)存在証明 <small>アリバイ</small>	7
第1節	「論」と「時評」の関係性	8
(A)	なぜ「時評」に注目するのか	8
(B)	対象の限定	11
第2節	起源という文脈	12
第三章	閑説の様式による規定	23
第1節	共時的閑説	24
(A)	「虚焦点」としての総合雑誌	24
(B)	「時論」ということ <small>ペルソナ</small>	29
(C)	「人称性=位格」としての論者と評者	39
第2節	通時的閑説	47
第3節	社会的カテゴリーとしての現実味と疑念 <small>リアリティー</small>	50
第四章	「起源」と「変貌」	53
第1節	語源への遡行	54
第2節	短評欄という坩堝	56
(A)	もう一つの事後的閑説様式	57
(B)	二重構造の異同	61
おわりに		68
参考文献		71
引用新聞記事		74

第一章 問題意識

本章では、本論全体にかかわる問題意識を明らかにするために、まずメディア上に現れる二種の語り口--非人称性を旨とし不特定多数を対象とした「マス・コミュニケーション」的語り口と、人称性を前景化し水平的コミュニケーションを嗜好する「^{ディスコース}談話=討議」的語り口--を紹介し、次にそれをメディア上で混交させることについてどのような評価がなされているかを明らかにする。

その上で、そうした混交--「マス・コミュニケーション」にさしはさまれる「^{ディスコース}談話=討議」--の一例として「論壇」なるものを捉えて、「論壇的な^{ディスコース}談話=討議」の特殊な位置価値を確認する。

(A) 二つの語り口

一九九六年の衆議院選挙において、NHK は、選挙期間中の有権者インタビューの取材・放送を控える方針をとる。「街の声」、すなわち特定の話題について街頭で複数の通行人にインタビューを行い、数例を放映することで「世論」の分布状況を定性的に表現しようとする手法は、世論調査結果の公表とならんで、選挙報道においてそれまで常套的に用いられてきた。方針転換の理由としてNHK が挙げたのは、個人的意見の紹介が「視聴者に予断を与える」危険性であった。

一方、同じ一九九六年、毎日新聞は署名記事を多様化（増加）する方針を発表する。さらに社会面などの企画記事については記者の名前に加えて年齢も表示するとした。前者については「顔の見える新聞」作りが、後者については「読者に身近な新聞」とすることが、それぞれ標榜される。「顔の見える新聞」実現のための署名記事の増加の動きは二〇〇五年には朝日新聞にも拡がる。そこでは、「顔の見える」こととは、「だれがこの記事を書いたか、写真を撮ったか」を知らせることで、読者への説明責任を果たし、読者との距離を縮め、ることと敷衍される。

「消える顔」と「顕わになる顔」。一見すると相反する動きにも見えるが、むしろそこに見てとるべきは、メディア上に現れる二種類の「語り口」――不特定多数を対象とし非人称性を旨とする「マス・コミュニケーション」的語り口と、水平性を志向し人称性を前景化する「^{ディスコース}談話=討議」的語り口と――が相補的に帯びている微妙な位置価であろう

北田暁大は、ルーマンの議論を援用するかたちで、マスメディア・システム自律以前の、物語に昇華されるべき素材たる位置にあった「事実」と、システム自律以後の、その「羅列」それ自体が別種の物語的価値をおびる「事実」との相違に注意する必要があると指摘している。そして、そうした文体論的・意味論的転回――文体としての第三者性 *impartiality* への気づき――を明治十年代の西南戦争をめぐる新聞報道に求める [北田 2004a: 153]。

しかしながら、こうして誕生した「事実をして語らしめる」ことを指向する文体によってその後の新聞紙面が一色に染め上げられていったわけではもちろんない。北田が指摘する文体論的転回を受けて新聞紙面の上で実際に生じたことは、新たに成立した、第三者視点からの叙述であることを強調する《時事》と、そこから弁別される《時事ならざるもの》との並存であり、両者のあいだで不断に行われる「境界」設定であった。「新聞小説」然り。「評論」然り。冒頭に挙げた「マス・コミュニケーション」と「^{ディスコース}ディスコース」との二分法も、新聞の文体が第三者視点を獲得して以来続いてきたこの「境界」設定の延長線上に捉えることができる。

(B) 危険かつ常套的な「^{イグゼンプラー}見本」

「事実の羅列」自体に読む快樂を見いだす読者の側の欲動と、理念的にも経済的にも多種多様な利害関心を包摂する必要がある発信者の側の論理が ^{ポジティブ・フィードバック}好循環することによって、非人称的な「マス・コミュニケーション」的語り口は、今日、新聞紙面の主要な部分を占めるに至っている。しかしながら、そうした語り口のみによって「メディアの語り」が成立しているわけではない。「マス・コミュニケーション」的語り口に圍繞されながらも、あるいは ^{ディスコース}圍繞されていればこそ、メディア上に現れる「語り手」を明示した「談話=討議」的語り口もまた両義的位置価を帯びている。すなわち、メディアの機能を根こぎにしかねない「危険」な存在であるとともに、それを再び活性化させる「他なる可能性」として。

メディア上において「第三者的・非人称的語り口のなかに人称的な語り口を混在させること」の「効果」については、これまでも研究者の関心を集めてきた。たとえば、近年実証的なメディア研究の分野で注目を集めているトピックに「イグゼンプラー効果」がある。橋元良明らによれば、イグゼンプラーとは《「街頭インタビュー」や「識者の意見」をそのまま具体的に提示したもの》を言い、《その影響を「イグゼンプラー効果」と呼ぶ》(橋元ほか 1997)。このイグゼンプラー効果について近年相次いで研究が発表されているが、そのいずれにおいても、メディア上に登

場する個人的意見の「^{イグゼンブラー}見本」が読者や視聴者の世論認知に大きな影響を与えるとの結果が出ているとされる（Brosius 1999: 214-215、橋元ほか 1997 など）。

しかしながら、その効果への「信憑」と「警戒」がかくも平穩裡に並存していること――実際「選挙期間中の自粛」という NHK の選択に象徴されるように、「街の声」や「識者の意見」の全面禁止が真剣に求められることはない――を念頭に置くと、メディア上の「^{ディスコース}談話＝討議」的語り口の別の位相も見えてくる。端的に言えば、非人称的な「マス・コミュニケーション」的語り口のなかに「見本」を侵襲させることによって期待される訴求力ないし異化効果は、今日ではその相当部分がいわば「織り込み済み」となっているのではないか¹。

例えば「コメンテーター」をめぐる今日的情況は、そうした位相をよく物語っているように思える。ワイドショー番組の「コメンテーター」もまた、映像素材――ナレーションが被されるそれは第三者的・非人称的視点からの叙述の体をとる――の合間に間歇的に挟まれる「^{イグゼンブラー}見本」の典型例である。だが、そうした演出手法が冷笑をもって迎えられることは今日では珍しくない。どんな話題をも論じうる「万能性」や根拠なき断定をおこなう「軽薄性」は日常的に揶揄の対象となる。しかしながら、そうした批判的視線をも織り込んで、「真剣な言明」という含意を半ば以上奪われながらも、「コメンテーター」は毎日画面に登場する。視聴者の側も、彼らのコメントをとりあえず「聞き置く」という態度でその存在を半ば許容しているといえる。「コメンテーターに対するこき下ろし」というよくある光景は、メディアにおけるある種の制度性とそれに対する反省的言説との相補性を示唆しているように思える。

もちろん話を「コメンテーター」だけに限るならば、それを「本来あるべきもの」の頹落態として、「あるべきものが喪われてしまったこと」を覆い隠すアリバイ的存在として考えることもまた可能ではある。たとえば、(かつて)活字メディアを舞台に「論壇」を形成した「知識人」を理念型とし、「コメンテーター」というテレビ的制度はその頹落形態として描いてみせる、といった具合に。しかしながら、「^{ストレート}客観的な」ニュースの横に複数の「識者」の「コメント」を配すというおなじみの紙面構成を想起するならば、「活字メディアであればアリバイ性からまったく自由」との主張も信憑性を欠く。

ストレートニュースのなかに繰り返し召還される人称的な「^{イグゼンブラー}見本」という語り口。期待するにせよ危険視するにせよ、その「効果」を前提することによって、切り落とされてしまう側面がこの語り口にはある。とはいえ、それは「織り込み」によって「効果が消失＝無効」になったというのとも異なる。メディア上の「^{イグゼンブラー}見本」は、その「有効性」と「常套性」とが同時に語られてしまうような制度として主題化される必要があるのである。

¹ 念のために言えば、仮に「マス・コミュニケーション」的語り口のなかに「ディスコース」的語り口を挟み込むことによる「効果」が、当事者のレベルで「織り込み済み」であったとしても、そのことが直ちに「効果の消失」を意味するわけではない。論理的には、可視的になることによって「効果」がいや増す可能性もあるのだから。《ステロタイプは感情に訴えるやり方で経験を狭め限界づけるのだが、擬似イベントの方は興味を引くやり方で経験を潤色し脚色する。[...] ステロタイプはどのようにつくられたかがわかれば――宣伝ならば出所を明らかにすれば――その信頼性は下がる。擬似イベントでは、演出 staging についての情報を知っても、かえってその魅力を増すばかりである。》

[Boorstin 1962=1964: 46 引用者一部改訳]

(C) 識者なる「位格」^{ペルソナ}

そもそもメディア上の言明のうちで特定の種類のものを「討議」とみなすこと、たとえば「紙の上で討議が行われている」と考えることには、ある種の飛躍があるとも考えられる。

たとえばルーマン＝佐藤によれば、相互行為interaktion--対面での／口頭での--の場合、「その場性Anwesenheit」がそのやりとりを大きく規定するとされる²。相互行為の途中で「話が飛ぶ」というのはよくあることだが、このことは逆に、内容的にはどれほど飛躍していても「その場」で発せられることによってレリバントな「一連のやりとり」として理解される可能性が開かれていることを示す。「討議」もまたこうした相互行為の様態として捉えることができる³。

しかしながらメディア上の言明の場合、レリバントな「やりとり」の範囲の決定を「その場」性に求めることが困難なことはいうまでもない。宛先を特定するなど他の手段を用いて関与性をコントロールしていく「紙上論争」のような例もむしろ稀である。にもかかわらず、それはしばしば討議モデルによる解釈を引き寄せてしまう。商業化の進展にもかかわらず、あるいはむしろその進展ゆえにこそ、世論喚起という「公器」性の問題が繰り返し前景化する。そしてそれに対応するかたちで、メディア上に流布する、人称性が強調された「談話」^{ディスコース}は「討議」の容貌をも具えることになり、その背後にしばしば「識者」なる^{ペルソナ}位格が像を結ぶことになる。

繰り返しになるが、比喩としてみた場合、メディア上の特定の言明群を「やりとり」として、「討議」の延長上に捉えると、何処かに短絡が生じる。にもかかわらず実態としては、「メディア上で討議が行われる」というイメージが執拗に流通する--学界での「真理」の探求とも、政治的な「決定」とも、関連づけられながら同時に差異づけられるかたちで。メディア上の「やりとり」を「討議」として可視化するかかる過程において、日本の場合、一段の屈折を与えているものに、「論壇」なる社会的カテゴリーがある。

《といってもこの「論壇の人」になるのには何か特別な手続きが必要であったり、あるいは何かの組織に加入しなければいけないわけではない。何となく冒頭に挙げたいいくつかの雑誌のどれかに物を書いた段階で「論壇デビュー」となり、さらにまた何となく書き続けていれば「論壇の人」になる、といった感じだ。》[大塚 2001: 7]

自身《三十歳になるかならないかという時に「論壇デビュー」》[大塚 2001: 7-8]している大塚の、やや皮肉な（含羞めいた？）記述は、「論壇」において「人称性＝位格」^{ペルソナ}が帯びることになる位置価を簡潔に指し示している。「論壇の人」、あるいはより一般的な言い回しを用いれば「論壇人」として「人称性＝位格」^{ペルソナ}がしばしば焦点化されることも「論壇」なるものの構成要素の一つである。しかしその^{メンバーシップ}成員資格は「何となく書き続けて」いるという事実性によって担保されるところが大きく、「手続き」や「組織加入」のような要件を特定できるものではない。少なくとも「書き手」の側から見るとかぎりには。大塚が挙げる『文芸春秋』『中央公論』『世界』『正論』『諸君！』『Voice』『論座』といった雑誌に「何となくかき続けることができている」ということは、一面ではそれら雑誌の編集サイドからの付託に継続的に応えているということにもなる。「論壇」における「人称性＝位格」^{ペルソナ}の前景化が、編集者の予期（「このテーマについて彼[女]ならこの程度は面白いことを書いてくれるだろう」）にある程度まで依存し、かつそれを可能にしていると、まずはいえるだろう⁴。

ただしより正確に言えば、件の雑誌に「物を書くこと」は「論壇の人」たることの必要条件であっても十分条件

² 詳しくは Luhmann(1972)、佐藤(2005b)を参照。本研究は「紙の上の討議」を、「おしゃべり」とは似て非なる、別様の「薄く、淡い、いわば社会性の限界事例」[佐藤, 同: 107]として見出さんとする試みといえるかもしれない--それに成功するか否かは別として。

³ ルーマンの「システムとしての討議」論、とりわけ以下を参照 (Habermas und Luhmann 1971=1984; 414-426)。

⁴ とはいえ大塚自身による「論壇の人」の議論は、引用部分以降、ここ一〇年のあいだに進んだ「論壇の人のキャラクター化」（「朝まで生テレビ」や「ゴーマニズム宣言」といった「サブカルチャー」への登場）へと直ぐに進むので、ここでの論旨とは微妙にずれていくのだが。

ではない。わかりやすいのは『文芸春秋』や『中央公論』などのいわゆる「創作欄」に載るテキストの作者であろう。彼女ら、彼らは通常は「論壇の人」には数えられない。それ以外でもたとえば「コラムニスト」と「論壇の人」とのあいだには微妙な境界線が設定される。

と同時に、少なくとも今日において、件の雑誌に「実際に物を書いていること」が、「論壇の人」の認知の局面でメルクマールとなっているかも実はかなり怪しい。大塚は先に引用したテキストのなかで次のように述べる。

《いうまでもないことだが「論壇」という具体的な場所が現実の世界のどこかにあるわけではない。それは「論壇」の親類筋(?)に相当する「文壇」も同様である。つまり当たり前だが「論壇」は見えない場所である。けれども奇妙なことにその見えないはずの論壇が奇妙なかたちで「見える」ようになってしまったのがこの十年であった気がするのだ。》[大塚 2001: 8]

そこでも触れられるように、「論壇誌」は現在では慢性赤字体質でたかだか数万部しか発行されていない。にもかかわらず近年になって「論壇」は「見える」ようになってきている。大塚はその原因を新たな「認知」の回路――「朝まで生テレビ」や「ゴーマニズム宣言」――の形成に求める。しかし彼自身「どこかにあるわけではない」と述べていることからもうかがわれるのは、むしろ「論壇」なるものが、直接的な「認知」によってではなく、より間接的な「了解」によってこそ下支えされている可能性である。「論壇誌」にせよ「テレビ」や「マンガ」にせよ特定のメディア上で実際に「論」を眼にすること以上に、メディアを介して何処かで「論」が交わされているという「イメージ」を抱いていることの方が「論壇」なる語彙を、たとえ間歇的にであれ賦活してきたのではないか。

「^{メンバーシップ}人」によっても「^{メディア}場」によっても実体的には定義できないような微妙な区別としての「論壇」。これが本稿の照準する対象である。

「政治問題」を主題とすることが少なくなく、また「学者」を主たる人材供給源の一つとしながら、出版・放送等の「マスメディア」を舞台としてきたいわゆる「論壇」は、しかしながら、「政界」・「学界」・「メディア」のいずれからも相対的に分立したものとして、しばしば「特殊日本的なもの」として言挙げされる。これまで政治家や官僚・学者らの手による膨大な「^{ディスコース}談話＝討議」が「論壇」を構成するものとして採りあげられてきたが、それらはより直接的な「政策形成」や「学問業績」などからは一定程度区別される実践として理解されてきた。またすでに見たように、メディア上の非人称的なストレートニュースとは別種の様式性として顕示されもする。一言でいえば、「論壇的な語り口」とは、少なくとも建前上は抽象的個人の「^{ペルソナ}人格＝位格」にて討議に参画するという構図を前景化するような様式といえる。と同時に、しばしば「今月の論壇は…」や「論壇の機能として…」などといった表現が見られることからもうかがえるように、「論壇」は単なる「^{ペルソナ}個々の人格＝位格の単純集合」以上のものとしても観念される。そしてこの「^{ペルソナ}人格＝位格」を媒介とした「討議共同体」的イメージが、ふたたびメディアへ、ひいては社会へと差し戻されることになる。このようにして、直接対面状況下での「^{コミュニケーション}討議」なる関連づけの様式に対して抱かれるイメージが、「^{ペルソナ}位格」概念を介して半ば度外れなまでに拡張されるとき、メディアの「公」的印象の醸成と、「社会」との同一視とが双対的に促されていくようにも思える⁵。

だがここで不用意に口走った「^{ペルソナ}位格」や「共同体」といった物言いに対しては、急ぎ留保を付しておく必要が

⁵ たとえば《「戦後」の代表的な知識人や事件は、ほとんど網羅することによって《「戦後」におけるナショナリズムと「^{おおやけ}公」をめぐる議論が、どのように変遷して現代に至ったか》を検証するとき、その素材の多様性に抗して「^{おおやけ}公」をめぐる議論としての関与性を担保するものは、それぞれの思想なり行動なりが整序され相互に関連づけられる「討議のアリーナ」の公的イメージそれ自体であろう[小熊, 2002]。ただし、「討議のアリーナ」のイメージの先行予期に基づいた関連づけが、それをことさらに指摘することが冗長に映るまでに一般に飽和しているとすれば、それは分析者の「恣意」などではいささかもなく、その分析はあくまでも「^{マニユーパー}正しい」。あまりに「^{マニユーパー}機動的・偽悪的な清水幾太郎は、上記先行予期の攪乱効果をもつがゆえに「思想」としての失格を宣告されてしまうのかもしれない[小熊, 2003]。ただし、本論で見ると、「偽悪」それ自体を折り込んだ関連づけの様態もありうるのだが。

第一章 問題意識

あるだろう。抽象的・歴史通底的なものとして「討議する^{ベルソナ}位格」「討議共同体」を語りえるとした瞬間、折々の局面において、発信者-解釈者のあいだで実現され、あるいは潜在的に示されてきた「論壇的な討議」という特殊な^{コミュニケーション}関連づけの様式の歴史偶有性が平板化されてしまうからである。以下の章では、「討議共同体」モデルの先験性を能うるかぎり迂回して、そのやりとりの歴史性に寄り添うかたちで、「論壇」なる社会的カテゴリーによる区別の様態を検討していきたい。

第二章 論壇の（不）^{アリバイ}存在証明

大塚の指摘した通り、「論壇」は《現実の世界のどこかにあるわけではな》く、眼には《見えない》。「論壇（の）^{メンバーシップ}人」の成員資格も、彼ら彼女らによって著されるテキストの性質も、あるいはそれらを掲載するメディアの種類も、「論壇」の「内と外」とを峻別する「規準」のようなものとしてとらえるかぎり、どこか底が抜けている。にもかかわらず、あるいはまさにそれゆえにこそ、後付け的に、さまざまな「人稱性＝位格」^{ペルソナ}が「論壇人」として読みこまれ、さまざまな「談話」^{ディスコース}が「論壇」を構成する「討議」^{ディスコース}と解される自由度が生じることになる。

社会的カテゴリーとしての「論壇」は、こうした「なにが内でなにが外であるか」についての後付け的な了解が多年に渡って積み上がっていくなかで、いわばその「自重」によって同一性が担保されてきたように思える。それは歴史偶有的なやりとりの連関であり、「討議」なり「公共性」なりがあらかじめ「統制的理念」として定立した上で、その下で社会的実践が積み重ねられていくこととは性質を異にする。

こうした社会的カテゴリーとしての「論壇」の具体的様態を追跡するために、まず第二章では、「論壇」に関与的な「談話＝討議」^{ディスコース}や「人稱性＝位格」^{ペルソナ}を事後的に措定する様式として、主として新聞紙上に掲載される「論壇時評」欄に注目し、その沿革を通時的に概観する。

具体的にはまず第1節にて、論壇時評なる関説の様式に着目する理由を挙げた上で、本論が直接採りあげる論壇時評の範囲を明らかにする。

続いて第二節では、新聞紙上の論壇時評欄を中心に一九三〇年代から二〇〇〇年までの通史を概観し、特定の様式の生成や普及、変化を時系列順に検討していく。

(A) なぜ「時評」に注目するのか

ある「談話=討議」なり「人称性=位格」なりが「論壇」の「内なるもの」とし、あるいは「外なるもの」として区別されるのは、具体的にはどのような場面においてか。ここで本章が注目するのは、個々の「談話=討議」や「人称性=位格」を「引用」し、それらに「関説」することによって「論壇」を主題化する一群のテキストである。論究すべき「談話=討議」の先在を前提とし、それらに対する「注釈」的關係性を有するかぎり、とりあえずはそれらをメタテキストと読んでおくこともできるだろう⁶。「論壇」の特徴や問題点などを論じる雑誌論文や新聞記事がそうしたメタテキストに該たるが、なかでも比較的想起しやすいのは、毎月決まって新聞に掲載される、「論壇時評」と呼ばれるコラムであろう。

とはいえ、「論壇」の具体的様態を追跡するにあたり、「論壇誌」などに掲載される個々の論考それ自体ではなく、それらを引用し関説する雑誌や新聞の記事に注目するという本章のアプローチは、あるいは「迂路」に映るかもしれない。たとえば、「戦後論壇を代表する総合雑誌の巻頭論文」たる丸山真男の「超国家主義の論理と心理」という論文そのものよりも、むしろ《論壇のマンネリズムの壁にも漸く穴のあく時が来た》という惹文句とともにそれを評する一コラム〔朝日新聞 1946: 2〕の方に照準することで「論壇なるもの」を考察しようとする本論の立場は、単なる些末主義にすぎないのではないかと。もちろん、いわゆる「論壇誌」に掲載された個々の論文を介して、その直接的な主題（たとえば「超国家主義」）のみならず、「論壇」なるものについてもまた（たとえば「天下国家を論ずることが論壇である」などというかたちで）、なにがしかのやりとりがなされ、了解可能性が更新されることは当然予想される。しかしながら、こと「論壇」なる社会的カテゴリーをめぐるやりとりや了解を追跡する上でより「一次的な」ものとして扱われるべきは、「論壇に關与的なもの」として事後的に了解される個々の「テキスト」の方ではなく、引用や関説を通じて遂行的に、より直截に「論壇の内と外」を区別することになる注釈的な「メタテキスト」の方であるように思える。

北田暁大は、北田（2004）において、ネット上でのリンク=引用・関説がはらむ問題性——公開性／公共性／固有名のあいだの不可避な齟齬——を、学者共同体における引用・関説の流儀と比較対照しながら分析している。ここでは、次のように述べられている。

《「引用」「参照」は単なる手続きの問題ではない。それはきわめてスリリングなコミュニケーションの実践だ。》〔北田 2004: 204〕

出典を明示した引用が底なしに推奨されることでオリジナリティを神格化する危険性をも呼び込みかねない学者の世界と、引用のルール化によっては「意図を超えて届いていないかもしれない／届いてしまっているかもしれない」という不安を払拭しきれないネットの世界。北田の提唱する「引用学」とは、こうした引用という「関連づけ」を規定するもの、あるいは引用することによって生じる（生じてしまう）ことを追跡する知的営みを指すのかもしれない。もしそうであるならば、論壇時評を中心とする注釈的な「メタテキスト」に照準する本章の考察も、こうした「引用学」の一端に連なるものといえる。

⁶ もっとも、すぐに確認するように、文学「作品」とそれに関説する「批評」との関係などくらべた場合、ここでいう「論壇」における「テキスト」と「メタテキスト」とのあいだの階層性は遙かに相対的なものとして観念されている。簡単にいえば、特定の「談話=討議」に関説することによって「論壇」を主題化するようなテキストは、それ自体もまた、ほぼ同時に「論壇に關与的な談話=討議」として了解される可能性へと開かれるのである。「論壇」において「テキスト」と「メタテキスト」とのあいだの「階層性」がいかに感知され、処理されているのか、そのこと自体が本論においてより慎重に検討される必要がある。

ではかかる注釈的な「メタテキスト」のなかでも、本章において、新聞コラムの一形態である論壇時評に特に注目する理由は何か。いわゆる論壇時評欄は必ずしも新聞にのみ設けられたものではなく、たとえば「論壇誌」それ自体のなかでもしばしば掲載されてきた。また、「ジャーナリズム論」や「メディア論」などと呼ばれる雑誌論文や新聞記事のなかにも、先在する個々の「^{ディスコース}談話＝討議」を引用・関説しながら「論壇」なるものの特性や役割などを主題化したものが当然ある。これらもまた、「論壇」に関する注釈的な「メタテキスト」とみなすことができる。実際、こうした新聞の論壇時評欄以外の「メタテキスト」についても、立論上、本論文は適宜引用・関説する。にもかかわらず、本章において新聞に掲載される論壇時評欄を特に集中的に検討するのは、「メタテキスト」を介した事後的な^{コミュニケーション}関連づけ――定常的に行われる関与的なものの選択と、間歇的に反省的に行われる境界の設定――を通じて、「論壇なるもの」が歴史的・具体的に規定され、あるいは将来の了解可能性を規定していく条件をみていく上で、論壇時評が以下の三つの観点から好適な資料と考えるからである。

・ (総合) 雑誌と新聞とのリーチの格差

第特部でとりあげた大塚の記述からもうかがわれるように、一般に、「論壇」は「論壇誌」あるいは「総合雑誌」などと呼ばれる一群の雑誌に掲載された論考によって構成されるものと了解される傾向が強い。たとえば本章でとりあげる新聞の「論壇時評」欄のタイトルの変遷を見ても、第二次世界大戦を挟んで中絶していた朝日新聞の論壇時評欄が一九五一年に復活して以降およそ九年間は、当該記事は「論壇時評」を称さず、「総合雑誌評」など雑誌論文を批評の対象とすることを明示する題目が用いられていた(巻末図表参照)。実際、東大医学部教授の緒方富雄は、自信の担当回で《四つの総合雑誌の五月号について、何か書けというのを […]》[緒方 1952: 4]と記載しており、編集部から指示された批評の対象が当時の『中央公論』『改造』『文芸春秋』『世界』の四誌に限られていたことを明らかにしている。

一方で、こうした「論壇誌」「総合雑誌」の発行部数の少なさもまた頻繁に言及される場所である。たしかに、すでに第特部で大塚も指摘しているように、現在、上記の雑誌はそれぞれ数万部単位の発行部数しか持たない。これに対し、「新聞離れ」が喧伝される今日においても、ひとまず新聞はたとえば全国紙ならば数百万～一千万部のスケールで発行されている。五〇年前にも中野好夫が『中央公論』と『世界』について《おそらく両誌とも売行部数(読者数とは違う)はまず十万を多少前後するところ》とし《将来とも数十万と飛躍することはまずあるまい》[中野好夫 1956: 4]と述べていることから、雑誌と新聞の規模の格差は(現在よりは小さかったかもしれないにせよ)一貫して開いていたと考えられる。このことから、当該雑誌群を中心とした「論壇」の実定性そのものに疑義を呈する議論や、あるいは雑誌メディアに比べればはるかに発行部数の多い(したがって影響力もより大きいと考えられる)新聞紙上の各種論考を中心とした「論壇」像の再構成の必要を説く議論なども出てくることになる⁷。

しかし本論が新聞の論壇時評欄に注目するのは、単にメディアとしての影響力の大きさの故ばかりではない。新聞のいわゆるリーチの大きさは、(総合)雑誌のリーチの小ささととの^{コミュニケーション}相対関係において、主題のレベルにおいても「論壇」をめぐるやりとりを強く規定していると考えられるのである。

ここでいう「主題のレベル」とは、「発行部数の少ない雑誌論文について、相対的に発行部数の大きな新聞記事が関説することによって〈論壇〉を論じる」という論壇時評の構造が当事者に了解されていることを意味する。かかる状況においては、「新聞の論壇時評を眼にししながら、批評の対象となっている当の雑誌論文を実際には読まないこと」は、ある意味で「常態」として受けとられる。にもかかわらず論壇時評という様式は、「単なる個々の論

⁷ たとえば田中紀行は、大正期の論壇の主要メディアとして、総合雑誌と並んで、『大阪朝日新聞』を中心とする新聞を挙げている [田中紀行 1999: 194]。

第二章 論壇の（不）存在証明

文の紹介にとどまらず「＜論壇なるもの＞を論じる（べき）」ものとしてどこかで前提されている⁸。結果として、「専ら事後的な＜解釈＞を通じて＜論壇なるもの＞に接すること」が一般的であると了解されることになり、社会的カテゴリーとしての「論壇」が事後の解釈によって措定される度合いが相対的に高くなる。

かてて加えて、（総合）雑誌の相対的なリーチの小ささが了解されることによって、論壇時評に「読まれなさ・読みにくさ」というライト・モチーフを用意することになる。詳しくは、様式としての論壇時評の特性を検討する本章第二節以降で確認するが、「総合雑誌を中心とする＜論壇なるもの＞の読まれなさ・読みにくさ」という主題は、初期のころから時評欄に繰り返し持ち出されてきた。そしてかかる主題は、結果として新聞紙上における「論壇」をめぐり^{コミュニケーション}関連づけを間歇的に賦活する条件ともなってきたのである。

・カテゴリーの範囲の曖昧性

論壇時評という「事後解釈」――当事者によってすでに実践された関与性の設定――からではなく、解釈の対象となっている「論文」そのものから直接「論壇」に接近しようとする、結果として研究者自身による関与性の設定――論壇に関係あるものとなないものとの区別――が無自覚・無批判のうちに密輸入される可能性がある。このこと自体は、社会学などにおいては至極一般的に観察される問題であり、また窮極的には「研究者による解釈」は避けるものでもない（「事後解釈」に定位することで叙述される本論の「論壇」像自体が、どこまでいっても「一つの事後解釈」にすぎない）。

だがここで問題にしたい曖昧性とは、そうした「研究者の恣意」といったものではなく、論壇時評からうかがわれる、「当事者レベルでの、織り込み済みの曖昧性」の方である。すなわち、論壇時評が引用・関説によって＜論壇なるもの＞を毎月更新してくるなかで、それが＜コード＞や＜機能＞などへと還元しにくい「超ジャンル」的⁹様相を強く帯びてきた点である。後述するように、実際、「時評」という事後的な関説から観察するかぎり、＜論壇なるもの＞の範囲は、その標準的なイメージ――「いわゆる総合雑誌に掲載されている、時論的性格の強い、政治・経済・社会的主題を扱った論文」――を思いの外頻繁に飛び越える。そこでは書籍や特殊な雑誌、新聞記事などが言及されることもあれば、文芸理論や哲学、思想などに関説されることもある。ただし、かかる「逸脱」をまったき恣意性ととらえることは適切でないし、また評者それぞれの「個性」にのみ帰すべきものでもない。たとえば、「政治学者」や「経済学者」に比べて、「逸脱」や「越境」により積極的な「文芸評論家」「哲学者」「社会学者」「文化人類学者」などが論壇時評の評者へと反復的に登用されていること自体、彼らに寄稿を求める編集者らが抱いている＜論壇なるもの＞に対する了解に規定されていると考えられるからである¹⁰。

このように、「関説による事後的な了解」というかたちで、＜論壇なるもの＞が「ゆらぎ」という自由度を組み込んでルーズに規定されていることから、それを叙述するにあたっては、「関説される側」である個々の論考に先

⁸ 「批評する媒体と批評される媒体とのリーチの格差」という構図自体は、論壇時評欄にかぎらず、たとえば新聞の文芸時評欄や書評欄にもそのまま当て嵌まることではある。また学界専門誌におけるレビューの場合でも（さらにいえば学術論文における先行研究の引用の場合でも）、読者のなかで実際に引用の対象となっている文献や論文を眼にするものはやはり相対的には少ないであろう。であればこそ、論壇時評という様式を通じて主題化される「総合雑誌と新聞とのリーチの格差」は単なる「客観的な事実」としてとらえられるべきものではない。文芸時評や書評とは異なり「個人の選択や趣味嗜好」の相には回収されきらず、また学界とは異なり「関与性が設定できるかぎりでの網羅的な引用・読解」が倫理的・権利的に要請されるわけでもない。そうした「独特の緩さ」をもって処理される、論壇時評の「リーチの格差の了解のされ方」がここで問題となっているのである。

⁹ 「超ジャンル批評」とは、戦間期から戦後初期にかけて流行した、新聞の学芸欄などの匿名批評その他の「雑文」について、山口功二や森洋介が指摘した特徴である。第4部第三章で詳しく論じるが、かかる雑文と、より「真面目な」文芸時評や論壇時評は、戦前の学芸欄において表裏一対の関係となっていた。そして当時雑文が有していたいくつかの特質は、程度の差こそあれ、論壇時評にも共有されており、雑文欄の衰退以後もしばしば残響することになる。

¹⁰ 後述するように、かかる「逸脱」や「越境」は、実は一九三〇年代に新聞紙上で論壇時評が開始された初期のころからしばしば見られる事態であり、オーソドキシィーが確立して以降に、はじめて「逸脱」「越境」が生じたこととらえるのは、事実レベルで誤認がある。

験的に接近するよりも、「関説する側」である論壇時評に接近する方が優先されるべきことになる。

ベルソナ
・位格や全体性に対する明示的言及

繰り返しになるが、論壇時評は、基本的には先在する論考に関説しそれらを論評する様式として了解される。しかしながら、その実態からうかがわれることは、論壇時評は同時に「それ以上の存在」であることも要請されている、という点である。いってみれば「書評のミニチュアの寄せ集め」とどまることはかなりの程度強く忌避されるのである。評者はそれぞれの論考に対する個別の論評ばかりでなく、それらのあいだに「脈絡」をつけることも要請される。結果として論壇時評において、「論者」の位置価を測る人物論、雑誌メディア単位の編集論、刻々と遷ろう中心的主題として観念される「論点」や「論調」、さらには全体としての「機能」や「役割」に照準する「論壇論」といったものが、繰り返し語られてきた。

このように論壇時評のなかで直接的に叙述される「脈絡語り」は、本論にとって当然に重要な意味をもつ。なぜなら、関与的な「談話＝討議」や「人格＝位格」と「全体としての論壇」との相補的措定という本論の研究仮説が、読まれるべきテキストとしてこれ以上なく明示的なかたちで提示されていることになるのだから。しかし、「脈絡」を語るこうした論壇時評の特殊な位置価はそれにとどまらない。

雑誌論文のメッセージ内容そのものにかかわるものを「一階のコミュニケーション」ととらえれば、「人称性＝位格」や「論壇の全体性」などについて記す論壇時評の「脈絡語り」は、とりあえず「メタ・コミュニケーション」に擬せられることになる。ただし、かかる「脈絡語り」もまた新聞記事として提示され、それ自体が雑誌論文などと同格の<論>の一つとして了解される可能性に開かれている¹¹。このことからうかがわれるとおり、恐らく「論壇」においては、「コミュニケーション」に対する「メタ・コミュニケーション」や「脈絡」といった区別を、そのまま無批判的に持ちこむことはできない。「論壇時評」というそれ自体も可視的・可読的な「談話＝討議」に定位することは、こうしたオブジェクト／メタの特殊な短絡状況を叙述する上でも好適と考えられる。

以上のような理由から、本章では主として新聞掲載の論壇時評欄を分析し、必要に応じて関連する単発記事や雑誌論文などによって補完することで、<論壇なるもの>の歴史的な規定条件や諸特性を明らかにしていく。具体的な検討対象は、今日全国紙と呼ばれる『朝日新聞』（一九四〇年以前は『東京朝日新聞』に拠った）、『毎日新聞』（一九四三年以前は『東京日日新聞』に拠った）、『読売新聞』三紙に掲載された論壇時評に限った。こうした限定は、ひとえに時間的・能力的な制約をその理由とする。したがって、本章の以下の記述は、対象を先験的に主要全国紙に限定したことによって偏向している可能性があり、その点に留意を要する。また対象期間は、東京朝日新聞が新聞として初めて論壇時評欄を設けた一九三一年一月から二〇〇〇年二月までとし、その間に三紙に掲載された論壇時評の内容を逐次検討している。

(B) 対象の限定

さて一口に「論壇時評」といっても、それを一義的に定義することは実は必ずしも容易ではない。

たとえば、二〇〇六年四月掲載分（批評対象は月刊誌の場合は五月号¹²）から上記三紙の現状を確認すると、「論

¹¹ 同じ新聞文化面に掲載される文芸時評という様式に比しても、「批評」とその対象物との区別が相対的に弱いともいえる。

¹² これ以降論壇時評に関する記述すべてに共通する簡単な留意点だが、新聞に特定月に掲載された論壇時評欄が関説している雑誌記事は、かならずしも「当該月号」に掲載されているわけではない。まず周知のように、日本の商慣習において、「特定月号」の月刊誌は当該月の前月末までに発売されるのが通常である（たとえば新年号は前年一月中旬に発売される）。一方、新聞の「論壇時評」は月刊誌の発売後、当該月後半に掲載されることが多いが、稀に翌月初に掲載がずれ込むこともある（すなわち新年号を対象とする時評は前年一二月後半に掲載されることが多いが、時に翌年初掲載という場合もある。時評が上下回など複数回におよぶ際には月またぎの可能性もある）。したがって本論で新聞掲載時が記述されている論壇時評がいずれの雑誌に対応しているかは逐一確認する必要がある。

第二章 論壇の(不)存在証明

壇時評」の題を冠しているのは、実は『朝日新聞』のみである¹³。これは、同じ二〇〇六年四月現在、三紙のいずれにも「文芸時評」を謳った記事が掲載されていることにくらべて対照的であるといえる¹⁴。

一方、様式面から「論壇時評」欄を同定することも意外に難しい。

一見すると、三紙の記事には共通の様式があるようにも見える。いずれも夕刊の「文化面」に月一回掲載されており、一人の評者が担当する当日の文化面で最大スペースの「主たる時評欄」と、別の評者が注目論文を数点挙げる「短評欄」との組み合わせで成立している。あるいはこの組み合わせは、論壇時評に求められる機能として編集者に了解されている「インフォメーション」と「批評」とを二つながらに充たすための「均衡点」の一つとして意識されているのかもしれない¹⁵。ただし、現在『朝日新聞』と『毎日新聞』の「論壇時評」欄は、著述を業とする社外の者がそれぞれの「人稱性=位格」の下に評者を担当しているのに対して、『読売新聞』では「主たる時評欄」を本社記者が担当している¹⁶という大きな違いもある¹⁷。

さらに時代を下ると、何を「論壇時評」ととらえるか、判断が難しくなってくる。たとえば、八〇年代の一時期、毎日新聞は、雑誌紹介記事として「単一のコラムのなかで、評者が独自のテーマ設定にもとづき複数の雑誌から論文を選び批評する」という「総評」的な欄を設けず、「まがじん」と題した短評欄のみを設けていた。これは毎回雑誌を一冊とりあげて紹介するという内容のもので、評者も匿名である。はたしてこれらも「論壇時評」として取り扱うべきなのか。

新聞記事としての体裁や批評の対象となる「テキスト」の違いから「論壇時評」には様々な変異体が存在する。とはいえ、戦前からの系譜を辿ってみると、そこに一定の範例性を認めることもできる。さしあたり本研究では、「論壇時評」を次のようにあいまいとらえておくことから出発しよう。すなわち、それは「複数の総合雑誌を主たる対象としてその掲載論文を月単位で批評することが予定されている定期記事」である。ここで「複数の」とした理由は、一本の論文ないしは一冊の雑誌のみを個別に取り扱う記事（掲載スペースの小さな短評の形態をとることが多いが）を「論壇時評」とひとまず区別しておくためである。「論壇時評」を謳う、あるいはそれに相当する記事においては、編集サイドも「個々の論文、あるいは雑誌の批評をこえた<共通のテーマ>についての批評」を期待していることがうかがわれる¹⁸。したがって、個別の雑誌や論文についての「インフォメーション」の提供に傾きやすい単独短評記事については本章の考察から一旦は除き、第四章にてより主題的に扱う¹⁹。

第2節 起源という文脈

さて、上記のような暫定的な定義に基づいて、以下時系列順に論壇時評欄の沿革を概観しよう²⁰。

¹³ 『毎日新聞』でそれに対応する記事の題目は「雑誌を読む」、『読売新聞』のそれは「2006 思潮」となっており、「論壇」の文字すら見えない。ただし、『読売新聞』は前月までは「論壇 2006」と題していた。

¹⁴ 詳しくは第三章で検討するが、「文壇時評」欄は、「論壇時評」に先立って、一九〇六年から新聞への掲載が確認されている。そしてそれ以来、標題・様式ともに、論壇時評よりもはるかに一貫したかたちで今日まで掲載されつづけてきている。

¹⁵ 「インフォメーションと批評」という表現は、直接的には安江他（1977）における植田康夫の発言に倣った〔安江他 1977: 20〕。

¹⁶ ただし、前月である三月までは「短評欄」は無署名で論文を列挙するだけの体裁のものであったが、四月より猪木武徳・井上寿一という「社外の著述家」の「人稱=位格」が掲げられることになり、短いながらも「批評」も付されるようになった。

¹⁷ 念のため付言すれば、ここで議論しているのは「社外」と「社内」での批評としての質の差や巧拙などとはまったく独立の問題である。

¹⁸ たとえば三紙の中では現在もっとも価値中立的(?)なタイトルをもつ『毎日新聞』の「雑誌を読む」欄についても、「3人の評者の持ち回り、毎月、もっとも話題のテーマについての総評と、ほかに注目される論文・記事の短い評2編を掲載します」と明記されている。

¹⁹ とはいえ、この区別は単に研究上のエコノミーからの要請にとどまらない。「複数の雑誌を扱いうる長文の総評的文章」と「一本の論文・一冊の雑誌を扱うのが適当な短評記事」とは、その創成期以来「使い分け」られてきており、様式上の特性を相互に規定しあってきた考えられるためである。詳しくは第四章で扱うが、特に戦前においては、上記二種の記事は協業的なものとして設置されており、そのことが「論壇に関与的なもの」を強く規定していた。そしてそれゆえに、「短評」欄が戦後その性格をやや変えるにつれて、「論壇時評」ならびにそれによって関説される「論壇なるもの」もまた微妙に変質することになる。詳しくは第四章を参照。

²⁰ 巻末に、朝日・毎日・読売三紙について、評者別に論壇時評の掲載情報を図に示したものを掲載しているので適宜参照されたい。

・雑誌での時評／新聞での時評

田中紀行によれば、論壇時評欄は一九三一年に端を発しており、雑誌では同年三月から十一月までは『中央公論』に掲載され、新聞では同年十一月八日より『東京朝日新聞』にて連載がはじまったとされる[田中明彦 1999: 192]。ただし『中央公論』の第二回目で高橋正雄が、「論壇時評」の二つのやり方について触れる際に、その呼び名を普通名詞的に用いていることから、あるいはそれ以前にも他の雑誌や新聞に同様の欄がすでに掲載されたことがあった可能性は残る。

一九三一年といえ、九月一八日の柳条湖事件に皮切りに満州事変が勃発し、国際情勢・国内情勢ともに緊迫の度合いを高めていく年である。また『中央公論』の改題（一八九九年）、『改造』の創刊（一九一九年）からはすでに相当の期日が立っており、『文芸春秋』（一九二三年）や『経済往来』（一九二六年、後の『日本評論』）といった後発のいわゆる総合雑誌もすでに創刊されていた。

この年の『中央公論』の論壇時評欄は、三月・七月・八月・九月・十一月の五回掲載されている。三月号担当の石浜知行と四月号担当の高橋正雄は、『中央公論』自体や、『経済往来』、『改造』といった総合雑誌を中心に複数の月刊誌から幾つか論文をとりあげて、批評を加えるという形式をとっている²¹。これは前述した論壇時評の暫定的な定義にも適っている。ただしそこで批評の対象となっている論文の掲載号は、前月号のものである。公刊された雑誌を読んで論文を批評し、その批評が読者の目に触れるまでには一か月のタイム・ラグがある。元の論文についてもある突発的な事象が起こってから論文が掲載されるまで同様のタイム・ラグがあることを考えると、「雑誌での雑誌の批評」には「時期遅れ」の危険性がつきまとうことになる。そもそも、雑誌を定期購読している者でもなければ、批評を読んでから元の論文にあたることは実はかなり難しい。こうした事情もあってか、これ以降の『中央公論』の論壇時評欄は「雑誌論文の批評」の性格を徐々に弱める。八月号を担当した阿部勇は、わずかに猪俣津南雄や大森義太郎の議論について元の論文を明示しないまま論評するのみで、スペースの大半を海外の統計資料などを用いた自身の大恐慌論に充てている。九月号の杉森孝次郎はいわゆる総合雑誌の論文と同程度に、『東京日日新聞』や『国民新聞』、『読売新聞』などに掲載された直近の諸論考を採り上げる。さらに十一月号の平貞蔵の場合、雑誌論文は、平自身のイギリス労働党論のあたかも「参考資料」であるかのように、数カ所でもとめて著者名と題目、掲載雑誌が列挙されるにとどまるようになる。そしてこの後、後付け的に閑説することによって「論壇に関与的なテキスト」を指定することになる論壇時評欄は、こと総合雑誌それ自体の上では一旦中絶するのである²²。

一方、同年十一月に『東京朝日新聞』で開始された論壇時評欄は、「複数の総合雑誌を主たる対象としてその掲載論文を月単位で批評することが予定されている定期記事」という先の暫定的な定義をほぼ一貫して守っている。新聞初の論壇時評欄は、「論壇時評——十一月の雑誌を読んで」と題されて、朝刊に十一月八日から一〇日までの三日間連載された。評者は、マルクス経済学者で、八年前に第一次共産党事件に連座して早稲田大学講師を辞してからは在野の評論家として自らも総合雑誌に精力的に寄稿していた猪俣津南雄であった。掲載面には特に明示的には呼称は付されていないが、連載小説、随筆、短評欄、学芸だよりなどとまとめて掲載されており²³、そのなかでも論壇時評には最大のスペースが充てられている。この『東京朝日新聞』の論壇時評欄は、途中、標題を若干に変え

²¹ 後に再確認するが、石浜は、冒頭で《公論氏の要求で》雑誌論文を批評していることを明記している [石浜 1931: 113]。

²² 一方、同じ一九三〇年代には、雑誌メディアが新聞を批評の対象とする動きもあった。『文芸春秋』には一九三二年から翌三年までS・V・C名義で「新聞紙匿名月評」が掲載されたが、森洋介によれば、これは当時新聞記者をやめていた鈴木茂三郎の筆になるものであった [森 2003: 111]。また三六年から翌三七年までQ・Q・Q名義で『新潮』に掲載された「新聞学芸欄批判」は、新聞の論壇時評や文芸時評にも閑説した。あるいは「雑誌で雑誌を批評する」よりも「雑誌で新聞を批評する」方が、タイムラグが少ないことも影響しているかもしれない。

²³ 一九二〇年代、『東京朝日新聞』は、連載小説や評論、随筆などを掲載する面に「学芸」と表記していた時期があったが、論壇時評が掲載される一九三一年頃までにはこれが消えていた。

第二章 論壇の（不）存在証明

ながらも²⁴、一九三六年四月まで四年半にわたり毎月同じ面に掲載される。その後は数回断続的にとりあげられるが（したがってこの時点で「月評」の性格は喪われる）、同様の様式を具えたものとしては一九三七年九月の戸坂潤「時局と評論」を以て中絶する²⁵。この間は基本的な様式に変更はなく、毎月社外の者が頭名で評者を交替し、それぞれが一月当たり三日間から五日間の連載で、いわゆる総合雑誌の論文を中心に他の刊行物のテキストを批評していた。

・新設のタイミング

さて、一九三一年十一月の論壇時評欄の新設に少なからぬ影響を与えたと考えられるのが、同年五月一日からの朝刊増ページであろう。この増ページは、前年一九三〇年に講談社の野間清治に買収された『報知新聞』の付録強化策に対抗して、『東京日日新聞』との協定の上実施されたものとされる〔朝日新聞社史編修室 1970b: 397〕。この増ページは《ラヂオ版の新設に加ふるに家庭欄、趣味欄も拡大》²⁶するものであり、結果として「新聞の雑誌化」〔杉村 1936: 192〕を加速することになる。こうした「新聞の雑誌化」の動きは『東京朝日新聞』に限ったものでなく、増ページを契機に、この年『東京日日新聞』、『時事新報』、『読売新聞』などの在京各社もそれぞれ学芸部を強化する動きが見られる²⁷。論壇時評もこうした流れに沿って企画された新機軸のひとつであった。

元来、新聞メディアと書籍や雑誌といった他の出版メディアとは営業政策上において、あるいは内容面において非常に密接な関係を有していた。すなわち、同じ活字メディアとしてかなりの程度読者層を共有していると考えられることから、出版社は新聞を重要な広告媒体として利用しており、また新聞社も各種出版情報をコンテンツとして大きく取り扱っていた。たとえばこの時期の『東京朝日新聞』は朝刊第一面を全面広告に充てており、書籍や雑誌などの出版広告のみをそこに掲載していた。また、記者以外の「独立の」専門家による新刊書評欄や雑誌掲載の創作物の批評欄である文芸時評欄もすでに大正期より設けられており²⁸、他の刊行物についての「広告」とも「読み物」とも厳密には区別しがたいテキストが新聞紙面にすでに進出していたのである²⁹。こうした経緯の下に、総合雑誌の創作物以外のテキスト――論文――についても、外部の専門家による新たな批評欄を設けるという発想が出てくるのは、ある意味自然な流れといえるかもしれない。

しかしながら、一面では一九三一年という年は、総合雑誌に掲載された論文を取りあげてそれに批評を加えることにすでに困難が伴うような時期に入ってもいた。吉野作造が『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」（一九一六年）を発表してから十五年、『改造』が「労働問題・社会主義号」を発行（一九一九年）してから十二年が経過したこの年は、前述の通り満州事変が勃発した年でもあった。同年十一月八日に掲載された

²⁴ それまで「論壇時評」ないしは「論壇月評」だったタイトルが、一九三二年八月以降は「～月の論壇」となる。

²⁵ 一九三七年九月二日から四日まで連載された戸坂の「時局と評論」は、タイトルに「論壇」「時評」のいずれの語もないが、『中央公論』や「改造」などいわゆる総合雑誌に掲載された論文の批評という体裁をとっており、それ以前の論壇時評欄との強い形式的連続性が認められる。これに対して三九年六月二四日から二六日の山川菊枝「社会時評」や同年十二月十三日から十五日の清水幾太郎「今年の論壇への回想」は、タイトルに「論壇」や『時評』といった語を冠すものの、明示的に他のテキストを批評しておらず、それ以前や戦後復活して以降の論壇時評とはかなり性格を異にする。

²⁶ 同年五月一日付朝刊に掲載された社告より。

²⁷ 朝日新聞社史編修室〔1970b: 397-398〕は、当時の業界誌『新聞及新聞記者』六年六月号の記事「増ページ悲喜劇――記者争奪戦等々」を引用するかたちで、各社学芸部の再編強化の動向を紹介している。

²⁸ このように見ると、「社外の専門家による」という形式は、あるいは「広告」との距離を維持しながら「批評」を可能にする様式として当初導入されたのかもしれない。

²⁹ たとえば東京朝日新聞社〔1927: 81〕は、専門家による新刊書批評が自紙の発明であり、近年他紙による模倣追従が進んでいることを指摘した上で、《仔細に観察する読書子は、公平親切に読書家のために書かれたる批評と、その実は書肆の広告の別働隊に過ぎないやうな活字の行列とを容易に識別しうるのであらう》〔傍点強調は引用者〕とわざわざ述べている。

猪俣津南雄による論壇時評の初回からして伏せ字が用いられていることからもうかがわれるように³⁰、一九二八年の治安維持法改正以来、総合雑誌掲載論文に代表される「論壇的なもの」に対しては、すでにかなり直接的な規制が課されるようになっていたのである。

にもかかわらず、この時期になって論壇時評が成立するようになった遠因もまた、そうした規制に求められる。田中紀行 [1999: 190] の指摘するところだが、一九二〇年の森戸事件を皮切りに、一九二八年の三・一五事件、一九三〇年の共産党シンパ事件によって、森戸辰男・河上肇・大森義太郎・石浜知行・佐々弘雄・向坂逸郎・山田盛太郎・平野義太郎・三木清ら多数の学者がすでに大学を追われていた。『東京朝日新聞』で論壇時評が連載中のあいだには、一九三三年の滝川事件や翌三四年の教授グループ事件によって、上記リストにさらに佐々木惣一・末川博・恒藤泰・大内兵衛・有沢広巳らが加わる。こうしていわば「下放」[高田 2005: 148] された元大学教官たちが総合雑誌などに業として寄稿するようになるのがちょうどこの時期になる。もともと日本には総合雑誌の編集者が寄稿を依頼できるようなフリーランスの書き手、《一人歩きの出来るジャーナリストが極めて少い》[杉村 1936: 199] ことが問題となっていたが、上記の元大学教官たちはこの空隙をある程度まで埋め合わせ、以て「論壇なるもの」の一端をになうかたちとなったのである。実際、論壇時評という一様式に着目してみても、上記リストに上がった人々の多くが、あるいは評者として、またあるいは批評対象となる論考の著者としてそれぞれ名を連ねている。様式として見た場合、今日見られる論壇時評欄は、この一九三〇年代前半の『東京朝日新聞』にてすでに相当程度確立していたといえるが、その背景には当時の言論統制策とのこうした緊張関係が存在したのである。

こうした言論統制との緊張関係が高じたとき、戦前の論壇時評欄は途絶することになる。すでに一九三四年から総合雑誌の編集部が、従来の「フリーランスの書き手」に代えて、「素人」すなわち実務家を登用する新傾向が出てきたことを指摘する声があった³¹。その後、一九三五年の天皇機関説事件、翌三六年の二・二六事件を経て、三七年の第一次人民戦線事件、翌三八年の第二次人民戦線事件によって、治安維持法違反の容疑で多数の学者グループが検挙され、保釈後も言論活動に制限が加えられる。《総合雑誌はこれまでの執筆者の大半を失ふとも、これまでの読者をふり棄てはならない》[大熊 1938: 7]。総合雑誌の執筆陣に動揺が見られたこの時期を境に、「複数の総合雑誌を主たる対象としてその掲載論文を月単位で批評することが予定されている定期記事」としての論壇時評は姿を消すことになる³²。

・ 関説様式の伝播と中絶

それでは、戦前の『東京朝日新聞』において生成され、様式として一定の確立をみたこの論壇時評欄は、他紙にはどのように波及していったか。たとえば『読売新聞』や『東京日日新聞』（東京における『毎日新聞』の前身）も、前述の競争激化を受けて「新聞の雑誌化」を進めるなかで、やはりそれぞれに論壇時評の導入を図るのである。

『東京日日新聞』の場合、『東京朝日新聞』が論壇時評欄を導入してから約二年後の一九三三年一〇月に、評論家の大宅壮一に「十月の中間読物と論文」を担当させている。これは十月六～一二日に五回に分けて連載されたも

³⁰ 《××は真ッ先きに言論機関へ来た。プロレタリアートの言論機関に対しては、前からほとんど連続的な発売禁止が襲つてゐたが、いまや多数の「階級的中立」を標ぼうする総合雑誌のごときにさへも、発売禁止及び類似の××が強く加はつてきた。》[猪俣 1931: 9]

³¹ たとえば室伏高信は、自身が担当した『東京朝日新聞』の論壇時評のなかで、従来の職業評論家にかわって久原房之助、武藤山治、松岡洋右、荒木貞夫、小林一三、平沼騏一郎、鈴木喜三郎、関根軍平、鳩山一郎、近衛文麿、中島久萬吉といった人物が新たに総合雑誌に寄稿する傾向が見られることを指摘し、そこに一定の清新さを認めながらも、自己宣伝への墮落の危険性もまたはらまれていると述べている [室伏 1934: 9]。

³² ただし、四、五段組で複数回連載されるような「総評」的な論壇時評欄が消失したことが、「新聞紙上での雑誌論文への関説」が完全になくなってしまったことを直ちに意味しない。三九年一月よりコラム「槍騎兵」欄で雑誌毎の匿名短評欄が復活し、『改造』や『中央公論』、『文芸春秋』、『日本評論』（『経済往来』の後継誌）といったいわゆる総合誌も取りあげられるなかで、論文や中間物も批評の対象となっているからである。こうした短評欄も含めて総合雑誌の論文への関説がなくなるのは、四一年に入ってからである。

第二章 論壇の（不）存在証明

のであり、雑誌に掲載された読み物のうち、文芸時評の対象となる創作物以外の残余が批評の対象となっている。実際には『中央公論』や『改造』からは一編も取りあげられておらず、扱われているものは文芸評論や随筆などが大半だが、それでも『東京朝日新聞』で直前（同年八月号分を担当）に論壇時評を担当している大宅壮一に「論文」も対象に加えて月評を依頼していること自体やはり新機軸を狙ったものといえる。

二ヵ月後の一二月八～一四日には、ふたたび大宅壮一が今度は「論壇時評」を明確に謳って五回連載で月評を担当している³³。この他にも、青井陽平名義で《通俗雑誌、婦人雑誌を一瞥し、大衆文学や中間読物を批評》する「雑誌時評」欄（全七回）も設けられており、このなかでは小説などとともに、ルポルタージュやインタビュー記事なども取り扱われている。ちなみに、同じ一九三三年十二月には、この『東京日日新聞』に改造社（二八日）と講談社（二九日）が文芸時評や論壇時評の体裁・文体を模した全面広告を掲載していて興味深い。このことからこの時期、「新聞紙上での雑誌テキストへの関説」という様式が読者に対して一定程度の訴求力をもつという期待が生じていたことがわかる。

一方『読売新聞』は、『東京朝日新聞』に遅れること一年あまりの一九三三年二月から「論壇時評」欄を設ける。翌三四年には『東京日日新聞』に入社することになる評論家の木村毅が初回を担当した『読売新聞』の論壇時評欄は、「毎月社外の者が頭名で評者を交替し、それぞれが一月当たり三日間から五日間の連載で、いわゆる総合雑誌の論文を中心に他の刊行物のテキストを批評する」という『東京朝日新聞』の様式にほぼ倣ったものとなっており、評者も両紙でかなり重複している³⁴。たとえば、三三年五月二六日に文部省が京大法学部教授滝川幸辰に休職処分を下すと（いわゆる滝川事件³⁵）、まず『東京朝日』が同学部教授恒藤恭に六月二八日から七月一日にかけて「七月の論壇」を担当させ、そのなかで同事件に関する雑誌論文などを批評させた。すると『読売新聞』は九月二日から七日まで同じく恒藤に「論壇時評」を依頼し、やはりそこでも同事件関連の論文を扱わせるのである³⁶。

『読売新聞』は明治期には硯友社と結んで「文学新聞」として売り出していた時期があり、また文芸時評欄も新聞ではもっとも早く一九〇六年に設けるなど、もともと文芸・学芸面の充実に積極的な新聞で、「文壇なるものへの関説」は盛んであった。そうした背景もあってか、論壇時評欄が連載された一九三〇年代のこの時期、同紙には時評以外にも「論壇なるもの」を規定する「人間関係」や「全体の見取り図」を見定めようとする記事がしばしば掲載されることになる。たとえば毎年正月に掲載される座談会企画や大宅壮一の「非常時思想戦線分布図」（三三年七月）、杉山平助の「雑誌界の諸相と支配傾向」（同一〇月）、向坂逸郎の「日本思想界分布図」（三五年六月）などで、さまざまな論者の「位置どり」が第三者から繰り返し吟味されるかと思えば、あるいは「わが信ずるイズムと人」（同年七月）のように《論壇各方面の人が自己の信奉してゐるイズムを語り、その仲間のうちから、これはと思ふ人物を紹介する》[杉山 1935: 10] 企画も用意される。これらはいわば、「立ち位置」や「人間関係」が大きな役割を果たす（と了解されていた）既知の「文壇」との類比で、「論壇なるもの」の実定性を触知しようとする試みともいえる。

こうして『東京朝日新聞』にはじまった論壇時評欄は、その「毎月社外の者が頭名で評者を交替し、それぞれが一月当たり三日間から五日間の連載で、いわゆる総合雑誌の論文を中心に他の刊行物のテキストを批評する」とい

³³ もっともその内容は、「総合雑誌の論文の批評」という「標準的な」体裁にはおさまっておらず、個々の論文ではなく人物評論の色彩が強かったり、あるいは文芸評論の問題を多く扱ったりしている。後述する論壇時評の超-ジャンル性という問題にもかかわる部分だが、とはいえ大宅のこうしたスタイルは、実は前述の『東京朝日新聞』で「論壇時評」を担当している際にも見られたものであった。

³⁴ 巻末の論壇時評欄評者一覧を参照のこと。

³⁵ 司法試験委員でもあった刑法学者の滝川が三二年に行った講演内容が無政府主義的であると文部省・司法省で問題となり、翌三三年の「司法官赤化事件」との関連で政治問題化、文部大臣の罷免要求と京大側の拒否を経て、文官分限令に基づき文部大臣が滝川の休職処分を決定した。法学部は全教官が辞表を提出して抗議したが、総長が交替し収拾案が提出されると、残留組と辞職組とに分裂、最終的には教授以下二〇余名の教官の辞職で決着した。

³⁶ この間、七月に恒藤は京大を辞職している。

う閑説の様式をなぞるかたちで、他の二紙へと転移していく。評者としてあるいは被引用者として前景化される「人称=位格」もかなりの程度三紙で重なっており、新聞毎の特段の傾向性などはみてとれない。後述するように、この時期の論壇時評においても「論壇なるもの」の外延、すなわちそれに関与的な「談話」や「人称=位格」の範囲が曖昧なことは意識されていた。しかしながら、引用/被引用の関係を毎月相互に入れ替えながら、新聞の枠を超えて毎月事後的な閑説が積み重ねられていくことによって、外延の決定を先延ばしにしながら「論壇に^{レリバント}関与的なもの」としての了解可能性が開かれていくことになる。その意味で、「論壇時評」なる事後閑説の様式が生成し、その名を冠した紙面構成を主要三紙がそれぞれ少なくとも一度は採用したこの時期を、一つの分水嶺として捉えることは可能であろう。

ただし、後発組である『東京日日新聞』や『読売新聞』の論壇時評欄は、『東京朝日新聞』のそれよりも先に途絶する。『東京日日新聞』からは、「論壇時評」の語が、一九三三年十二月の開始からわずかに二回目、翌三四年の二月八～十一日の戸坂潤担当回を以て早々に消える。その後は、三月号を対象とした青井陽平名義の「雑誌時評」が『改造』や『中央公論』のいわゆる「中間物」のみを取りあげたり、あるいは七月号を対象に戸坂潤に「創作評」を担当させたりするだけで、「論壇なるもの」への事後的閑説という性格はほぼ完全に払拭される。一方、『読売新聞』の論壇時評欄は三三年二月の開始以来、題名に変遷などはあるものの、三五年三月までの二年余りはほぼ毎月掲載された。しかしながら、同年八月から匿名短評欄「壁評論」にて雑誌別の批評が行われるようになる一方で、「総評」的な論壇時評は同年十月号を批評対象とする石浜知行「時論的に見た論壇」を最後に消失する³⁷。

そしてすでに見たように、一九三六年の二・二六事件以降不定期化した『東京朝日新聞』の論壇時評欄も、翌三七年一二月の人民戦線事件第一次検挙を待たずに同年九月をもって中絶する。新聞紙上での雑誌論文の批評自体は、その後も匿名短評欄で雑誌別に一九四〇年まで行われていたことが確認できるが(たとえば「槍騎兵」というコラムを利用した「雑誌評」)、そこでは小説などの創作物と区別されてはいない。同時期になお文芸時評欄は独立に存在していたことを考え合わせると、最長で都合六年弱しか存続し得なかった論壇時評は、微妙な諸力の均衡の上のみ成りたちえた脆弱な様式だったと評価できるのかもしれない。しかしながら後付的に見れば、かかる短期間しか存続し得なかった企画であっても、「論壇時評が主要紙を横断する単一の様式としてすでに同定されていた」と了解する余地を十分に切り開いたともいえる。そしてこうした了解が、「論壇なるもの」をめぐる戦後のやりとりを大きく規定していくことになる。

・範例性の確立

戦後、早くも一九四六年二月には、『朝日新聞』学芸欄に中野好夫の「二月号の総合雑誌評」が掲載されている。当時は新聞が二面刷りで発行されるほど紙面が限られていた時期でもあり、複数回にわたり批評が続くというかたちこそとっていない。しかし、社外の者が自己の名のもとに、「複数の総合雑誌を主たる対象としてその掲載論文を月単位で批評する」という戦前の論壇時評欄の様式は基本的にそのまま引きつがれている。またその時期を見ても、たとえば『世界』の創刊は同年一月のことであり、戦後、『中央公論』や『改造』などの従来雑誌が復刊するのに加え、新興雑誌が多数創刊されるなかで、かなり早い段階でそれらに対する事後的閑説が試みられていたことになる。

だがその後月評形式は長続きせず、次の「雑誌評—四月号」こそ匿名ながら月評形式は維持するものの、その後は月次にこだわらずに複数の雑誌論文を断続的に講評する匿名欄に移行する。有名な丸山真男の「超国家主義の論理と心理」(『世界』一九四六年五月号掲載)が《論壇のマンネリズムの壁にも漸く穴のあく時が来た》と評され

³⁷ 先に紹介したQ・Q・Q名義の『新潮』「新聞学芸欄批判」は、一九三六年七月号で《文芸時評にはいろいろ問題があり、論壇時評などもこの頃では廃止になった形であるが》とした上で、その復活の必要性を説いている [Q・Q・Q 1936: 52]。

第二章 論壇の（不）存在証明

るのもこの時期であり [朝日新聞 1946:2]、その批評のスタイルは、どちらかといえば、論壇時評欄よりも第四章で後述する戦前の匿名短評欄のそれに近い。さらに翌四七年十月以降は、「雑誌評」欄は雑誌別に論文も創作も一段で取り扱う短評欄へと縮小していく。こうした変化の背景には、新聞自身の紙面上の制約とともに、当時の雑誌発行スケジュールの不安定さ³⁸なども影響していた可能性がある。

結局、社外の者が自己の名のもとに、「複数の総合雑誌を主たる対象としてその掲載論文を月単位で批評する」という様式で、論壇時評が主要紙に毎月継続して掲載されるようになるのは、サンフランシスコ講和条約が九月に調印され主権回復が政治日程に入ってきた一九五一年も後半になってからであった。『展望』や『評論』、『潮流』といった新興雑誌が徐々に淘汰され、講和論争も一段落ついてから、論壇時評という閑説様式が本格的に復興したことになる。そして五〇年代後半までには、『朝日』・『毎日』・『読売』の主要三紙に、戦前と相当の連続性をもった論壇時評欄が出揃う。

ただし事後的な閑説様式としてみた場合、戦後の論壇時評欄は戦前とは異なる特徴をいくつかもっている。第一に、戦前にくらべて、戦後の論壇時評欄は一月ごとの連載回数が減っている。一九三〇年代には毎月三～五回程度の連載となっていたが、五〇年代になってふたたび時評欄が設けられた際には、毎月一回の記事となっていた。もちろん、朝夕刊に分かれていて朝刊だけでも十ページを超えていた三〇年代に比べて、朝刊のみ四ページ発行だった五〇年代前半は絶対的にスペースが不足していた。しかし、その後頁数が大幅に増加しても、戦後の論壇時評は一月当たりほぼ二回程度にとどまった。ある意味で、「論壇なるもの」への事後的閑説に接する頻度や量は、戦前よりも低下したともいえる。第二に、戦前はほぼ毎月評者が交替していたのに対して、戦後は一人の評者が担当する期間が長期化し、後年になると年単位での交替が一般的となる。こうした戦前と戦後での論壇時評欄の相違は、「論壇なるもの」についての事後的な閑説の様式に、いくつかの偏倚をもたらすことになる。

論壇時評は、個々のテキストに対する直接的な批評とともに、それを超えるより「全体的なもの」、「論壇なるもの」への閑説を促す様式といえる。毎月交替する評者が三～五日間連載で批評をしていた戦前は、初日などに個々の論文を離れて論壇全体について閑説されることが少なくなかった。結果として、論壇全体への閑説が比較的頻繁に観察されることになる。これに対して、特定の評者が毎月一・二回のペースで長期にわたって批評をするスタイルとなった戦後は、各評者は自分が担当する初回、ないしは最終回に論壇全体に閑説³⁹、中間月はルーティンとして個々のテキストの批評に終始する傾向も出てくる。

さらに、一人の評者が時評を担当する期間が長期化すると、その分、評者と被引用者との相互性についての了解はより喚起されにくくなり、テキストとメタテキストとの境位の相違が相対的に強く意識されやすくなる。戦前は評者の大半が総合雑誌などへの主要な寄稿者でもあったことから、毎月評者が交替することによって、評者の被引用者とのあいだの水平的な関係性、批評それ自体の「談話＝^{ディスコース}討議」的性格が前景化しやすかったと考えられる。それに対して、被引用者に対する評者の事後的閑説という一方向的関係が相対的に長期化する戦後は、批評が垂直的・非人稱的な「マス・コミュニケーション」的語りへと少しずつ漸近していく余地が生じてくるのである。

とはいえ、かかる偏差をはらみながらも、一九三〇年代の論壇時評という文脈に規定されかつそれを意味づけながら、戦後の論壇時評欄は一定の範例性を獲得するようになる。たとえば一九六〇年時点では、主要三紙のいずれもが、毎月上下二回制の論壇時評欄をもち、社外の評者に複数月担当させているのである（『朝日新聞』桑原武夫

³⁸ 再開後初の論壇時評でも次のように述べられている。《発行が遅れて本稿執筆までに筆者の読んだものは「中央公論」「改造」「世界」「新生」「評論」「展望」以上――「潮流」「人間」等未だ入手せず》[中野 1946: 2]。用紙不足のなかで新興雑誌が乱立したため、その後翌四七年には総合雑誌に六四頁の枠がはめられる [中野 1947: 2]。

³⁹ 少し後代になるが典型的には次のような言い回しになる。《そこで今月は初回ということもあり、個々の論文を月並的に取りあげるよりも、とりあえずまず、施政方針といっちはいささか大袈裟だが、いわばわたしの時評方向とでもいったものから述べておきたい。》[中野 1977: 5]

「論壇時評」、『毎日新聞』加藤周一「今月の論調」、『読売新聞』田中美知太郎「論壇時評」)。また、掲載面が夕刊にそろってくるのも六〇年代のことである⁴⁰。もっとも、この朝刊から夕刊への移行は、文化面や学芸面、ならびにそこに掲載される論壇時評欄のリーチが小さくなることを意味し、編集サイドにとっての相対的優先度がこの頃すでに低下しつつあることをもうかがわせるのだが。

・マス・コミュニケーション的語り口への漸近

こうして様式としては一旦収斂しつつあった論壇時評欄にふたたび拡散傾向が現れてくるのが一九七〇年前後である。とりわけ主要三紙のうちで『毎日新聞』の変化はもっとも大きい。まず一九七〇年までに同紙は論壇時評欄の評者を、社外の者から自社の記者に変更する。「今月の総合雑誌から」と題された同欄は、記者の個人名を明記した上で複数の雑誌から注目すべき記事を取りあげて月評形式で論じていくというものである。これは一見するとそれまでの論壇時評欄と大差がないようにも見える。しかしながら、評者と被引用者との関係という点で見ると、この「記者による論壇時評」の成立は重大な意義をもつのである。

他紙になるが、読売新聞文化部長の経験がある高野昭は一九七七年に次のように述べている。

《高野 そういうことでは各社の、いわゆる編集委員制度がありますね。今までは評論家を書くと言われていたような問題について記者が書く。専門的な知識とキャリアを持って、作り手と受け手の間に立って、作り手の論理を受け手にわかるような論理に立って、一種の翻訳というか、そういう形で伝えるジャーナリストは出つつあると思います。これからますますその必要性は増えると思うんです。》[安江他 1977: 18]

上記の「記者による論壇時評」も、会社こそ違え、こうした作り手と受け手とのあいだの「翻訳」という試みの一環と捉えることもできる。こうして一九三〇年代以来の論壇時評という様式から「社外の者による」という要件が外れることによって、評者と被引用者とのあいだの相互性・水平性という了解は、六〇年代以上に大きく変質する。社外の者が評者となっている場合、基本的な構図は、「個人の資格で語られている」、「人称性＝位格」が前景化した雑誌論文について、同じく「人称性＝位格」を前景化しながら新聞紙上で閑説するというかたちとなる。これに対して、新聞記者が評者となる場合、たとえ個人名が明記されていたとしても、その様式上、他の一般「記事」との区別はより難しくなる。平生から総合雑誌などに積極的に寄稿している記者が時評を担当するなど、彼または彼女のテキストもまた事後的に「論壇なるもの」に^{レリバン}関与的なものとして閑説される蓋然性が高いことが、それこそ^{属人的}に強調されることでもないかぎり、「第三者」たる記者が「取材対象」たる論壇について伝えるという「マス・コミュニケーション」的語り口へ漸近していくことは避けえないだろう⁴¹。

たとえば、詳しくは後述するが、論壇時評において「論壇の読みにくさ」は、戦前から近年に至るまで頻繁に取りあげられてきたモチーフである。これまで数多くの論者が、総合雑誌の厚さやその文体の晦渋さなど、その「読みにくさ」を言挙げしてきた。そこで「読みにくさ」という「主観」が表明されることは、評者の「人称性＝位格」を前景化し、自己の「批評」をもまた水平的な「談話」の相に差し戻すための一種の触媒としても機能しているのである。しかしながら、七〇年代以降に登場する「記者による論壇時評」では、この「論壇の読みにくさ」がラ

⁴⁰ 三〇年代には『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『読売新聞』のいずれもすでに夕刊をもっていたが、文化面や学芸面はすべて朝刊に設けられており、論壇時評欄もそこに配されていた。しかし、戦後『読売新聞』がいち早く文化面を夕刊に設け、論壇時評もそこで扱うようになると、復活当初は朝刊に掲載していた『朝日新聞』、『毎日新聞』ともにそれに追随する。

⁴¹ ある意味ですでに述べたことの繰り返しになるが、ここで論じているのはあくまで様式の次元の問題であり、このことは学芸部の記者などが事実として「人称性＝位格」を前景化したかたちで言論活動を行いうるかどうかは、直接には関係しない。実際、一九七〇年代に『毎日新聞』で「今月の総合雑誌から」を担当した高瀬善夫は、その後個人名で多数の著作を発表している。とはいえ、この事実と、七〇年代当時の高瀬名義の論壇時評が評者と被引用者との関係性についていかなる了解を励起しやすかったかという問題とは、なお独立に扱いうると思う。

第二章 論壇の（不）存在証明

イト・モチーフとならない。時評が「記事」へと漸近し、「人称性＝位格」はむしろ後景化すべきものとなっていればこそ、たとえ事実として記者が「読みにくさ」を感じたとしても、それを表明することは、論壇時評には関与的でない「主観性」の吐露、ニュースとしての価値がない単なる個人的な「弱音」として了解されるのである。

こうした「マス・コミュニケーション化」の延長上に、『毎日新聞』からは、一九八〇年を待たずに「複数の雑誌から論文を選んで月評形式で論じる」かたちの論壇時評欄が一旦消失する。すなわち、雑誌への関説は《非常に要領のいい雑誌の紹介》[安江他 1977: 21]である「マガジン」という短評欄に限定されるのである。これは、たとえば『中央公論』や『思想の科学』などから『猫の手帳』に至るまで、月に一〇冊前後の雑誌を選んで、匿名の評者が一日一冊ずつその内容を紹介するというものであり、新聞から「月評・総評」的な論壇時評欄が消失した際に、これまでもみられた形態であった。『毎日新聞』が「社外の者を評者として、複数の雑誌から論文を採り上げて月評形式でまとめて批評する」論壇時評欄をふたたび設けるようになるのは、九〇年代以降のことである。

一方、同じく一九七〇年前後から、『読売新聞』でも論壇時評欄に変化が見られるようになる。まず六八年から、複数の評者による交替制が導入される。これは、戦前のように毎月評者が変わるのではなく、一年間にわたって三人の評者が月交替で上下二回の時評を担当するかたちで始まった。その後、一旦は評者一人の様式に回帰するが、七六年からは今度は複数の評者が毎月それぞれ単発の時評を執筆するスタイルに再度変更される。この変更により、一人の筆者が一回の月評で書く原稿の長さは半減し、その分よりコンパクトな記述が求められることになる。

実はこの時期、単独評者による批評のかたちを採っている他紙においても、実際には複数の協力者が存在することが幾度か表明されている⁴²。現在見られる論壇委員会のような制度がいつごろ整備されたかは不明なものの、すでにこの頃までに、なんらかの集団製作の要素が論壇時評に組み込まれつつあったことがうかがわれる。こうした編集方針の背後にある考え方を前述の高野昭は次のように説明する。

《それから、単眼で見ると、どうしても偏りができます。だから、複眼という意味も含めて二人ないし三人、複数以上の方をお願いしているわけです。文学の場合は、時評者の強烈な主観の面白さということもありますから、文芸時評は一人がいい。むしろ、強い個性でやっていただく。論壇時評は、筆者の個性を無視するわけじゃないのですが、なるべくたくさんの情報を読者に知ってもらうためにも、関心を多少分散させてすくいあげたい。》[安江他 1977: 21]

ここでは網羅性への指向は情報提供機能の質的向上の相で捉えられている。論壇時評における主観や個性といった「人称性＝位格」は、十全たる情報の提供を「偏向」させる危険性もはらんだものとして了解されているのである。その意味で、複数の「人称性＝位格」を紙面に登場させることによってその「偏り」を抑止しようとするこの時期の『読売新聞』の論壇時評欄は、記者が評者となることで「人称性＝位格」を後景化する『毎日新聞』のそれと、情報の提供を第一義とする点で一脈通ずるところがあったといえる。事実、八〇年代なかばになると、『読売新聞』の論壇時評欄はいま一度大きくかたちを変えて、『毎日新聞』を追いかけるように、社内の記者が時評を担当する様式となるのである。

こうした他の二紙に比較すると、主要三紙の中で『朝日新聞』の論壇時評欄は、様式的にはもっとも変化が少なかったように見える。たとえば、他紙では題目も度々変更されているのに対して、『朝日新聞』の場合、一九六〇年に「論壇時評」という題目が復活して以来、今日に至るまでそれが存続している。また同じく六〇年頃までに、三紙の論壇時評欄がいずれも戦後的な範例へと収束して以来、社外の一人が一年以上の長期にわたって評者を担当し、雑誌を中心に複数のテキストを選んで月評形式で批評していくというスタイルを、結果としてもっとも長く守ることになったのが『朝日新聞』であった。戦前もっとも早くからもっとも長期にわたり論壇時評欄を設けて

⁴² たとえば久野収は『朝日新聞』で担当した論壇時評の最終回で《メモを出してくれ、討論に加わってくれた友人たちの援助がなければ、時評はこの程度にさえまともならなかったであろう》[久野 1972: 7]と述べている。また武者小路公秀も、同じく『朝日新聞』で《いちおう、私が責任を持ってまとめますが、この欄は何人かの方々と共同討論の産物であることをあらかじめお断りし》[武者小路 1976a: 3]している。

いたことを考え合わせると、ひな型を提供することによって、論壇に^{レリバント}関与的なものをめぐる^{コミュニケーション}関連づけを『朝日新聞』が規定したところは少なくなかったと考えられる。

とはいえこの『朝日新聞』の論壇時評欄も、一九九〇年代半ば以降、その様式を変化させる。すなわち、「論壇時評」は上下二回から月一回に減り、代わって別の評者による「ウォッチ論調」欄が新設され⁴³、さらにその他の評者三人による短評欄「私の三点」が付け加わるのである。一人当たりの原稿量を減らして評者を複数化するこの変更は、七〇年ごろから十五年ほど『読売新聞』が実施した論壇時評欄の改革にほぼ重なるものであり、より網羅的な情報提供を指向したものと考えられる。ただし「ウォッチ論調」欄は六年で終了するため、結局二〇〇〇年以降は一月に一回「論壇時評」欄だけが掲載されることになり、その後それに短評欄だけが付されるかたちとなる。

平均すると四回程度連載され、場合によっては原稿用紙一五枚を超える戦前と、原稿用紙六枚程度で単発の戦後とでは、論壇時評による閑説の了解のされ方も当然異なってくると考えられる。この掲載スペースの縮小傾向は『朝日新聞』に限られたものではない。『毎日新聞』の場合、中断を挟んで「記者による時評」のかたちで論壇時評欄が復活して以降、複数の評者による座談会や「総評+座談会」に移行したときも月一回の掲載となっている。また『読売新聞』もそれまで毎月上下二回掲載していた「記者による時評」を九二年以降は一回に減らしている。前節冒頭で示した、二〇〇六年現在の三紙の論壇時評欄の表面的な収束傾向——夕刊「文化面」に月一回掲載される、「主たる時評」欄と「短評」欄との組み合わせ——も、こうした変化の延長線上に生じた現象なのである。

一九三〇年代に生成した論壇時評欄は、こうしてさまざまな経路を経ながらも、現在のところ主要三紙に承継されている。それは様式として、総合雑誌を初めとするメディアの選択、閑説の対象とするテキストの選択、あるいは時評を執筆する評者の姿勢などを規定し、さらに全体として論壇なるものの措定のされ方も規定することになる。次章では、論壇時評欄の歴史を通じて観察される、こうした様式から来る特徴をいくつかの観点に分けて検討しよう。

⁴³ 「ウォッチ論調」欄については、《論評の対象を硬派雑誌からさまざまなタイプの雑誌に幅を広げ、社会現象の底流を読みと》〔朝日新聞 1994: 11〕るものとされ、当初は「硬派雑誌」を扱う「論壇時評」欄との役割分担が期待されていたようである。事実、「ウォッチ論調」は当初は一般週刊誌やテレビ番組などそれまで扱われることの少なかった「サブカルチャー」的な材料も採り上げていたが、連載末期になると、たとえば評者であった松原隆一郎が《二年にわたり毎月論壇誌を通読してきた》〔松原 1999: 5〕などと述べているように、「論壇時評」との性格の相違はやや曖昧なものになった。

第三章 閑説の様式による規定

第三章では、論壇時評欄なる様式が、具体的な閑説の様態をどのように規定してきたかを即物的に^{ザッパレリッヒ}検討する。

具体的には、まず月評という形式によって規定される一ヵ月間の内部における閑説である共時的閑説と、一ヵ月を超える閑説である通時的閑説と分類する。

その上でまず共時的閑説については、論壇時評の主たる対象メディアとなってきたいわゆる総合雑誌の扱われ方、時評が取り扱うべきテキストを指示する際にしばしば用いられる「時論」の捉えられ方、さらに閑説を通じて主題化される「論者」と「評者」なる「人称性＝位格」についてそれぞれ検討する。

一方、通時的閑説については、論壇時評欄の成立以来くりかえされてきた「論壇の変質・消滅」というモチーフをとりあげてその閑説のされ方を見る。

さらに、論壇時評欄全体を通じて観察される「個人の処理能力の飽和」という了解がどのような役割をはたしているか、また通時的閑説と共時的閑説とがどのような関係にあるのかを分析する。

こうした考察全体を通じて最終的に明らかになるのは、時評欄なる事後閑説の様式を通じた論壇なるものの措定のされ方である。

第1節 共時的関説

論壇時評は基本的には「月評」形式を採り、過去一ヵ月間に刊行されたテキストに事後的に関説していく。当然、対象となるテキストが執筆された時点とそれを批評する時点のあいだにはタイムラグがある。第一章でも触れたが、直接対面状況下での相互行為 *interaktion* とは異なり、主題への集中をせき立てるようなその場性 *Anwesenheit* がそこに働くわけではない⁴⁴。とはいえ、そこで事後的な関説が「時評」と呼ばれていることからもうかがわれるように、毎月直近の「論壇レリバントに関するテキスト」が探索されていくことによって、本来は機械的な区切りにすぎない一ヵ月間が「共時的な地平」の様相を呈することになる。こうして「共時的なもの」として「今月のテキスト」が関説されるとき、論壇時評というコミュニケーション関連づけの様式は、以下のような構造的特性を帯びることになる。

(A) 「虚焦点」としての総合雑誌

いわゆる総合雑誌は、「論壇レリバントに関するテキスト」を稀少化する緩い指標としてはたらし、論壇時評による事後的な関説の様式化をうながす。総合雑誌は、そこに掲載されれば必ず関与性レリバンシーが設定され、逆に掲載されなければ決して関与性レリバンシーが設定されないという意味での絶対的な指標としてははたらいていない。しかし現実オブジェクト・レベルにいかなるテキストが関説されて、あるいは関説されなくても、あくまでそのことが「総合雑誌」との関連で（ある場合にはその「困難」や「限界」として）了解されるかぎり、それはなお指標たりえているのである。

・「日本独自・固有の…」

主要三紙の論壇時評欄を総覧すると、これまで実際に関説されたテキストは、その相当部分を雑誌論文、なかでも総合雑誌⁴⁵に掲載されたものが占めており、それ以外の単行本、新聞記事に言及される機会は相対的に少ないことがわかる。

実際論壇時評のなかでも、時評の対象とすべき「論壇」が「雑誌の論（文）」と明示的に等号で結ばれることも少なくない。もっとも、その曖昧さの故にたいいていの場合には強い留保が付された上でのだが。たとえば七〇年代には「雑誌論調」なる語で「論壇」が換言されている。

《その頃 [敗戦直後：引用者註] に比べて、いまの論壇（総合雑誌の論調という意味でのこの言葉を使うとして）は、あきらかに戦後が終わったあとの別の気風をあらわしている。》[鶴見 1974: 3]

《論壇という言葉を使うと話がわかりにくくなるが、雑誌論調という言葉におきかえてみると […]》[武者小路 1976c: 5]

これは戦後にかぎったことではなく、論壇時評欄が新聞に設けられた一九三〇年代の当初から、論壇は雑誌に定位するかたちで言及されてきたのである。

《論壇といふもの、文壇と同様、ひどく正体のわからぬものである。論壇とは何か。どうもはつきりしない。しかしともかく雑誌の論文欄が基礎になつてゐるやうである。そしてその場合、雑誌は一般雑誌が主のやうである。》[大森 1932a: 5]

このように論壇なる語と雑誌とが結びつけられる際に、具体的な舞台として折にふれて召還されるのが「総合雑

⁴⁴ 本論四頁を参照。

⁴⁵ もちろん、何をもちて「総合雑誌」とするか、その定義自体がかなりの程度曖昧であり、時代によっても異なる。第一章で大塚英志が挙げた「論壇誌」と「総合雑誌」とを等号で結べるかも実は微妙なところであろう。しかし後述するように、「一般誌」や「高級雑誌」など名指される場合も含めて、定義も曖昧なままに一群の雑誌が（かりそめの）準拠点として設定されることが、論壇時評という様式の重要な特性の一つとなっている。このように引き当てにされる雑誌をさしあたって「総合雑誌」と呼び、具体的にはそう呼称されたことのある雑誌を想定してひとまず議論を進める。

誌」と名指される一群である。『朝日新聞』は戦後論壇時評欄を復活させて一〇年近くは「総合雑誌」の語を標題に冠しており、また七〇年頃は『毎日新聞』のそれも「総合雑誌から」となっていて、論壇時評すなわち総合雑誌批評であることが明示されていた時期もあった。そしてこの総合雑誌については、その存在が日本に「特殊」・「固有」のものであることもまた、しばしば言挙げされている。

《「総合雑誌」というものは日本独自のものであると聞いているが […]》[林健太郎 1951: 4]

《ところが日本の総合雑誌というのは、世界にも稀な存在で […]》[中村 1961: 3]

《どの程度読まれているかは別として、数多くの総合雑誌が、日本ほど部数も多く売れている国はないというが […]》[都留 1965: 5]

「論壇」それ自体も《世界にも類まれな存在》[樺山 1984a: 11]と表象されることがあるが、そうしたイメージに実定性の一端を与えているのが、この総合雑誌の日本特殊性に対する強い信憑なのである。

・論壇としての実定性を否定

しかしながらここで象徴的なことは、論壇時評欄が初めて新聞紙上に登場したときから、総合雑誌はすでに否定的なものとして叙述されていたという事実である。後年ほかならぬ論壇時評のなかで鶴見俊輔も触れていることだが[鶴見 1975c: 7]、一九三一年一月に新聞で初の論壇時評が『東京朝日新聞』に掲載された際、評者である猪俣津南雄は、いわゆる総合雑誌の批判、ならびにそれに定位する「論壇なるもの」の批判を以て筆を起している。

《第一の特徴。ほとんどすべての真理は、そして当面もっとも必要な真理は真理ほど「論壇」から駆逐され排除されてゐる。

[...] 今や多数の「階級的中立」を標ぼうする総合雑誌の如きにさへも、発売禁止及び類似の××が強く加はつてきた。》[猪俣 1931: 9]

《第二の特徴。駆逐された諸真理に代つて、あらゆる非真理が、偏見が、独断が、せん動が、あゆが、説法が、理論の生けるしかばねが「論壇」へのさばりだしてきた。》[猪俣 1931: 9]

その上で、プロレタリア科学同盟発行で当時啓蒙誌化していた『プロレタリア科学』をとりあげ、「無名の筆者」[鶴見 1975c: 7] 池田一郎の論文を批評して次のように宣することになる。

《社会的にもつとも必要な諸真理は、ますます「論壇」以外の領域において成長し、展開し、また獲得されてゆくだらう。》

[猪俣 1931: 9]

総合雑誌に照準することによって論壇に^{レリバント}関与的なものを一旦指し示しておいた上で、その実定性を否定してみせるという両義的・自己否定的な閑説。そして、こうしたある意味決定的な「批判」がなされながら、(猪俣自身の二日目以降の時評も含めて)なお総合雑誌のテキストに対する批評が安穩裡に並存していくのである。もちろん猪俣の時評は、直接的には、約二カ月前に勃発した満州事変下で言論統制が急速に強化されていたという当時の歴史的状況を反映したものであった。とはいえ、論壇時評のなかで総合雑誌が否定的に閑説される(と同時にそこに掲載されているテキストへの閑説も肅々と続けられる)という構図が、その創生期から今日に至るまでほぼ絶え間なくくりかえされてきており、常套的な様式となっていることも事実なのである。そして結果的には、そうした総合雑誌に対する否定的な閑説を通じて、論壇なるものをめぐる^{コミュニケーション}関連づけが賦活されていくことになる。先に、総合雑誌が「論壇に^{レリバント}関与的なテキスト」を稀少化する^{緩い}指標となっていると述べたのは、かかる事態を指している。

・物量的な読みにくさ

さて、論壇時評を通読していくと、上に述べた総合雑誌に対する否定的な閑説にもいくつかのパターンがあるこ

第三章 閑説の様式による規定

とが見てとれる。

まず目につくのは総合雑誌の量的・質的な「読みにくさ」を言挙げするような閑説である。たとえば、「量的な読みにくさ」からとりあげれば、論壇時評の導入部ではしばしば総合雑誌の物量感が強調されることがある。

《今度の機会に、奮発して四冊千百ページの全部を読みとおしてみようという大望を起したが、結局失敗した。》[吉田 1953: 4]

《今月は、十三冊、百七十四編の論文、ルポ、座談会を通読した。速読の私でも、約十二時間を要した。》[坂本次郎 1970: 7]
《また、数ある月刊誌のなかからめぼしいものをえらんで、その中から何編かの論文を批評するのは、大変大それたことかもしれません。現に、私の机の上には、高さ実測四九センチの雑誌の山がつんであります。》[武者小路 1976a: 3]

《先日念のために積み上げて測ってみたら、なんと優に一メートル近くはあった。》[中野 1977c: 7]

《今回時評をかくにあたって新聞社から送ってくれると約束した雑誌のリストは三十冊をこえるけれども、その中にさえ、たぶんこの仕事を限定することはできないだろう。》[見田 1985: 7]

《机にうずたかく重ねられた雑誌群を、斜め下方から仰ぎ見るようにして眺めてみる。》[芹沢 1994: 9]

主だったものを並べてみただけでも、論壇時評の担当者の仕事には、雑誌の厚さやその冊数の多さを実測して嘆息してみせることも含まれているかのような印象すら受ける。こうした「量」の指摘は、戦後になってはじめて現れたものではない。論壇時評では、早い時期からこの「量的過剰さ」がたびたび主題化されていたのである。たとえば軍事記者であった伊藤正徳は、軍縮条約下での艦艇保有比の比喩なども交えながら、次のような国際比較を試みている。

《日本は雑誌の一番厚い国だ。中央公論、改造、経済往来、文芸春秋等を、欧米の一流雑誌に比べると、少なくとも三倍の厚さがある。増刊号のときなぞは五倍以上のページである。》

しかし、かゝる量の優越は必ずしも質の優越を語るものではない。雑誌の機能或は能率の点からいふならば、劣ると評せられても致し方がないやうだ。かりに、欧米の一流誌が、全読者に対して平均七割の内容を読ませるものとすれば、我国のそれは三割もむづかしいのではないか?》[伊藤 1934: 5]

《一言にして尽せば、日本の一流誌はバルキーである。》[伊藤 1934: 5]

こうした身振りによって繰り返し確認され了解されているのは、雑誌、とりわけ総合雑誌の（そしてそこに掲載されている論文から成る「論壇なるもの」の）「読みにくさ」、「読まれなさ」である。「論壇なるもの」は個々のテクストの単純集合以上のものでして了解されているが、同時に、「論壇なるもの」の前提となる雑誌群自体がその全体を見透かすことのできないほどの物量をもっていること、いわば「つまみ食い」を前提としたものであることもつねに先取りされている。日本に特殊・固有なものであることが強調される「総合雑誌」なる曖昧な表象も、こと論壇時評においては、雑誌メディアの具体的なジャンルを指すものとしてよりも、むしろこの「読みにくさ」「読まれなさ」という問題系を^{ポジティブ}実定的なものとして指し示すための宛先として召還されていると捉えた方が理解しやすい。

《西洋の頁数の多い大新聞はあらゆる方面の論説や報道をのせているが、日本の総合雑誌はそれを月刊にしたものと思えばよい。しかしこういう雑誌は結局ムダの多いもので、経済界の読者は小説など読まないだろうし、文学好きの青年は政治・経済の論説など読まないでしまうだろう。》[相良 1953a: 6]

総合雑誌の「物量」やそれゆえの「読みにくさ」「読まれなさ」が主題化されると、「夾雑物」を排することによって「論壇として^{レリバン}関与的なもの」の^{レリバンシー}関係づけを^{レリバン}図ろうとする誘因が生じてくる。「読みにくい」「読まれにくい」という初期設定が関与性の設定をうながすのである。「物量」問題に対するもっとも身も蓋もない対応は「量的削減」と

ということになるが、これは換言すれば、上記の関与性レリバンシーの設定を「編集（者の選択）」というかたちで外挿することを意味する。こうした「量的削減」の提案も戦前から行われているが、憲法学者の宮沢俊義の例のように、それらは編集者に対する要請という体裁を採ることになる。

《例へば、全体の頁数を減らすこと、内容をもつと即物的にすること、時事に関する根本資料を載せること、などいづれも十分考察せられるに値しよう。そして、読者といふ読者にその一部だけでなくて全部を読ませるやうにまた、読者が全部読まうとおもへば読めるやうに、編集することが必要であらう。》[宮沢 1939: 7]

一方、七〇年代になっても、坂本義和や中野好夫が、用紙制限ではるかに頁数が少なかった戦後直後の総合雑誌を引き合いに出しながら、やはり現下の編集部注文をつけている。

《だとすれば、そうした自負心を持たない時には、機械的に毎月一冊発売するようなことはしない、といった見識のある雑誌もあってよいのではないか。「不出来につき今月は休刊」というような痛快な広告を出し、できがよければ増刊を出すといった雑誌もあってよかるう。》

《もし雑誌の一号全部をオシャカにする必要はないにしても、「玉石」の石を、もっと勇断をもって切捨てる見識のある編集部もあってよいのではないか。》[坂本義和 1970: 5]

《それからいえば、今日といえども、総合誌の大きさはせいぜい二百ページ足らずで十分なのではなかるうか。》[中野 1977b: 5]

ただし総合雑誌の頁数が少なければ、関与性レリバンシーの設定をめぐる事後的な関説が生じないかといえ、実はそうとは限らない。一九四九年という論壇時評の中断期のことではあるが、当時『朝日新聞』で雑誌短評欄を担当していた大木卓⁴⁶名義で、同紙に次のような総合雑誌論が掲載されているのである。

《総合雑誌というものは六四ページを建てページとするかぎり、多少とも政治色を帯びざるをえない。つまり、党の機関誌的性格と意図を強られるのである。たとえば『世界評論』や『潮流』を、共産党の機関誌『前衛』とくらべてみる。どこに総合雑誌としての誇りと、魅力があるか?》[大木 1949: 4]

後年になって坂本や中野によって理想的状態として解される敗戦直後の総合雑誌の薄さは、ここでは「過少」と評価され、党派色が前面に出ることで、総合雑誌が「論壇という全体」を代補することを阻害するものとされる。こうした二種の見解からうかがわれるのは、論壇時評でおこなわれる総合雑誌の量的過剰さ・過小さをめぐる事後的関説が、構造的には、総合雑誌の事実としての厚薄オブジェクト・レベルに先行している可能性である。無駄なものが多いという論理であれ、必要なものが足りないという論理であれ、「全体」は「読めない（接近できない）」と言挙げすることによって「論壇という全体」コミュニケーションに関説するという関連づけの構造、了解が先に成立していればこそ、かほど執拗に総合雑誌の「過剰さ」・「過少さ」が踏査されているとも考えられるのである。

・文体による読みにくさ

同様の構図は、総合雑誌の「質的な読みにくさ」についても見てとれる。論壇時評のなかでは、総合雑誌の「量的な読みにくさ」とともに、掲載されているテキストの難解さや晦渋さといった「質的な読みにくさ」についてもしばしばとりあげられてきた。

⁴⁶ 当時の『朝日新聞』の「雑誌評」欄は雑誌別に批評を加える一段組のコラムであった。評者である「大木卓」の前任者は「西村孝次」であり、同じ筆名を戦後文芸春秋編集局長となった池島信平が用いているが、この池島と『朝日新聞』紙上の「西村」、「大木」が同一人物かどうかは確認できなかった。ただし大木 [1949] では、『中央公論』が「上品にさばっていくが、上品倒れ」とあるのに対して、『文芸春秋』は「さすがに」「上がり込んで、あぐらがかける」と評されている。

第三章 閑説の様式による規定

《ところが総合雑誌には講義のプリントめいたものがある。おっしゃることは、そうに違いないのだけれど、読むのが苦しい。》[桑原 1960: 9]

《総合雑誌の論文の中には、一体何が書いてあるのかさっぱりわからないくらい難解なのがある。[...] どんなによい内容がもられていても、読者に理解されなければなんにもならない。このように難解な表現方法が使われるのは読者に訴えているのではなくて、おそらく自分たちの特定のグループの人たちを目あてに書いているのではないかと思われる。》[中村菊男 1961: 3]

《[...] 毎回雑誌論文を読むのに難渋する。[...] 文を売るなら、もう少し文の書き方を学んだらどうだといいたくなる文章がざらだ。》[本多 1967: 7]

《ところが、もしその文章表現が、一般市民はおろか、相当の知識人ですらが、ネジ鉢巻でもしなければ理解しかねるような専門語彙、学者仲間だけの通話(ジャーゴン)ばかりで充満しているとしたら、いったいこれはどうなるのであろうか。[...]

ところが、そうした困りものの悪文難文筆者が、全部とは言わぬが、教授先生諸君に実に多いのである。》[中野 1977a: 5]

ここでは「文体」上の特性が「中身」から区別され、個々のテキストと「論壇なる全体」との関与性^{レリバンシー}の設定を妨げる障碍として主題化される。その際、この障碍がいわば物神化したものとして「総合雑誌(に典型的な文体)」が名指されているのである。

同時に、こうして「文体」が主題化されることによって、総合雑誌の実際の購読状況からある程度独立に、その「読みにくさ」「読まれなさ」について閑説しうる自由度が生じることにもなる。たとえば、発行部数の長らく低迷している近年などに比べて総合雑誌がはるかに人気^{ポピュラーで}があったといわれる敗戦直後においても次のような言い回しが可能なのは、かかる自由度がそこに設定されているからと考えられる。

《[...] 一体筆者は誰を相手に書いてあるのだらう。売れることは少しも真に読まれてゐることではない。一種の知的虚栄心にすぎない。》[中野 1946: 2]

頁数が厚すぎるといった「量的な読みにくさ」の場合と同様に、ここにおいても「買われても読まれない」という状況が想定されている。そしてそのことが、総合雑誌の現実的・具体的な様態からはある程度独立に、しかしながら消極的なかたちであれ「総合雑誌」を主題化することによって、「論壇なる全体」に事後的に閑説する可能性を拓くのである。

この総合雑誌の「質的な読みにくさ」という主題についても、やはり論壇時評の生成期にまで遡ることができる。たとえば谷川徹三や宮沢俊義の論壇時評では、その冒頭で、評者自身の見解については慎重な留保を付しながらも、総合雑誌に掲載される巻頭論文その他の「名論卓説」に対して一般に次のような視線が存在することが言挙げされる。

《[...] かういふ人たちから見ると、『改造』や『中央公論』の巻頭論文あるいひはそれに類するものは、長々しくくたくたくのみ思はれるのであらう。かういふ論文の無用の長物呼ばはりする言葉はその他にも、特に最近、しばしば目にしたり読んだりした。》[谷川 1932b: 5]

《ある人はああいふものを片つ端から皆読むと人間が莫迦になる、と教へてくれた。》[宮沢 1935: 11]

こうしてみると、新聞の論壇時評という関連づけの様式^{コミュニケーション}においては、その創生期から現在に至るまでほぼ一貫して、「総合雑誌」は(「量」と「質」とのいずれに帰責されるにせよ)「読めない」「読まれない」可能性があるものとして閑説されてきたことがうかがわれる。そしてそのことが、経験的なテキストから一定の自由度をもって、「論壇」を抗事^{レリバン}的に語ることを可能にし、「論壇に^{レリバン}関与的なもの」についての事後的な閑説を賦活してきたといえる。

・閑説されるメディアと閑説するメディアとの「落差」

ただし改めて確認するならば、こうした総合雑誌の経験的・具体的な様態をいわば「当て馬」にしたかたちで、反実仮想的な「論壇」への閑説が存続してきた背景には、それを可能にする実定的な基盤があったように思われる。それは、「総合雑誌」を引き合いに出した事後的閑説それ自体を取容する「別なる媒体」としての「新聞」の存在である。「雑誌」と「新聞」とを異なる特性をもつものとして区別し両者を対峙させるような了解構造が現実味をもてばこそ、さまざまな尺度からの「読みやすさ／読みにくさ」を提起することが可能になり、そのことによって「論壇に閑与的なもの」をめぐる文脈づけ・解釈が励起されることになる。いってみれば、文体やリーチの長さといった点での「総合雑誌」と「新聞」との＜落差＞が、一義的な定義を困難にする一種の遊動空間^{あそび}として働くことによって、事実性に拘束されぬ「論壇」語りの繁茂を促すのである。論壇時評には、その読者のかなりの部分が雑誌論文という「原典」に直接あたることなくそれに対する新聞紙上の「閑説」のみを読むと想定されるという特有の「緩さ」があるが、これは「論壇なるもの」の事実からの一定の自由度、その反実仮想性に対応しているといえる。

定義が困難なことがどこかであらかじめ受け入れられていながら、それが完全に放棄されることもなく、論壇に閑与的な範囲^{レリバント}の踏査が繰り返され試みられるなかで、「論壇なる全体」についてのみならず、そこに属する（べき）「テキスト」や「人称＝位格」^{ペルソナ}の特性についてもさまざまな閑説が積みかさねられていく。もちろんそれらについても単に抽象的に論じられるのではなく、やはり総合雑誌の経験的・具体的様態からの「距離」として措定されるのであり、多くの場合は、総合雑誌の否定的閑説というかたちでさらなる関連づけ^{コミュニケーション}を賦活していくことになる。

(B) 「時論」ということ

論壇なるものが「論」によって構成されているという社会的信憑は強い。そのため、「論」を「論」たらしめるもの、論壇に閑与的なテキスト^{レリバント}が具えるべき特性についても、論壇時評でさまざまな閑説がなされてきた。ただし、そうした閑説もまた「実際に総合雑誌に掲載されたテキスト」に対する否定的閑説^{レリバント}というかたちをとることが多く、事実性の水準からの自由度は担保されることになる。結果として、論壇に閑与的なテキストを定義しようとする試みは、カテゴリー単位で収束することなく、それぞれの「評者」という「人称＝位格」による「選択」の相で了解されることになる。

・「現実」に対する先行

まず、論壇に閑与的なテキスト^{レリバント}について閑説される際にしばしば主題化されてきたのが、その「現実」との特殊な関係である。たとえば近年の論壇時評における総合雑誌批判のなかには、「現実」との関係性に関連して次のような記述が出てくる。

《論壇なるものが現在の日本社会にとって意味ある形で成立するとすれば、それは日本社会を知的にリードするものでなければならない。そして知的にリードするためには、そこで行われる議論は、ただ単に現実に対応するだけであつたり、具体論に終始するのではいけない。現実から遊離することは望ましくないが、ある程度の抽象性と独創性（つまり論争性）がなければならないし、具体論としても、読者の視野を広めてくれる新しさがなければならない。》[田中明彦 1999: 9]

《この数年、日本の論壇には、必要と現実の間に大きな分裂が起こっている、という印象が強い。歴史の飛躍的な転換点に立って、必要とされるのは総合的な展望であり、新しい思考の枠組みの提供である。だが現実にはますます目立つのは、日々の時事問題への発言であり、専門分野の分析であり、関心の個別化と細分化の傾向なのである。》[山崎 1996a: 5]

ここでは、「現実」への「反応」に対しては「リード」が、「時事問題への発言」や「分析」に対しては「展望」が、

第三章 閑説の様式による規定

それぞれ対置されている。いずれの場合にも、「現実」との特定の関係性が、論壇に^{レリバント}関与的なテキストの^{メルクマール}指標として設定されているといえる。すなわち、「反応」や「分析」のように「現実」に後続ないしは内属するのではなく、それに先行する構想力とでも呼ぶべきものが期待されているのである。

雑誌論考という実現態に否定的に閑説しながら、「現実」に対するこの構想力を以て論壇に関与的なテキストを弁別しようとする議論は、以前の論壇時評にも何度か出てきている。たとえば戦後の論壇時評には次のような表現がある。

《論壇への期待は柳父章が「予見する論文の提唱」（現代の眼）でいうとおり、「具体的に可能性の多い予見」が大胆に語られ、書き手が、その予見にたいする責任を負う、ということであろう。そこには、理論と現実との対決から生れる厳しさがあり、この厳しさを自覚した論に接するとき、読者は、たとえ見解を異にする場合でも、一種の満足感をおぼえる。》[都留 1963b: 11]

《この点でも総合雑誌は、たゞ時代の里程標であることに満足せずに、その道しるべの役割を引きうけるだけの勇気と賢明さを持ってほしい。》[日高 1952: 2]

「予見」や「道しるべ」といった言辞からは、論壇を構成するテキストに対して、やはり「現実」に先立つある種の投企的性格が期待されていることがうかがえる。ここで「現実」は全く軽視されているわけではなく、そればかりか最終的に投企の成否を裁定する基準たる資格を与えられている。その意味で論壇のテキストは超俗的たりえず、「時論」的性格を色濃く帯びる。と同時に「時事」に埋没しそれを後追いするだけでは、やはり論壇との^{レリバンシー}関与性を否定されるのである。同様の議論は、さらに戦前の論壇時評にまで遡ることができる。

《その第一は、いはゆる『高級雑誌』のほとんどすべての誌面が問題の後を追っかけることのみ懸命で、問題それ自身を創つて行くと言ふ使命に、最近、全く眠つてあるといつてよいことだ。[…] 右のことは、次いで第三の要望を伴ふことになる。現在の理論的論文には「結局論」が余りに多過ぎる。》[高橋亀吉 1932a: 5]

《論壇は認識の戦場だ。しかし論壇の存在理由はミネルワ^レの梟たるのみには尽きない。それは暁鷄たるべきものだ。》[杉森 1933b: 4]

「結局論」、「ミネルワ^レの梟」として「現実」の後追いに甘んじることは、ここでも不十分と評価されている。

ただしここで注意すべきは、論壇時評においては、「現実」に対する投企的性格――「予見」や「展望」たること――は、それを適用するだけで個々のテキストの「巧拙」や寄稿者の「技量」を外在的に裁断しうるような安定した指標とはなっていない点である。「予見」や「展望」の要素を個々のテキストに求めるという身振りは、「論壇」なるカテゴリーの水準での議論を落着させるものとしてよりは、かえってそれを賦活するものとして機能するのである。

文芸時評などと比較するとわかりやすいが、論壇時評においては、個々の「作品」の水準のみならず「総合雑誌」の水準（冊子としての、あるいはジャンルとしての）にも「実現態」としての性格を認められる傾向が強い。実定性が二つの水準で同時並行的に認められるのである。本来は「論」が兼ね備えるべきものとして設定された「予見」や「展望」といった要件についても、「作品」批評としてだけでなく、「総合雑誌」批評としてもくりかえし語られることになる。そしてそのことによって、個別のテキストに閑説することなく（その具体的様態から一定の自由度を確保しながら）、実際には「総合雑誌」という「実現態」について閑説しながらそれを個々のテキストの特性についての閑説とみなす処理が可能になる。その結果、個々のテキストが満たすべき「予見」や「展望」といった特性について語っていたはずのメタテキストが、総合雑誌という「実現態」の批判を介することで、論壇なる「可能態」に関するメタテキストへと回帰していくことになるのである。

・「中途半端」か「中道」か

たとえば論壇時評には、アカデミズムやジャーナリズムといった「隣接領域」から弁別することによって、論壇レリバントに關与的なテキストの特性を措定しようとする議論が出てくることがある。

ジャーナリズムとアカデミズムとを対置する構図自体は、戸坂潤なども用いるよく知られた主題である。戸坂は、その著書『イデオロギー概論』などのなかで、アカデミズムとジャーナリズムとを《文化形態としてのイデオロギーの没論理的な歴史的社会的構造》[戸坂 [1932]1966: 119] の二つの形態として捉え、前者の特徴として原理性・専門性・実証性を、後者の特徴として現実行動性・総合統一性・批評性をそれぞれ指摘している。その上で両者が陥りうる頽落的傾向として、アカデミズムについては惰性化・高踏化の危険を、ジャーナリズムについては断片化・無定見化の危険を挙げる。戸坂自身の立論からすれば、この二つのイデオロギー構造を究極的に止揚しうるのは弁証法という論理学的原理に貫かれた唯物史観ということになるだろうが、とまれ彼の議論においては「論壇」にある特殊な位置価値が与えられている。すなわち、ジャーナリズムがアカデミーの独壇場であった理論の世界を浸食して、《理論的ジャーナリズム》[戸坂 [1932]1966: 126] にまで進行したものが「論壇」だと評されるのである。

論壇を二つのイデオロギーの構造の中間的位置に置く戸坂の議論自体は論壇時評で展開されたものではないが、アカデミズムやジャーナリズムとの距離的均衡によって論壇なるものを措定しようとする構図は、その後の論壇時評でもおおむね前提とされている。たとえば、以下はその典型例といえよう。

《論壇は問題の解決を相談する所ではなくして、論題を摘発する所である。だから、論争が多い、しかも、性急だから、すぐ目の前に迫つてゐる問題、或は少なくともこれと一定の近親関係にある問題でなければ、取り上げない。

このために、一見極めて目前の問題から遠い学理の研究者もジャーナリズムに接触する限り、自分の学理を、単なる専門家の目でなく、現下に迫つてゐる問題をも包摂してゐる立場から眺めざるを得なくなる。》[向坂 1936: 7]

《ところで、『論文』という作品にはそれ自身の内的な論理があつて、それはおのずから二つの方向に分化して行く傾向があるようである。あるテーマが作者の中で成熟して来ると、それはあるいは思索という試験の中で蒸留され、あるいは街頭の環境の中で検証されることによって自己を実現しようとする。前者はしばしば難解な理論的論文を生むであろうし、後者は説明的な啓蒙論文を生むであろう。》[林健太郎 1958: 3]

《論壇とは、ジャーナルな現実とアカデミズムとをつなぐ場であろう。今日露呈した問題のすべては、一篇の雑誌論文では解けない原理的なものばかりである。同時にいわゆるアカデミズムの専門主義からも、この過渡期を照らす光を洩れて来べくもない。[…] やや気取つて言えば、母なる思想は父なる現実とふれることによって新しい生命を創造するのである。》[長洲 1969: 7]

ここでは、論壇なるものには、高踏化にも無定見化にも傾くことなく、「現実」に対して構想力を発揮しうる立ち位置があらかじめ割り当てられている。したがってアカデミズムやジャーナリズムのどちらか一方に偏することは、「現実」を超越するにせよそれに埋没するにせよ、いずれにしても「頽落」を意味することになるだろう。実際、論壇レリバントに關与的と了解される論題や論者はアカデミズムやジャーナリズムのそれと相当程度重複するのが一般的であることからもうかがわれるとおり、三者の明確な弁別には自ずから困難が伴う。であればこそ、総合雑誌という「実現態」については、その分さまざまな局面において「頽落」を発見しやすくなるのである。

《これらを通観して感じたことの一つは、月刊雑誌というもののシマツのわるさである。日刊新聞や週刊雑誌でさんざん報道された後なので、単なる観察記録では二番センジの感を免れない。といて、観察を元にして改めて思索をつむだけの時間のユトリはない。》[竹内 1954: 5]

「可能態」である論壇が「中道」と解されるとすれば、「実現態」たる総合雑誌はいわば「中途半端」と解される

第三章 閑説の様式による規定

危険性をつねに孕むことになる。論壇時評においてはこうした「頹落」が、個々のテキストや冊子・ジャンルとしての総合雑誌について、繰り返し閑説されてきた。そしてこうした閑説が積みかさねられる都度、中庸的位置を帯びる論壇なるものが反実仮想的になぞり直されることになるのである。

・「アカデミズム」の過剰

論壇時評の一方の極には、アカデミズムに偏しているとして雑誌(のテキスト)の現状について批判的に閑説し、ジャーナリズムに漸近することによって論壇が賦活されると主張する議論がある。

《事実の迫真力には、いかなるわけ知りの評論も足下におよばないものがある。とりわけ、価値の多様化がはげしい現代世界にあって、ともすれば声高なイデオロギー表明がいきかうとき、それにうんざりした耳にとっては、ノンフィクションの音は快く響く。》[樺山 1980: 5]

《日本の総合雑誌は「××論」が多くて、事実の報道、分析、ルポルタージュといったものが少なすぎる。私はこれまでそのような印象を持ちつけて来た。それは現在のように世界と日本の情勢が混沌として来ると、ますます問題になって来るであろう。なぜなら、情勢が混沌として来れば来るほど、なにがおこっているのかを事実即してとらえる必要がまずあるからである。もちろん事実の報道は、新聞、テレビなどのマスコミの任務だが、マスコミが日々の動きを追うのに対して、もう少し長期的な視野に立ち、分析を加えた事実の報道も是非必要だと私は思う。》[高坂 1970: 7]

《総合雑誌の目次面では問題は出そろっている。しかし、これを解決するのが国民大衆であってみれば、総合雑誌は解釈や説得を事とするより、ジャーナリズム本来の使命に徹して何よりもまずわれわれの判断形成のための手堅い客観的材料を提供すべきだという感を深くする。》[高橋義孝 1951: 4]

これら閑説は、論壇に対して「現実」への投企、構想力の発揮を期待することを全面的に否定するものではない。現実の総合雑誌(に掲載される論考)が過度に「惰性化」「高踏化」することによって、「現実」から遊離し、かえって実効性をもちえていない点が批判されるのである。

雑誌論文が胚胎するアカデミズムの行き過ぎに対するこうした批判は、一九三〇年代の論壇時評にも見られた。

《けれども少なくともジャアナリズムの世界からいふなら、その知識はあくまで新しい知識でなければならない。何年となくくりかへされてある大学の講義のやうなものは別に講義録もあることであり、専門の学術雑誌もあることである。ジャアナリズムのうへにあらはれた知識は、真の知識であることを求めるとともに、常に新しい知識でなければならない。》[室伏 1935: 10]

ここでは総合雑誌に掲載されるべきテキストについて、ジャーナリズムの領域に属するものと規定され、アカデミズムとの弁別の必要性が説かれている。また、すでに引用した高橋亀吉の「結局論」批判も、啓蒙的な論文の必要性を一方で認めながら次のように続ける。

《しかし、その必要の故に、永くとも同じ二三年間における現実の推移を対象にした論究が今日の如く論壇から姿を消してゐることをチヤスチファイするわけではない。これを裏返して、いま一つの側面からいへば、現実の問題に直面してゐる人々の――乃至はさうした位置に極力近い人々の――手に成つた論文が欲しい。》[高橋 1932a: 5]

「巻頭論文調」に対する揶揄や、後に「政治学者」猪木正道が「不毛」と振り返った「名論卓説」[猪木 1961: 9]に対する批判は、この時期すでに論壇時評が好んで取り上げる主題の一つとなっていた。

・「ジャーナリズム」の過剰

しかしながらここで注意すべきは、同じ一九三〇年代の時点で論壇時評のもう一方の極に、総合雑誌(に掲載さ

れるテキスト)のジャーナリズムへの「偏り」に異和を表し、アカデミズムへの志向性を露わにする議論もまたすでに存在していたことである。

《最近の論壇で一番幅を利かしてゐるものは、時評ふうといふか、そのときどきの問題を手短かに論評した論文の類であることは、誰の目にも明らかであらう。かういふものは、読者にとって新聞の社会面記事と同じ意味の興味がもてるし、手つ取りばやくていゝんだらう。》[大森 1935c: 9]

《このごろはいゝ意味のアカデミックな論文の一般雑誌の上に見られること稀である。これが一般雑誌の進む必然の方向であつてみれば、そしておしなべての読者についてはかういふのを読む人の少いことを考へれば、悲しんだところで仕方ないし別に悲しむにもあたらない。しかし、読者の一人として、僕達にはいゝアカデミックな論文はやつぱりよるこぼしい。》[大森 1935a: 13]

一見すると、ここで表明されているのは個人的嗜好にすぎないようにも見える。しかしここでは、先に見たような論壇におけるジャーナリズムの「不足」を問題視する閑説と並存するかたちで、時事的で「手つ取り早い」ものの伸長とアカデミズムの退潮という傾向が指摘されている。あるいは総合雑誌のジャーナリズムへの接近が、より直接に「問題」として主題化される場合もある。

《だが、かうした事情に必然伴ふところの結果は、論文の筆者が多くの場合ジャーナリスト的傾向を有する人々の間からのみ選択されがちなことである。浅くとも博い知識を持ち、常に問題のハシリをとらへて、手取り早く器用な文章をかくことがジャーナリストの必要資格だとするならば、さういふ資格を有する学者思想家たちは、雑誌編集者にとつてもっとも重宝な人であつて、つまりさういふ人には執筆を頼み易く又謝絶されるおそれが少いから、自然この種の人々が職業的論文家として毎月の論壇に少からず登場し、或は読者を楽ましめたり、或は倦怠させたりする事になるのである。

しかのみならず右の如きジャーナリスト的筆者は、その大部分が自由主義者か或は少くもそれに近い人々であることも見逃せない事実である。[...] 彼等は或事物の欠陥を指摘することには巧であるが、如何にすればその欠陥を矯正し得るかといふ積極的方策はめつたに提言しないし、仮に提言してもはなはだしく空想的か或は懐疑的である。》[林癸未夫 1934: 9]

このテキストにおいては、《器用な文章をかく》こと、すなわち編集者の注文に応じてさまざまな主題を扱いうることは、「自由主義者ゆえ」というブリッジを介してだが「現実」に対する構想力を欠くことと等置される。

同じような主題は、戦中の中絶期を挟んで復活して以降の論壇時評についてもみてとれる。戦後、「総合雑誌におけるアカデミズムの過剰、ジャーナリズムの過少」が言及されてきたことは先に確認したが、実はそれに並行して「ジャーナリズムの過剰」あるいは「アカデミズムの過少」を憂慮する時評も間歇的に現れているのである。

《四誌を通じて科学的な見通しを土台にした、手密でしかも力のこもった評論が見られないのは寂しい。戦争前のような難解な巻頭論文も困るけれども、しかし日本の今後の進路について、示唆と反省とをあたえるにたりるほどの重量感のある論文をのせる雑誌が、一つくらいあってもよいのではなからうか。》[日高 1952: 2]

《こうした現実の問題を踏まえて論理をとおして思想の問題として扱ってほしいというのである。最近の総合誌には、それがない。総合誌は週刊誌への傾斜とともに、思想誌への上昇意図をもたねばなるまい。政治的ニュースだけなら月刊では間に合わぬ。》[桑原 1960: 9]

《今月の論壇各誌をみても、どの問題についても、解説、紹介、ルポルタージュ記事の洪水であつた。評論の位置はまったく片すみに退いている。》[久野 1971: 7]

《一つは、すべての問題について、時評子の意欲をそそるような骨格のたくましい<論>が極端に少なくなったことだ。その代わりに氾濫しているのは、いずれも似たりよつたりの解説の類である。[...] このような意味での論壇の衰弱が、日本の知的生活の未来にとって好ましいものであるわけではない。》[高島 1982b: 5]

第三章 関説の様式による規定

《歴史の飛躍的な転換点に立って、必要とされるのは総合的な展望であり、新しい思考の枠組みの提供である。だが現実にはますます目立つのは、日々の時事問題への発言であり、専門分野の分析であり、関心の個別化と細分化の傾向なのである。》
[山崎 1996: 5]

・宙づりにされる積極的定義

このように、新聞記事の様式として誕生した直後から近年に至るまで、論壇時評には、あたかも総合雑誌紙面の陣取り合戦を想像するかのようになり、ジャーナリズムないしはアカデミズムのいずれか一方の比重をいま以上に高める必要を説くテキストが掲載されてきた。注目すべきは、双方の立場とも、相手方のイデオロギーが総合雑誌を過剰に圧して、本来論壇に期待すべき機能が十全に発揮できていないため「是正」を必要とするという論理を用いている点である。もちろん個々の時評では、時代によって、政府による言論弾圧などのより具体的・直接的な原因についても言及されている。しかしながら、それら時評が「総合雑誌上におけるジャーナリズムとアカデミズムとの不均衡」という解釈枠組みによって水路づけられてきたことも事実なのである。しかも本来ならば、均衡がいずれに傾いているのかという対立軸として顕在化しかねぬ解釈枠組みを用いているにもかかわらず、実際の論壇時評では評者によって散逸的にいずれかへの「偏り」が宣せられ、立論の運びに用いられるのみである。社会的実践として捉えたとき、こうした否定的関説にはいかなる意義があるのだろうか。

関与的なテキストに求められる要件が明示的な学会誌などと異なり、総合雑誌はその表象からして折衷的・混淆的であることを謳うものである。そうした実現態に対して「ジャーナリズム／アカデミズム」なる評価軸を適用すれば、評者の主観に「不徹底さ」や「偏り」が映じるのはある意味必然的ともいえる。さらにいえば、論壇にさしあたって割り当てられることの多い「現実」に対する構想力の発揮という機能も、それによって関与的なテキストを特定する指標たりうるかといえば、はなはだ曖昧である。そもそも戸坂潤の議論では論壇が二種のイデオロギーを止揚する位置にあると設定されていることからもうかがわれるように、構想力は、ジャーナリズムとアカデミズムという二項との距離関係からのみ相対的に措定しうるものだからである。ジャーナリズム・アカデミズムのいずれも構想的に働きうるということであり、本来それは事後的・結果的に観測されるものであって、機能としては抽出できない。

論壇時評は、「ジャーナリズム／アカデミズム」という評価軸を以て、総合雑誌という事実態にくりかえし事後的に（そして多くの場合否定的に）関説してきたが、そこで実際に生じているのは、論壇なるものに関与的なテキストについてのジャンル単位での定義画定が宙づりにされ、先送りされるという事態である。いいかえるならば、論壇は、外延の数え上げを際限なく続けることによって内包の措定を留保する、ジャンルならざる「超ジャンル」⁴⁷の様相を呈することになる。このように「論壇かくあるべし」の水準に昇華することなく、「総合雑誌にかかる問題あり」という事後的関説に終始することによって、論壇に関与的なテキストの範囲の設定は、実態としては評者という「人称性＝位格」による「選択」に委ねられることになる。そしてこれにより、事後的な関説による関与性設定の自由度が将来に対して担保されるという点にこそ、社会的実践としてみた「総合雑誌のテキストに対する否定的関説」の実質的な意義が存するといえる。

・「非典型的」な時評

このように見てくると、実は「ジャーナリズム／アカデミズム」の評価軸を直接には用いることなく――より正確に言えば、「ジャーナリズム／アカデミズム」の評価軸の失効をことさらに顕示するかたちで――現実の総合雑誌のテキストに否定的に関説する「非典型的な」論壇時評の意義も理解しやすくなる。論壇時評のなかでは、総合雑誌

⁴⁷ 脚註9も参照。詳しくは第三章第2節で論じる。

誌のアカデミスティックないしはジャーナリストティックな性格が引き合いに出された上で、より「時論」的性格の弱い「読み物」や「創作」、あるいはそもそも総合雑誌以外のテキストである専門雑誌や新聞、書籍などが関説されることがある。しかしそのような一見「非典型的な」的な時評も――あらかじめ予告しておけば――将来に向かって関与性設定の自由度を開いておくという意味では、「ジャーナリズム／アカデミズム」の評価軸を前提にした一般的な時評と同様の効果を果たしているのである。

たとえば前節でも確認したように、一九九四年から二〇〇〇年まで、『朝日新聞』は従来の「論壇時評」の掲載回数を減らして「ウオッチ論調」欄を設けていたが、この欄については《論評の対象を硬派雑誌からさまざまなタイプの雑誌に幅を広げ》[朝日新聞 1994: 11]ることが謳われた。実際同欄では、総合雑誌のなかでも随筆など「時論」的性格が弱いテキストや、一般週刊誌や専門誌、サブカルチャー誌といった総合雑誌以外に掲載されたテキストが関説の対象となることが少なくなかった。

主要三紙の論壇時評を見ると、それ以前にも、特に政治学者や経済学者以外が評者となった場合などに、通常採りあげられるものとやや異質なテキストが関説される傾向が見られた。「西洋史」⁴⁸を専門とする樺山紘一が担当した論壇時評には、《論壇もしくは社会や文化のありようについての公的言論がもつ迫真力が、極端に低下してしまった》[樺山 1984a: 11]との記載がある一方で、別の担当回では次のような叙述がある。

《いささか楽屋話めくが、わたしは毎月この『論点』を欠くために、おびたしい数の雑誌に目を通す。それらの内には、率直に言って、現状の変化に鈍感で、凡庸としかいいようのない編集に明け暮れている雑誌もある。しかし、これとはちがひ、いわゆる論壇誌として天下国家を論ずるには遠いが、現代の社会と文化との深奥にすどくくいこんでいるものもある。》
[樺山 1982: 7]

そして、批評するにたるものとして関説される範囲は、専門雑誌（『言語』『青年心理』）から料理本（山本益弘『東京味のグランプリ』）に至るまで拡張されることになる。

総合雑誌の「時論」的テキストの「外」に積極的に関説することの意義をより明瞭に提示しているのは、「社会学者」見田宗介による論壇時評である。

《今回時評をかくにあたって新聞社から送ってくれると約束した雑誌のリストは三十冊をこえるけれども、その中にさえ、たぶんこの仕事を限定することはできないだろう。『is』（ポーラ文化研究所）とか『調査情報』（TBS）とか『水俣』（水俣病を告発する会）とか、『広告批評』『技術と人間』『80年代』『平凡パンチ』『暮らしの手帖』『クロワッサン』などのすぐれたPR誌、業界誌、運動誌、専門誌、情報誌、男性誌、女性史、生活誌などに、いわゆる「総合雑誌」よりも核心にふれる現代社会論をみることができるともある。[...] 思想の現在なり、現代社会の核心的な自己表現なりその理論的な解明なりの最前線を、わたしたちはいま、純文学ならぬ「純評論」の内にだけ求めることが、ほとんど意味をなさないという現在にいる。》[見田 1985a: 7]

総合雑誌だけではもはや不十分である。それがなお「論壇」と呼ばれる必要があるかどうかは別として、社会の「現在」、「核心」、「最前線」に接近するための「論」は、関与性の範囲をはるかに膨大なテキスト群にまで拡大しなければならない。――かかる言明が、なお論壇時評という事後的な関説の様式のなかで行われる。そして必要に応じて、たとえば障害者団体の雑誌（『そよ風のように街に出よう』）や小説（大江健三郎『新しい人よ目覚めよ』）、写真集・詩集（小林茂・森永都子『ぱんぱかぱん』）などにも論壇時評から関与性が設定されるのである[見田 1985b: 7]。

こうした総合雑誌の「外」への関説の志向は、七〇年代に見田が短期間担当した論壇時評にも見てとることがで

⁴⁸ 鉤括弧つきの専門は論壇時評に掲載された表記に拠っている。

第三章 閑説の様式による規定

きる。たとえば、ロッキード事件という時事的な話題を総合雑誌の各論考が集中的に取り扱っていたこの時期に、同事件の深層と関与的^{レリバント}であるとして閑説されたテキストは、民俗学的研究（谷川健一「祭場と葬所」『展望』、五来重「庶民信仰における滅罪の論理」『思想』）や文芸評論（山田稔「糞氏の思想」『展望』）、哲学誌や文芸誌（『思想』『文学』『ユリイカ』）などであった〔見田 1976a: 7〕。ほぼ同時期には、やはり従来の「典型的な」時評では取り扱われることの少ないテキストに閑説していた鶴見俊輔の論壇時評もあった。二年間続いた時評では、関与性^{レリバンシー}が認められれば、文芸時評欄や書評欄でも扱われうる雑誌の小説・随筆や書籍、あるいは通常は新聞で採りあげられることの少ない専門誌や機関誌の論考にも言及がなされた⁴⁹（最終回でいえば遠山啓「水源に向かって歩く」『世界』や羽仁進『2たす2は4じゃない』などは前者に、『女・エロス』などは後者に該たる〔鶴見 1975d: 3〕）。

・特異点ではなく並行

では、こうして関与性^{レリバンシー}が設定されるテキストの範囲を「総合雑誌に掲載される時論」から「それ以外」へと拡張してきた「非典型的」な論壇時評は、社会的実践としてみた場合、いかなる意義を持つことになるのだろうか。樺山や見田、鶴見らの論壇時評においては、「現状」に接近する上で関与的^{レリバント}な総合雑誌以外のテキストの存在が発見されてしまっている以上、「総合雑誌のアカデミズム／ジャーナリズムいずれかへの偏向」という問題系はその普遍性を奪われて局^{ローカライズ}限されることになる。総合雑誌と論壇なるものとの関係が事実態と可能態として一対一対応しているわけではないことを、遂行的に示してしまうからである。これは、一見すると「典型的」な論壇時評—総合雑誌に掲載されたものなかでも「アカデミズム／ジャーナリズム」^{スペクトラム}の分布体上におさまる「時論」的なテキストを対象を限定した—とは対照的な関連づけの様式にも映る。しかしながら、「非典型的」な時評と「典型的」なそれとの関係を考えるためには、以下の三点に留意する必要がある。

第一に、二種の論壇時評が「並存」しているという単純な事実がある。まず樺山や見田、鶴見らの論壇時評においては「総合雑誌に掲載された時論的テキスト」もまた閑説されている。「非典型的なテキスト」への閑説は「典型的なテキスト」との落差によって意義づけられており、その意味で「ジャーナリズム／アカデミズム」の評価軸が等閑視されているわけではない⁵⁰。上記の評者の担当回を通して見れば「典型」「非典型」は並存しているのである。

また評者選定の段階で、「非典型的な（テキストに閑説することが多い）論壇時評」の周囲には概ね「典型的な（テキストに閑説することが多い）論壇時評」が配されるように、ある種のバランスが考慮されているようにも見える。たとえば、『朝日新聞』で鶴見の後を引き継いだ「国際政治学者」武者小路公秀の論壇時評は次のように記載する。

《今まで、読者として各紙の論壇時評を読んで、親切な時評は主要月刊誌の主要論文をとりあげていて、読者が自分で月刊誌を買わなくてもいちおう知ったかぶりができるような仕組みになっているし、反対に個性的な時評は、（本欄の先輩、鶴見俊輔先生を含めて）独特な物差しで独創的な論文や新刊書をとくにえりすぐってとりあげるため、より平凡な論文の論調がよく読者にはつかめないという仕組みになっているばあいもあることに気がついていました。》〔武者小路 1976a: 3〕

その後武者小路の時評欄で実際に閑説されたもののほとんどは「総合雑誌に掲載された時論的性格の強いテキスト」

⁴⁹ 一九七四年から七五年まで『朝日新聞』に掲載されたこの鶴見の論壇時評は、「時評」を謳いながら、小説に拠って明治大正期の総合雑誌の地方読者層の特徴を素描し〔鶴見 1975a: 3〕、大正元年以来の総合雑誌の巻頭論文を通読し〔鶴見 1975b: 3〕、最初の論壇時評を批評する〔鶴見 1975c: 3〕など、論壇なるもの、ならびにそれに閑説することへの自己言及的・歴史的問題意識も現れており、その点でも興味深い。

⁵⁰ 「ジャーナリズム／アカデミズムなる評価軸には取まりきらないこと」が論壇時評のなかで明示的に強調されることを考えれば、そうした評価軸の存在自体はかえって強く意識されているときさえいえるかもしれない。

であった⁵¹。また同じく『朝日新聞』で見田の後を受けた「経済学者」佐和隆光の論壇時評も、概ね総合雑誌の時評的論考に取材していることは否めない⁵²。

『朝日新聞』で見田の十年前に鶴見が論壇時評を担当していることからもうかがえるように、「非典型的」なテキストを採りあげる可能性が高い評者が編集サイドによって周期的に選択されていると考えられる。こうした編集サイドのバランス感覚は、複数評者制が採用された際にはさらに明瞭に現れる。見田が『読売新聞』では「政治学者」河合秀和・「経済学者」西川潤と組み、樺山も「経済学者」正村公宏と組んで、それぞれ時評を担当していたことから示唆されるように、しばしば見られる見田や樺山らの「非典型的」な論壇時評は、かなりの程度まで役割期待に沿ったものとみなすことができるのである。こうして評者の配置という観点からみると、「非典型的」な論壇時評は、時系列的あるいは空間的に、「典型的」な時評と「並存」していることになる。

・「時論ならざるもの」の系譜

二番目に留意すべきは、「総合雑誌の時論以外のテキスト」に対する閑説自体は、実は論壇時評の創成期からほぼ一貫して見られるという点である。第一の留意点とも関係するが、論壇時評という様式が当初から、ある種の「揺らぎ」として「非典型的」なテキストが閑説されることも制度上織り込んだものだったことが、評者の選択などからうかがわれる。「総合雑誌」の影響力が低下し雑誌メディアが多様化してから、それに対応するために「非典型的」な論壇時評が生まれたわけでは必ずしもないのである。

実際主要三紙の論壇時評の評者を見ると、まず戦後時評欄が復活してから六〇年代までは「政治学者」や「経済学者」といった「本格的」な社会学者の登用はむしろ少なく、「評論家」や「歴史学者」「哲学者」など人文科学者の登用が目立つ⁵³。敗戦直後に叢生した新興雑誌が淘汰され、批評対象が『中央公論』『文芸春秋』『世界』の三誌に局限される傾向は見られたが、人文科学系の背景をもつ評者の論壇時評では、そうしたなかでも「非典型的」なテキストが閑説されることがあった。たとえば総合雑誌のなかから、「評論家」村松剛の時評ではハンナ・アレントの随筆が[村松 1969: 5]、「哲学者」田中美知太郎の時評では伊藤整や堤清二の文芸評論が[田中美知太郎 1962: 5]、「評論家」中島健蔵の時評では室尾犀星の小説がそれぞれ採りあげられている [中島 1951: 2]。また『毎日新聞』で「評論家」加藤周一が担当した時評では、日本の総合雑誌とほぼ同等のスペースが、*New Republic* や *New Statesman*, *France Observateur*, *Der Spiegel* といった海外の週刊誌、*Foreign Affairs* のような専門誌の紹介に割かれている。

一方、毎月評者を交替させていた戦前の論壇時評においては、論壇との関与性が設定されるテキストの範囲が、そもそも評者によって少しずつぶれていた。『東京朝日新聞』の初回の論壇時評が『プロレタリア科学』なる「左翼雑誌」を採りあげたことはすでに述べた⁵⁴。同紙では、経済評論家⁵⁵の高橋亀吉が担当した回でも、いわゆる総

⁵¹ とはいえ一月分の時評欄をすべて充てて、訪仏時のフランス論壇事情を紹介したり、雑誌編集者との鼎談内容を掲載するなど、実際にさまざまな「スタイル」が模索されていることもまた事実である。

⁵² 見田から佐和に評者が代わった一九八七年、『朝日新聞』の論壇時評欄に対する上野千鶴子の閑説が他紙文化欄に掲載されている。《朝日新聞は今春、論壇時評の担当者を二年間つづいた社会学の見田宗介氏から経済学の佐和隆光氏にバトンタッチした。見田氏は六〇年代末からの対抗文化（カウンターカルチャー）のカリスマだったから、見田氏の退陣と佐和氏の登場は「(対抗)文化の時代」の終わりと「経済の時代」の開幕を象徴するできごとのように思える》[上野 1987: 4]。しかしながら、見田から佐和への交替を一回かぎりの・単方向的な「趨勢」として提示してみせる上野の解釈には無理があるように思える。

⁵³ 巻末の論壇時評欄評者一覧を参照のこと。

⁵⁴ 二五頁参照。

⁵⁵ 戦後の論壇時評欄では評者の専門や肩書が文末その他に明示されることが定型となっているが、戦前においてはそのような記載はまず付されない。したがって本文の（鉤括弧のない）肩書は筆者が独自に付したものである。戦後比較的高名な中野好夫が最初に評者を担当したときには注記されず、ドイツ文学が専門の高橋義孝が評者となった際にはじめて「九州大学助教授」と付された。ここから推測すると、戦前は評者の大半がそのまま総合雑誌への積極的寄稿者で時評欄読者にも馴染み深いメンバーで占められていたので改めての紹介が必要なかった。

第三章 閑説の様式による規定

合雑誌よりも東洋経済、エコノミストなどの経済評論雑誌や左翼雑誌に掲載される論文のほうが《問題を創り、現実の政治、経済をリードしつつある》[高橋 1932b: 5]として閑説の対象とされている。また哲学者の谷川徹三も論壇時評の開始から半年後に評者に登用されており、その時評では『東京朝日新聞』自身の「女性相談」欄や、『思想』の「哲学時評」欄など、総合雑誌以外のテキストが大きく扱われている[谷川 1932a: 5, 谷川 1932 d: 5]。これに対して、総合雑誌に掲載されたテキストのなかでも「時論」的性格の弱い文芸時評を採りあげているのが大宅壮一の時評である。七年前に文壇ギルドを「ジャーナリズム」の問題として論評した[大宅 [1926]1981] 大宅の時評では、『改造』、『文芸春秋』、『経済往来』、『新潮』といった雑誌に掲載されている文芸批評は特段の断りなく論壇時評に関与的なものとして扱われている⁵⁶。他方、帝大経済学部を辞職してその後評論家として活躍していた大森義太郎の時評の場合は、《日本の現代の一般雑誌は […] 政治、経済雑誌になつてゐる》などと述べながら『思想』のベルグソン論に触れ、《これを論壇に所属させるのはどうかとも思ふが》と留保しつつ総合雑誌の随筆をとりあげる[大森 1935d: 9]。さらには《論壇といふのを少し広く解すれば》などと言って《理論的文芸論文》に閑説するのである[大森 1935e: 9]。

「ジャーナリズム／アカデミズム」いずれかへの偏りを主題化しやすい総合雑誌の「時論」以外のテキストに閑説する「非典型的」な論壇時評が、かくも早い時期から、かくも恒常的に出現しているということは、はたして何を示唆しているのだろうか。「非典型的」な閑説を行いやすい評者の選定もまた新聞社（学芸部）の編集サイドによって行われていることを考慮に入れば、「非典型的」な論壇時評の出現はあらかじめ想定された「ゆらぎ」とでも理解すべきものであり、「まったく例外事態」などではなく、また「評者の独創性」にのみ帰すべきものでもないことがわかる。編者の意向が（執筆依頼時の漠然とした期待・予期のような間接的なものであれ）働いているという意味では、「非典型的」な論壇時評もまた、論壇時評という様式の枠内にあるのである。

同じことを別の方向から述べることもできる。論壇時評欄で小説を論じ、文芸評論を論じ、抽象的な哲学論文を論じ、あるいは海外の雑誌を論じ、専門誌を論じ、運動誌を論じ、サブカルチャー雑誌を論じ、新聞を論じ、書籍を論じ、テレビ番組を論じることは確かに「斬新」に映るかもしれない。しかしながら、そうした実践が「典型的」な論壇時評とまったく共通点をもたないほど真に「斬新」だとすれば、それはもはや「非典型的」な論壇時評とすらみなされないであろう。しかしながら、実際には、上で列挙したようなテキストへの閑説＝関与性の設定もまた（評価の善し悪しは別にして）「論壇時評」として了解されている。とすれば、「非典型的」な論壇時評と「典型的」なそれとのあいだには、どこかに通底する水準があるのである⁵⁷。

・相似的な効果

ここまで来れば、二種の論壇時評の関係を考える上での、最後の留意点もほぼ明らかであろう。「非典型的」な論壇時評と「典型的」な論壇時評とでは、事後的な閑説によって関与性が設定されるテキストの範囲こそ対照的だが、社会的実践として捉えれば両者は相似的な効果をもっているのである。

「典型的」な時評の場合、総合雑誌の「時論」的なテキストに閑説の対象を限定し、そこに「ジャーナリズム／アカデミズム」という評価軸を適用して「偏り」を「発見」していくことによって、真に論壇に関与的な「時論」の範囲を指定していく。これに対して「非典型的」な時評の場合、総合雑誌の「時論」的なテキスト総体に対して関与性の設定を留保して、その「外部」に閑説的なテキストを探索することになる。しかしながら、閑説すると

たのに対し、戦後初期に、相対的に馴染みの薄い大学教員が評者として続いたために、新たに評者紹介が設けられ定着したのかもしれない。

⁵⁶ 論壇と文壇とをある意味で「地続き」のものと捉えて閑説していくこの大宅のスタイルは、後述する匿名短評欄の閑説様式と強い親和性をもつものである。

⁵⁷ 《なぜソメイヨシノは「桜」とよばれたのか？ 極端な話、もしソメイヨシノの花が従来桜のイメージを本当に吹き飛ばすようなものであれば、それは桜とはよばれなかったはずである》[佐藤 2005a: 35]。

いう実践がもつ効果という点では、二つのタイプの論壇時評はほとんど重なることになる。すなわち、いずれの種類の論壇時評においても、「時論を中心とした総合雑誌という事実態がそのままでは論壇たりえない」という了解を媒介として、^{レリバント}関与的なものの探索＝外延の数え上げが散逸的・主観的なかたちでくりかえし励起される。そして、^{レリバント}関与的なテキストの探索を反復することによって、論壇なるものの存在が、その一義的な定義＝内包の指定を将来に先送りにしながら、いわば「手探り」で確認されるのである。

このように、^{レリバント}関与的なテキストへの関説という観点からみると、論壇時評という^{コミュニケーション}関連づけの様式が帯びている構造的な特性は、論壇なるものについて外延の探索を励起し内包の指定を宙づりにする効果に求めることができるだろう。一見すると、「論壇」が「ゼロ記号」としてその定義を巡る言語ゲームを賦活しているようにも映るが、実際に^{きっかけ}作用因となっているのは「総合雑誌掲載のテキスト」という事実態、より正確には事実態の不完全さについての了解の方であった。まず、個々のテキストに対する^{レリバンス}関与性の設定の積みかさねによって、論壇なるものが――その内包の定義を将来に繰り延べたまま――報道や学術、政治といった他の^{コミュニケーション}関連づけから区別される。事後的な関説によって、ジャーナリズムあるいはアカデミズムのいずれかへの接近を疑われるテキストは、その論壇との^{レリバンス}関与性を危機にさらすことになる。一方、論壇に^{レリバント}関与的なテキストの指標としてしばしばしばしば挙げられる構想力や実践性にしても、それが「過剰な」政治性や党派性と事後的に解される可能性がつねに開かれており、やはり批判の対象となりうる。「論壇にふさわしいテキストはいかなるものか」「それらを報道の、学術の、政治のテキストと分かつものは何か」といった問いについて、一義的に決定することを先延ばししつつ、「これは論壇にふさわしいテキストではない」という個別的な関説を積みあげることによって、論壇の自律性についての了解が成立するのである。

さて、こうして論壇時評という関説の様式においては、^{レリバント}関与的なテキストの「内包」の決定を先送りにしつつ、^{アド・ホック}その場その場で種々のテキストが論壇なるものとの^{レリバンス}関与性を設定され、その「外延」として数え上げられていくことになる。そしてこのとき、いったんある特定のテキストについて論壇との^{レリバンス}関与性が設定されると、当該テキストの産出やそれへの関説が、論壇という文脈のなかで新たに「行為」として了解される余地も生まれることになる。その結果、《論壇に^{レリバント}関与的なテキストがそなえるべき特質とは何か》をめぐる関説とは独立に、《論壇に^{レリバント}関与的なテキストについて、それを産出する／それに関説する「行為者」はいかなる「^{ベレル・ソナ}人称＝位格」をそなえるべきか》をめぐっても、論壇時評上でさまざまな関説がなされることになる。次項では、この「^{ベレル・ソナ}人称＝位格」に関する関説という観点から、論壇時評という関連づけの様式の構造的な特性をさらに検討してみよう。

(C) 「^{ベレル・ソナ}人称性＝位格」としての論者と評者

同記事後的関説様式である文芸時評に比較しても、論壇に^{レリバント}関与的なテキストの「論者」やそれに時評で関説する「評者」の「^{メンバーシップ}成員性」を指定することは難しい。前者では「作家／（文芸）批評家」の分立関係が個々の具体的関説に待つまでもなく比較的安定している。これには、テキスト（創作）・メタテキスト（文芸時評）のいずれについても、まず関説以前の定義が論壇に比べて容易であり、加えて「作家性」のような「^{ベレル・ソナ}人称性＝位格」と結びついた「^{ディスコース}談話」として取り扱われるべきという了解が成立しているためと考えられる。一方、後者の論壇時評には、^{レリバント}関与的なテキストは関説によって事後的に決まるため「論者」はアドホックにしか指定できず、また「評者」に要求されるべき^{エキスパート}専門性が確立しているわけでもない（実際、後述するように時評者はしばしば自らが「素人」であることを強調する）。このように論壇における「論者」や「評者」の「^{メンバーシップ}成員性」が相対的に不安定なものとなる背景には、論壇なるものが、近代的な語り口の二分法のいわば限界事例に位置していることも影響していると考えられる。すなわち論壇に^{レリバント}関与的なテキストやメタ・テキストがもつ「^{ディスコース}談話＝討議」的語り口の性質を強調するために「^{ベレル・ソナ}人称性＝位格」を前景化させるように働く力学と、逆に「マス・コミュニケーション」的語り口の性質を強調す

第三章 閑説の様式による規定

るために「人称性^ベ=位格^{ソナ}」を捨象するように働く力学とが、同時に作用しているのである。このことは、論壇時評における「論者」や「評者」の取り扱いに微妙な屈折として反映される。

以下では、「二つの語り口」のあいだで論壇に関与的な「人称性^ベ=位格^{ソナ}」--「論者」、「評者」、そしてあまり明示的には閑説されない「編集者」--が被るこの微妙な屈折を、実際の論壇時評から分析する。

・「論者」なる人称性^ベ=位格^{ソナ}

すでに検討したように、論壇では、対面状況下の討議とは異なって、その場性 Anwesenheit によって「論者」が決まり「主題」への集中を強いられるということはない。関与性は「評者」が一月間を「共時的地平」とみなして設定するものであり、「論者」や「主題」も事後的に措定される。「決定」へと水路づけられる議会や「真理」へと水路づけられる学界には、関与的な「論者」や「主題」を稀少化する各種手続きがあるが、それらとくらべても論壇での関与性の設定は構造的にその場かぎりのものとならざるをえない。もちろん、きわめて強い関心と呼ぶ「主題」が外在的に存在した結果「論争」の体をなしたり、あるいは特集企画などによつて操作的に「討議」の体裁が整えられたりすることはあるが、論壇全体からすればそれらはむしろ例外的状況である。

にもかかわらず／あるいはそれゆえに、論壇時評においては対面状況下での「討議」のイメージへの擦り合わせがしばしば企図され、「論争」やその「欠如」が論壇の存立にかかわるものとしてしばしば主題化される。たとえば、一九八四年の樺山紘一の論壇時評では、《論壇もしくは社会や文化のありようについての公的言論がもつ迫真力が、極端に低下してしまった》との判断が示されるが、そのときに指標とされるのは《全面・片面講和、安保改定、日韓条約、核抜き沖繩返還といったような》《その昔、論壇を賑わせたような大論争は、すっかり失われてしまった》ことである [樺山 1984: 11]。もちろんそこで《大論客》が活躍した時代への単純な復古が希求されているわけではないが、「論点」を剔出する姿勢の必要性は説かれている。だが樺山の時評のなかで《大論争》があったとされているいくつかの時代を実際確認してみると、その当時の論壇時評においても、やはり時評者は論争の不足を指摘しており、論壇に関与的なものとして論者の「応答責任」を強調しているのである。たとえば安保改定の前後でいえば、「政治学者」中村哲の時評は、《文学者や哲学書生が米ソの対立などを論じて、政治家や政治学者が一向に論争しない》と批判する田中美知太郎のテキストに閑説した上で、留保を付しながらも《生きた政治問題を論じている政治学者の少ないことは、どのような批判をうけても充分とはいえないといっている》と認める [中村哲 1955a: 5]。また安保改定の翌年には、中村菊男の論壇時評が以下のような文面でやはり論争を促している。

《「世界」三月号に載った小宮論文と「中央公論」四月号に出た福田論文に対する反論を期待したが、いまだに正面切っただれも論争を挑んでいない。[...] 論壇でも論争をやれば問題点がはっきりするし、今まで押しつけがましく一方的に論ぜられてきたことも、その内容の弱さを示すのではないかとひそかに期待する次第であるが、ぜひ天下の耳目をあつめるようなはなばなしい論争を展開してもらいたいものである。》 [中村菊男 1961c: 5]

こうした「論争（やその不在）」の主題化は、「論者」という「人称^ベ=位格^{ソナ}」に独創性や投企の契機を読みこむことによって、「論壇に関与的なテキスト」に措定されるべき「談話^{ディス}=討議^{コース}」的性格を強調する効果をもっているといえる。

だが「論争」の主題化、「論者」の「人称^ベ=位格^{ソナ}」の前景化には、論壇に関与的なテキストがもつ「マス・コミュニケーション」的語り口の性質--属人的要素や偏りを排して不特定多数の誰にでも理解するという性質--を危うくする側面もある。そうした危険性に対応して、たとえば論壇時評のなかには、語り口としての二つの性質を適宜調停するかのように、一定の留保を付すことによって却って「真の論争」が賦活されるという論理を用いるものも出てくる。たとえば「経済学者」問宮陽介が二〇〇〇年から担当した時評は、その初回で《論点を深めるための論争や論戦が乏しい》 [問宮 2000: 15] (強調は引用者) ことを指摘するが、その処方箋として「論者」に単純に「論

争」を奨めるわけではない。

《丸山真男は日本での論争は、俺はコーヒー派だ、俺は紅茶派だといった自分の嗜好をぶつけ合う類の論争が多く、その背後にはナルシズム（自己愛）があることを指摘したが、論争を「テーマ」をめぐる論争から「論点」をめぐる論争へと深化させるためにはナルシズムからの脱却が何よりも必要となるう。》[間宮 2000: 15]

丸山真男の「自己内対話」の一節を引きながら、そこでは「人称^ベ性^ル＝位格^ソ」の前景化に一定の留保が付されるのである。ほぼ同時期には、やはり論争の必要性を訴えつつ、それが《ケンカもしくはショーとしていたずらに消費》されることを防ぐ「作法」の必要性を同時に主張する松原隆一郎の時評もある[松原 1999: 5]。また《大論争》が盛んだったともいえる一九五五年にも、「哲学者」福田定良の時評のなかでは、《論争を健全に発展させ》るためにも論争を無理強いしないよう編集者に要請されている[福田 1955: 7]。

あるいは「論争」の「危険性」がさらに重視される場合もある。一九七六年の武者小路公秀の時評は、《論争を擬人化し》《好取組を期待するファンの立場》と、《作者とははっきり区別された一つの作品》として論文をとらえて《本格ものの探偵小説を読む読者にも似た謎解きに興味をもつ立場》[武者小路 1976a: 3]との二種を分けた上で、次のように後者の立場を支持する。

《論者に対して評者がひいきしたり好取組みを喜ぶのでは、客観的で冷徹な論理だてによって政治・経済・社会の諸問題を分析するスタイルよりも、情緒的な文学スタイルの論文が高く評価されるようになってしまう。このような傾向を避けて、政治・経済・社会などの諸問題を明晰な論理によって追求し、独創的ななぞ解きをおこなうスタイルを意識的に育てる必要があるであろう。》[武者小路 1976a: 3]

また五五年の「評論家」加藤子明の時評でも、歴史問題や国語改良問題をめぐる論争について、その内容の高度さは認めながらも、いずれの立場の「論者」も《お前はこういう卑劣なことばをつかってオレをののしったのはけしからんという意味の文章を、マクラにしている》と指摘して「ケンカ」と評している[加藤 1956: 5]。

このように、ちょうど「談話^{ディスコース}＝討議」的語り口と「マス・コミュニケーション」的語り口とが交錯するような位置に論壇^{レリバント}に關与的なテキストが指定されるため、事後的閑説においては「論争」と評価するか否かがくりかえし主題化し、それによって論壇における「論者」の「人称^ベ性^ル＝位格^ソ」の取り扱いも分かれることになる⁵⁸。

・請負仕事としての執筆

しかしながら、論壇において「論者」なる「人称^ベ性^ル＝位格^ソ」について閑説する場合、論争志向的にその存在を前景化させるべきかあるいは論理志向的に後景化させるべきかという座標軸の他に、実はもう一つ想定可能な論点がある。すなわち、論壇における「論者」なる「人称^ベ性^ル＝位格^ソ」が往々にして「雑誌編集サイドから注文を受ける立

⁵⁸ この説明をとる場合、当然、「なぜ論壇^{レリバント}に關与的なテキストは二種の語り口が交錯するような位置にあるものとして指定されるのか」が説明されなければならない。しかし、現状ではその理由を十分に説明することができない。今回は、脚註にて現時点で思うところを素描的に示すとどめ、本格的な検討は他日を期したい。「論壇^{レリバント}に關与的なテキスト」が「談話^{ディスコース}＝討議」的語り口と「マス・コミュニケーション」的語り口のいずれの性格も読みこまれてしまう状況に關係する要素として、以下の二点が考えられる。第一点は、近代<社会>が「<個人>によって構成されている」という強い想定をおいた社会であることであり、第二点は、論壇について、歴史偶有的な経緯で<社会>を表象するという時論的性格が想定されていることである。「<個人>による構成」を想定される<社会>は、一方で、その秩序なり構造なりについて「誰にでもわかる」という「透明性」が要求される。と同時に、「<個人>による構成」を想定される<社会>は、その帰結たる秩序や構造についてのリスクが<個人>に分散的に帰責されるという側面ももつ。こうした社会において、<社会>を表象することを想定された時論的性格の強いテキストに対しては、二重の役割が期待されることになる。一つめは、<社会>を<透明>に表象する役割であり、二つめは<社会>について<個人>の資格で構想し、その責任の一端を分担することである。論壇に關与的なテキストに投影される二種の語り口は、上記二重の役割に対応しているようにも思える。

第三章 閑説の様式による規定

場」にあるということ、その請負業的性格をどのように考えるべきか、という論点である。真理探究の観点から投稿や審査の手続きが定められている学術雑誌の場合、「発意」、すなわち執筆着手の^{イニシアチブ}先導権は通常「論者」という「人称性^{ペルソナ}＝位格」の側にあると擬せられる⁵⁹。しかしながら総合雑誌に代表される一般誌の場合、雑誌としての通時的連続性や特集記事の存在などによって「編集意図」がより顕在化していることもあり、「編集者」と「論者」との発注-請負関係が相対的に主題化されやすい⁶⁰。そしてこの請負業的性格は、「論者」という「人称性^{ペルソナ}＝位格」に期待されている自発性なり主体性なりを損なう「受動性」として了解される可能性が出てくるのである。

論壇においては、「談話^{ディスコース}＝討議」的語り口にひきつけた論争志向的なテキストとして了解される場合にも、「マス・コミュニケーション」的語り口に引きつけた論争志向的なテキストとして了解される場合にも、そのいずれかへの好悪とは別に、そうしたテキスト産出の淵源として「論者」なる「人称性^{ペルソナ}＝位格」による「主体的選択」が想定されやすい。にもかかわらず「論者」の請負業的立ち位置が前景化するとすると、問題となるのは、この「主体的選択」の想定に正面から抵触する危険性である。実際、一九七七年の中野好夫の時評においては、総合雑誌の一部筆者に見られる「請負業」的な所作が次のように厳しく批判されている。

《[...] 編集部からの注文でとか、出題でとかいった風の断り書ではじまる論稿が、案外と思えるほど多いのだ。》

《そもそも評論誌なるもの、そう全誌を筆者自発的寄稿だけで作り上げるわけにはいかず、一部はいわゆる出題寄稿に頼らざるをえぬ編集者の苦心もわからぬではないが、やはり中心は執筆者自身が自発的にこれだけはぜひ言っておかねばならぬ、ぜひとも国民に訴えたいといった内容の論稿類が、目玉になるのでなければ、もはや総合評論誌の存在意義なしというのが、偏見かもしれぬが、時評子の信念である。》[中野 1977c: 7]

また同年の時評者同士の座談会記事のなかでは、時評者の一人である「精神科医」のなだいなだが、注文に応じてさまざまな雑誌に無節操に寄稿する論者の姿勢を、編集者の安易さとともに批判し、そうした姿勢が論争を不活性にしていると指摘している [山本・なだ 1977: 7]。

もちろん、こうした「論者」と「編集者」との関係は七〇年代になって初めて成立した新奇な現象ではない。実際、早くも一九三二年には、総合雑誌における編集プロセスの変化を高橋亀吉の論壇時評が伝えている。それによると、高橋自身が諸雑誌に寄稿しはじめた当初⁶¹は、

《[...] 論文の依頼には、題の指定といふことが今日の様ではなかつた。何か執筆する良い問題はないかといふ風に相談されたものだ。しかして、その執筆の期間も、必要とあれば数ヶ月の余裕が与へられた。自然、執筆者は、それぞれの立場から、いま重要な問題と認め、書いて見たいと思ふものを書くことが出来た。》[高橋 1932b: 5]

一応留意すべきは、少なくとも高橋の場合、当初から当然に持ち込み原稿などではなく、編集部からの依頼で執筆がはじまっている点である。ただしこの時点では主題の選択権や時間的余裕が与えられていた。ところが、近年は、

《執筆の依頼に際し、雑誌社から、題を指定されかつ可なり短期日の間に、与へられた紙数に注文に応じて書くといふ傾向

⁵⁹ もちろん、学術雑誌においても編集サイドからの寄稿依頼によって執筆が開始されるケースは当然あるが、ここでは単純化のため捨象している。また学術雑誌への投稿者に話をかぎっても、より厳密に考えれば、将来の掲載可能性や評価を予期した上で執筆を「発意」するため、「論者」なる「人称性^{ペルソナ}＝位格」の^{イニシアチブ}先導権の発揮を行為の端点であるかのように看做すことは端的に「誤り」であるが、ここでは一般的な了解として総合雑誌との比較で議論しているため、やはり議論を単純化している。

⁶⁰ 一般に販売される「学術図書」の場合でも、刊行すべきテキストの選択というかたちで、「編集意図」は当然強く働いている（編著の場合など特に妥当する）。しかしながら、書籍の場合は通時的に継続する「編集者」を比較的想起しにくいこともあり、「人称性^{ペルソナ}＝位格」としては「筆者」のみが比較的前景化しやすいと考える。

⁶¹ 高橋が『東洋経済新報社』に入社するのが一九一八年、退社してフリーランスとして経済評論を開始するのが一九二六年なので、ここでいう「当初」は概ね二〇年代のことを指していると考えられる。

が強くなった。然して、甚だしいのになると、論文のみでなく、テーマまで指定した創作の注文制作が掲載されるに至った。》
[高橋 1932b: 5]

そして、このような短期日の（前述の中野の術語を使えば）「出題寄稿」が一般的になった結果、表面化してきた弊害として、問題の後追い化と論文の質の低下の二点を挙げている。前者は《売行本位に考へるジャーナリズムに敏感な少数の編集者が題を選ぶ》からであり、後者は「論者」から見れば《突如として題を与へられ、それを短期間に書く》羽目に陥り、『編集者』から見れば寄稿を断られても第二候補者、第三候補者へと持ち回って、何とか寄稿してもらうことになるからである [高橋 1932b: 5]。

このように総合雑誌を中心として論壇なるものを措定するかぎり、そこでのテキストの産出が「論者」の請負によってなされるというのはかなり早い時期から常態化していたとも考えられる。実際戦前の雑誌論文には、中野のいう「注文で」「出題で」といった表現を、少なくとも戦後と同じくらい頻繁に目にすることができる。前述の通り、こうした「請負仕事」としてのテキストの産出は「論者」に措定されている「人称性＝位格」を脅かすものとして了解される可能性がある。ただし、論壇時評における実際の閑説のされ方を見るかぎり、この「請負」についての実際の了解のされ方には、戦前と戦後で微妙な相違があるという印象を受ける。

七七年の中野と高橋はいずれも、「注文に応じてテキストを産出する論者」に対して相当に厳しい評価を与えている。それは「論者」の「人称性＝位格」ととどまらず、そこから派生して論壇全体の実定性を損ないかねないものである。実をいえば、上記二例以外で「論者による請負」の問題を明示的に採りあげた戦後の論壇時評は確認できない。しかしこの事後的閑説における「沈黙」は当該問題の等閑視を意味しないと考える。中野の時評にもある「論者」の自発性、主体性、積極性への期待は、他の時評にも頻繁に見られるフレーズであり、その一方で、安易な企画や商業主義的傾向に対する批判もやはり時評で頻繁に目にすることができる。唯一、「論者が注文に応じて書く」局面のみが慎重に閑説性^{レリバンシー}の設定から外され、それに直接的に閑説することが意識的に回避されているように映る。その背景には、前節で見た、論壇に閑説的なテキストの外延を数え上げながら、その内包の積極的な定義は徹底して回避するという「論壇なるもの」の特殊な措定のされ方において、「論者」という「人称性＝位格」に投影される「主体性」を自由度として担保しておくことがきわめて重要だからとも考えられる。雑誌編集者が「論壇に閑説的なテキスト」の定義権を完全に掌握していると了解されると、事後的了解可能性に開かれている論壇なるものの構造が根本的に変わることになる。逆にいえば、論壇時評なる事後的閑説様式において、「論者」という「人称性＝位格」が帯びている構造的位格は、「個人」の「投企」・「選択」の契機を前景化させることによって、事実態を否定するかたちでの論壇なるもの散逸的な措定の機制を更新していくことにあるともいえる。

ただし、戦前における「注文に応じて書く」ことについての閑説のされ方では多少事情が異なるように思える。確かに戦前においても「テキスト産出の請負化」は、高橋の時評からもうかがわれるとおり、深刻な弊害を招くものとして捉えられている。ただし戦後とやや異なるのは、そうしたテキストの産出構造の変化を不可逆的なものとして捉えた上で、そこに両義的な意味を見いだす視線が成立する余地も残されているように見える点である。たとえば高橋の時評でも、上記の編集プロセスの変化は、元来は、選題権を筆者に与えることによって《時代の流れとほとんど無交渉のアカデミックな雑誌に載せるに値しない》[高橋 1932b: 5] 主題が雑誌に入ってきてしまったことへの反省として生じたものと位置づけられており、また誌面をジャーナリスティックでバラエティに富んだものにする効果も認められてはいる。高橋自身が当時フリーランスの経済評論家であったが、そういった人々にとって、「注文受けてテキストを産出する構造」は単純に全否定すれば済む存在ではなかった。たとえば、九州帝国大学から辞職を強要されやはり当時フリーランスの評論家として活動していた向坂逸郎が担当した論壇時評は、自己が閑説の対象にする論壇なるものが、問題の政治的解決も理論的結末も示すことがないと指摘した上で、その理由に《論壇といふ壇がジャーナリズムの一隅に据えられてゐる》て《今日ではこの壇はジャーナリズムから離れることは出来

第三章 閑説の様式による規定

ない》[向坂 1936: 7] 点を挙げている。しかしながら、最後には《二言目にはジャーナリズムの弊を説くより、こゝで撰取できるものをもつて帰つた方が得だ》と結んでいる。向坂のように、当時フリーランスでそれを業としていた者のなかには、「注文を受けてテキストを産出する」ことに特殊な意義を認める者も少なくはなかった。この点については、第四章にて、一九三〇年代に「論壇時評」と並行して存在した「匿名短評」という事後閑説の様式の意義を見る際にいまいし詳しく検討する。

・「評者」なる人称性^{ベルソナ}=位格

第一章でも述べたように、大塚英志は「論壇誌」と呼ばれるいくつかの雑誌にもものを書き続けていれば「論壇の人」になると述べている [大塚 2001: 7]。では、新聞紙上で「論壇時評」を担当する評者は果たして「論壇の人^{インサイダー}」とみなされるのだろうか。もちろん事実としては、論壇時評は《論壇人による論壇人の相互評価の場》[田中紀行 1999: 192] と捉えられることがあるが、事後的閑説の様式のなかで措定される「人称性^{ベルソナ}=位格」という観点から、論壇時評における「評者」と「論者」への閑説のされ方を比較すると、両者のあいだにはある種の非対称性が設定されるよう留意されていることがうかがわれる。

「論者」との非対称性という点でまず目につくのは、論壇時評における「評者」という役割がしばしば「余技」・「余業」の相で表象されている点である。象徴的なのは中野好夫の例である。前述の通り、七七年に中野が担当した論壇時評は、一部「論者」に見られる「請負業」的な所作――編集部からの「注文で」「出題で」といった物言い――を自発性の欠如の顕れと捉えて厳しく批判した [中野 1977c: 7]。しかしながらその四ヶ月前の担当初回の時評では、評者たる自身について《妙なことで月評を担当する仕儀となった》、あるいは《お気に入らねば、明らかにそれは人選の誤りなのだから、社の方へ不服を申し入れてもらいたい》[中野 1977a: 5] といったような、月評が「請負業」であることを明示するような表現が用いられているのである。もちろん中野個人にとって真に重要なのは、「評者」であれ「論者」であれ、その主体的な姿勢の方にあるのであって、自身についての表現は単なる諧謔にすぎないのであろう。しかしながら、時評が編集者からの注文に端を発する「請負業」であることを示唆するような表現は、他の者が担当した論壇時評にも散見される。そもそも、田中紀行 [1999: 192] が確認したなかでもっとも古い一九三一年の『中央公論』の「論壇時評」の初回において、すでに《公論子の要求で》石浜知行が月評を担当したことが明記されている [石浜 1931: 113]。新聞の論壇時評においても、同じ三〇年代には《十一月中に発売された十二月号の諸雑誌に出てある評論を批判すること、これが私の引き受けた仕事》[河上 1931: 5] や《引き受けた以上は仕方がないと諦らめて》[林癸未夫 1936: 9] といった表現が見られ、また戦後の時評にも《四つの総合雑誌の五月号について、何か書けというのを》[緒方 1952: 4] と編集サイドからの「発注」の存在を明記したものがあつた。こうした「評者」という「人称性^{ベルソナ}=位格」について主体性・自発性を半ば否定してみせるような閑説のありようは、その「余技」・「余業」の印象を強化することになる。

・「素人」という^{エクスキュース}弁明

「余技」・「余業」に関していえば、「評者」が時評の「素人」とであると強調されることが多いのも論壇時評という閑説様式の特徴の一つである。前々節の『「虚焦点」としての総合雑誌』であつた「読みにくい・読まれない総合雑誌」という時評のライト・モチーフにもかかわることだが、論壇時評においては「評者」が平生は総合雑誌を通読せず、時評の「専門家」とはいえない旨の^{エクスキュース}弁明がしばしば表明される。

たとえば前述の、確認されているなかでもっとも古い『中央公論』の「論壇時評」でも、冒頭で次のように宣せられる。

《毎月多くの雑誌が手もとに集まるが、そのうち、自分の専門のものか、特に興味をもつもののほかの論文は、あんまり読

まないことにしてゐる。》[石浜知行 1931: 113]

同じ一九三〇年代の経営学者上田貞次郎の時評でも、《元来読書といふことは至つて不精な者で、毎月の雑誌論文などあまり読んでゐないから時評をする資格がない》[上田 1934: 5]と断っている。まったく同じ論理の弁明^{エクスキューズ}は一九七八年の「経済学者」玉城哲の論壇時評にもあり、「総合雑誌」の類をよく読む方ではないから「時評」の担当は《不得手でもあり、また不適任でもある》としている[玉城 1978: 6]。近年の時評を見ても、たとえば二〇〇〇年の間宮陽介による論壇時評は《今回、論壇時評を開始するにあたって、初めて多くの雑誌を同時に読む機会を得た》と記す。

同様の弁明^{エクスキューズ}は文芸時評の場合にはあまり見られない。直接には、評者の大半が「素人」を主張できない文芸批評家や作家であることが影響していると考えられる。しかしながら、本論の巻末資料などからも容易に確認できるように、現実には論壇時評の「評者」もその相当部分は論壇の「書き手=論者」としても著名な人物によって占められている。にもかかわらず、論壇時評においては「素人であること」「普段は通読しないこと」がわざわざ言挙げされていることになる。論壇時評の「評者」をしてかかる弁明^{エクスキューズ}を表明させる誘因となっているものは何であろうか。ひとつ考えられるのは、「主観性」を理由とした留保の必要を感じさせる論壇なるものの構造である。文芸時評の場合、「創作」と「批評」という外在的カテゴリーの援用が期待できることなどもあって、「閑説されるテキスト」と「閑説するテキスト」(メタテキスト)との階層の差は比較的安定して保たれる。この場合には、批評という営為が主観に基づくことをわざわざ強調する必要もない。しかしながら、論壇時評の場合は、閑説^{レリバン}的なテキストの範囲が融通無碍に拡がることに加え、「批評」もまた「論」として了解されうることから、「閑説されるテキスト」と「閑説する(メタ)テキスト」との階層の差が維持できない(すなわち、「テキスト」と「テキスト」として正対した「論争」ともなりうる)可能性がある。このとき、「閑説するテキスト」がメタテキストの境位にあることを提示する指標の一つとして、「素人批評」という能力的制約の存在を指示し、その「主観性」を強調させることが考えられるのである⁶²。

このような誘因が働いていることを示す傍証としては次の例が挙げられる。総合雑誌にも寄稿し、論壇時評でもとりあげられた田中美知太郎は大塚の定義でいけば「論壇人」に数えられると考えられる。しかしながら、一九六三年の田中の時評では、総合雑誌などに掲載される多様なテキストを扱う論壇時評に対応した《八宗兼学の大知識》の持主の存在は否定され、田中自身の批評姿勢については《一般読者の任意の一人として、たまたま選ばれて雑誌論文の読後感を語っているだけ》といったん述べられている[田中 1963: 7]。その上で、この《一般読者の任意の一人》としての立場が次のように再定義される⁶³。

《批評はそういう専門技術的な面ばかりに求められるのではなく、むしろ一般の消費者、使用者の立場で、実際に使ってみて役に立つかどうか、ほんとうにいい品かどうかを、一般的総合的に判定することも、また別の可能性として成立するのであり、かえてこの方の批評が今日は大切であるといわなければならないのではないか。》[田中 1963: 7]

専門雑誌に拠る専門家同士の批評(それもまた「論」となろう)とは異なるものとして、「テキストの産出」の水準とは「別位相」の「消費」・「使用」の水準にその「素人批評」は位置づけられるのである。こうした「産出」と「閑説」とは別水準にあることを強調しているのは必ずしも田中にかぎらない。たとえば、すでに何度も登場して

⁶² こうした素人性を理由とする限定的姿勢は、同じく非専門家たることを標榜し、同じく総合雑誌などの「論文」も(「創作」とひとしなみに)批評対象としながら、むしろその超ジャンル性を強調するに至る一九三〇年代の「匿名短評」的姿勢と、きわめて類似した論理構造をもちながら、結果的には対照的である。両者の「似て非なる」関係については第四章であらためて検討する。

⁶³ もちろん、田中の「思想」に着目すれば、以下の論壇時評に関する記述も、古典哲学研究に基づく近代社会科学批判という田中の年来の主張にひきつけて理解すべきものである。しかしながらここでは、そうした田中の(メタ)テキストもまた論壇に閑説^{レリバン}的なものとして了解されるうる点に着目して、「素人批評」の文脈に位置づけて分析している。

第三章 閑説の様式による規定

いる中野好夫も、論壇時評における自らの批評方針について、《まったくの非専門素人、言葉をかえれば、典型的平均的購読者の立場》を標榜している [中野 1977a: 5]。また一九三〇年代にも、西洋史学者の今井登志喜の時評は、自己を《厳密な意味の批評ではなく、寧ろ非専門的な一読者のその時の問題に関する読後の感想》と位置づけている [今井 1935: 9]。これらもまた、^{エクスキューズ} 弁明をさしはさむことによって、論壇時評において閑説しているテキストが、閑説されているテキストとは直接対峙しない「メタ・テキスト」であることをあらかじめ強調したものであることができる。

・「評者」と「論者」の混淆可能性を排除

前述の非対称性という点に関していえば、論壇時評という事後閑説の様式のなかに、「評者」と「論者」とが混淆してしまう事態、すなわち「評者」が同時に「論者」としても措定されてしまう事態を防ぐため、特定の「行為＝閑説可能性」があらかじめ排除されている点も注目される。すなわち、「評者」が時評のなかで自らのテキストに閑説したり、既存の論争に対して「批評」としてではなく「応答」として閑説したり、あるいは「論者」が時評に対して「応答」として閑説したりすることは、暗黙裏に回避されるのである。そうした「行為＝閑説可能性」を結果的に排除する何らかの誘因があるのか、「作法」のようなレベルで不文律化しているのか、あるいは評者の選択などより明示的なかたちで編集方針が確立されているのかは判然としないが、いずれにしろそうした排除の実効性は相当に高いといえる。そしてこうした排除もまた、「閑説されるテキスト」と「閑説するテキスト」との階層差を維持し、時評をしてメタ・テキストの境位にとどませしむ効果をもつ。

たとえば事実としては、論壇時評の「評者」のなかには同時期に「論者」としても執筆活動をしている者も少なくない。したがって、時評を担当しているあいだにもその閑説の対象たる総合雑誌等に自己のテキストが掲載される場合が当然ある。また時論に閑説することによって論争の当事者ともなりうる。その意味では、「評者」が「論者」となる蓋然性は決して少なくないのである。にもかかわらず、実際の論壇時評を通読してみると、こと時評欄にかぎっていえば、先に挙げた「評者」が「論者」としても措定されることになるような事例は、実際にはかなり限られている。

たとえば、論壇時評の文中で「評者」が自己の雑誌論文に閑説すると、「評者」と「論者」が同一人であることが前景化することになり、「テキスト」と「メタ・テキスト」との階層差が不分明になる。実際の例を探してみると、戦前には、時評のなかで他者の経済政策を批評した上で自らの論文を紹介して自己の立場を明らかにした経済学者の土方成美の例 [土方 1932: 5] や、知識階級論を批評する際に「評者」自身も論争に関係していることのみ間接的に閑説した大森義太郎 [大森 1935f: 10] の例が見られる程度である。この時評内での評者自身の論文への閑説に関しては戦後もいくつか散見される。「歴史学者」林健太郎がある雑誌の構成を「共産主義特集」と形容して自己の論文もそこに数えた例 [林健太郎 1959: 3]、猪木正道が革新インテリの論考を批判して自己の論文でも同趣旨の批判があることを紹介している例、正村公宏が他者の論考を肯定的に批評して自己の論文も同趣旨であることを示した例などが確認できる [正村 1973: 7]。

また「論壇時評」のなかで、自己に向けられた批判を紹介した上でそれに「応答」すると、時評はまさに「論争」に巻き込まれることになるが、こうした事例はさらに少ない。戦前でも、大宅壮一の時評のなかで、自己の別稿に向けられた清沢洌の反論に再反論している例 [大宅 1933b: 5] と、猪俣津南雄が座談会記事に出た自己への批判に応答した例 [猪俣 1935: 9] が確認できるのみである。一方戦後に確認できるのは一件だが、これは「政治学者」高島通敏が『諸君!』に掲載された「朝日新聞の論壇時評欄」批判に応答したものであり [高島 1982a: 5]、個人間の「論争」とはやや性格を異にする。

さらに新聞紙上で行われた批判的閑説に関して、後日、批判された当の「論者」の反論に当該新聞が紙面を提供した場合、これは「論争」がそのまま紙上に表象されたかたちになる。しかしながら、こと論壇時評欄での閑説に

閑して同一新聞にその反論が掲載された例は、一九三三年に政治学者の杉森孝次郎が担当した『東京朝日新聞』の論壇時評に関して、批判された同じ政治学者の蠟山政道が後日同紙に「杉森氏に答ふ」という反論を掲載したものしか見つからなかった。

このように、「評者」と「論者」の混淆を招き易い閑説が論壇時評欄を舞台になされた例は実質的には少なく、二種の「人称性＝位格」のあいだで「応答」が前景化される機会は、特に戦後においては効果的に排除されてきたように思える⁶⁴。すなわち、「批評されるテキスト」と「批評する（メタ）テキスト」とのあいだの階層性・一方向性は基本的に維持され、本来は「評者」と「論者」とのあいだの人的流動性が高いにもかかわらず、両者の関係を「論争」ならざる「ねじれの位置の言及関係」としてよく措定してきたといえるだろう。

以上見てきたように、論壇時評における「評者」なる「人称性＝位格」を「素人」として措定することで「批評」の主観性を強調して「論」から切り離す場合も、あるいは主に「評者」による特定の閑説の可能性（たとえば自著への言及など）を何らかのかたちで排除することによって「批評」から「論争」への転態を抑止する場合も、そのいずれも「閑説されるテキスト」と「閑説する（メタ）テキスト」との階層差を担保する効果をもっていた。

「創作」と「批評」との区分が比較的明確な文芸時評に比べると、論壇時評なる閑説の様式においては、「テキスト」と「メタ・テキスト」との階層差の担保は難しいと考えられる。しかしにもかかわらず、論壇時評においては、さまざまな様式を以て両者の階層差を担保するよう留意されているようにすら映る。こうした「テキスト」と「メタ・テキスト」との階層差を維持するような様式が生成・更新されてきたのはいかなる機制によるものなのか。

かかる様式が残存してきた理由を明確に示すことはできないが、これまで検討してきた論壇なるものの措定のされ方との関係から考えると、その必要性は次のように理解することもできる。すでに見てきたように、論壇時評という閑説の様式において、論壇なるものは、その「内包」の一義的定義は先送りさせつつ、それに「レリバン」なテキストをその「外延」として数え上げていくことによって措定されてきた。すなわち、実際の閑説の「レリバン」によって「レリバン」性が設定されているテキスト群の背後に、まだ実際には「レリバン」されていないがやはり「レリバン」性が設定できる（はず）の潜在的なより広いテキスト群の存在が感取せられることによって、論壇なるものは措定される。たとえば今月の時評で特定のテキストが閑説されていたとして、「それに尽きない」という感覚がどこかに働くことによって論壇なるものの存在が意識されるという話である。しかしながら、時評での閑説が特定の「内容」を強く志向するものとなり、たとえば他のテキストと同一水準での「論争」を構成するものとして了解されるようになると、感取せられる「レリバン」性の範囲は目の前の「論争」の範囲に強く極限されることになり、潜在的な「レリバン」性への意識が薄くなってしまふ。この場合、そうしたやりとりは「論壇時評」と映らなくなる可能性がある。そうした俯瞰的視点の消滅を避けるべく、種々の様式が成立・更新されてきたとも考えられる。

第2節 通時的閑説

ここまで見てきたように、論壇時評は、月刊誌の存在を半ば前提にしながら、過去一ヶ月間を「共時的な地平」とみなしてその間に発行されたテキストに「レリバン」性を設定しながら閑説していくことを基本とする。それが「月評」あるいは「時評」として了解されるのは、そうした「共時的な地平」のなかに「レリバン」性の設定を限定する操作に拠る

⁶⁴ 実際は、論壇時評なる閑説様式の生成期である一九三〇年代に関しては、評価が異なってくる。論壇時評欄の評者が毎月交替し、「評者」と「論者」とのあいだの流動性が高いことに加えて、後述する匿名短評欄との二重構造も考慮に入れる必要があるからである。たとえば本文中に挙げた大森義太郎の場合、確かに論壇時評欄のなかでは自己の論争への関与を間接的に示しただけであるが、それに先だって当該新聞（『読売新聞』）の匿名短評欄を借りて猛烈な反論を行っていて、「評者」と「論者」との階層差が担保されているとは一概にはいいがたい。こうした戦前における論壇時評欄と匿名短評欄との関係は第四章でより主題的に扱う。

第三章 閑説の様式による規定

ところが大きい。

しかしながら、論壇時評が「通時的な」閑説をまったく行わないわけではない。自己が閑説すべき対象の総体である論壇なるものについては、論壇時評はしばし過去に遡って閑説する。そこでは論壇なるものについてその通時的なプロセスが措定されることになるが、実際の論壇時評を検討してみると、通時的な閑説性^{レリバンシー}の設定にあたってある特定のパターンが間歇的に現れることがみてとれる。具体的には、論壇を「かつてはあったが／今はない」とする語り口＝関連づけ^{コミュニケーション}が繰り返し出現するのである。以下、事例に則しながら、論壇時評という様式がもつこの構造的特性について検討する。

・論壇の変質・論壇の消滅

近年では、それを肯定するか否かは別にして、論壇なるものの実定性への疑義に閑説することなく論壇時評の筆を起すことは困難になってきている。たとえば二〇〇六年から「政治学者」杉田敦を評者に迎えた『朝日新聞』の論壇時評も、その担当初回は《論壇の閉塞化が言われて久しい》[杉田 2006: 10]の一文からはじまる。ただここで注目されるのは、論壇の実定性を問題にするにあたって、その意義が「初めから」あるいは「根本的に」全否定されるのではなく、趨勢や過程といった時間軸を導入する語り口が採用されている点である。

《「論壇は崩壊した」、としばしば言われる。[...] 対照的に昨今では、論壇に発して広く話題を呼ぶような論考が激減したというのは事実であろう。なぜだろうか。》[松原 1999: 5]

《もちろん、いまさら論壇なるものが存在するとは思わない。にもかかわらず、この欄を引き受けることにした理由の一つは、現在の雑誌論文が真の最重要の論理を立論でできているのか、漠とした疑問を抱いていたからである。近年その思いをとみに強くしている。》[米本 1998: 13]

すでに論壇時評における共時的閑説の特性について検討してきたわれわれにとって、「事実態としての総合雑誌」については実定性を否定し「可能態としての論壇」には反実仮想的にそれを認めるという構図は馴染み深い。それに対して、ここでは時間軸が導入された上で、その終端、すなわち「現在」にかぎっては実定性が否定され、その一方で「過去」のいずれかの時点については実定性が認められるという図式になっている。とまれ、論壇としての実定性の存否を分かť分水嶺はどこに設定されるのであろうか。たとえば松原隆一郎は、知識人の論壇への責任感を基準に一九七〇年代までは論壇の実定性を認める [松原 1999: 5]。一方、前節でも採りあげた見田宗介の論壇時評によれば、当の七〇年代の時点ですでに論壇は虚構として消滅が宣せられる。

《一九六〇年代、一九七〇年代、一九八〇年代にそれぞれ一度ずつ、わたしは新聞の「論壇時評」という仕事にかかわることになった。そしてそのたびに論壇時評という仕事が、確実に困難なものになってきているを感じる。そして今日では、ほとんど不可能であるといっても良いだろう。そしてこの「論壇時評」の困難さ、あるいは不可能ということ自体のうちに、現代日本の思想の状況ともいうべきものの特徴が、まずそのようなかたちで姿を見せているように思われる。》[見田 1985a: 7]

《先日の論壇時評の集まりで、「論壇の終焉」ということが語られた。『世界』とか『中央公論』の巻頭で学者や評論家が「今こそ国会へ」といった大号令をかけるという六〇年安保までの時代は終わった。時代をひらく思想はむしろ、分散する中小メディアのなかにみられる。「論壇」が生活の思想の頭上に「壇」として存在するという虚構が消滅したことは、七〇年代のたしかな獲得物のひとつだ。》[見田, 1976b: 5]

もちろん、見田の立場は論壇の消失を嘆き悼むそれではない。彼自身は、以前は確固としたものとして見えていた論壇なるものの方を「虚構」とし、そこに投影されていた《思想の現在なり、現代社会の核心的な自己表現なりその理論的な解明なりの最前線》[見田 1985a: 7] はいまやさまざまな中小メディアの方に体现されていると考える

からである⁶⁵。もつとも、すでに前節で確認したように、こうした「事実態としての総合雑誌」の「外」に「真に論壇的なもの」を認めるという関説の仕方もまた、その生成期から組み込まれてきた論壇時評なる様式の一つの系譜に位置づけることができる。

・「逃げ水」と化す起源

むしろここで注目されるのは、「論壇」の消滅の確認が都合三度にわたって浅く引きのばされている点である。論壇の消滅が三回にもわたって確認できるのは、その都度「かつてはあったが／今はないもの」として何らかの「落差」が措定できるからである。ここで関与性を設定する上で重要な役割をになっているのは、実は「かつてはあった」という論壇のイメージの方であり（これがあればこそ現状を「消失」や「拡散」、あるいは中小雑誌による「代替」と解釈できる）、その消失がかくも繰り返し表明されるという事実は、「かつてはあった」と関説することによって関与性を設定する関連づけの様式の強固さをかえって示唆しているように思われる。

たとえば、松原とは異なり、七〇年代には論壇なる「虚構」は消滅していたとする見田の論壇時評も、《一九六〇年代の前半ころには、「論壇」という実態がりんかくをもって、たしかに存在するもののように、多くの人びとにはみえていた》[見田 1985a: 7] と記す。しかしその六〇年代においても、たとえば「経済学者」都留重人の時評は、その名も「論壇は実在したか」という雑誌論文を採りあげて次のように述べる。

《「内的生命の思想化」というのは、いかにもわかりにくい言葉だが、そういう意味での「論壇」が大正期には成立の芽生えをみせたのに、それが流産し、戦後の現在、確実に存在しているとはいいいがたい、という山田[宗睦：引用者註]の論旨は、全然わからぬでもない。》[都留 1962a: 9]

あるいは「六〇年安保」以前の五〇年代にも、「国文学者」吉田精一は、やはり吉野作造の長論文が掲載されていた頃の『中央公論』と比較して、直近の総合雑誌の断片的な編集方針を問題にしている[吉田 1953a: 4]。このように論壇時評という関連づけの様式を追っていくと、「かつてはあった」実定的な論壇は、あたかも「逃げ水」のように歴史を遡及していくことになる。

実は、こうした「かつてはあったが／いまはない」というかたちでの論壇への関説も戦後に限ったものではなく、論壇時評という様式が成立した戦前からしばしば見られたものであった。たとえば三五年に鈴木義男の時評のなかで批判されたのは、かつて《指導的献策》を多数掲載していた総合雑誌が、随筆や雑文・回想談などで紙幅を埋め《高級娯楽雑誌化》している傾向であった[鈴木 1935: 9]。またその前年には、室伏高信の時評のなかで、総合雑誌への寄稿者層の変化――職業的評論家層の退出と政治家・軍人・実業家などの「素人」への寄稿依頼――が次のように批判されている。

《こゝに型破りがあり、ヴァライエティがあり、社会の縮図があり、喜劇があり、悲劇があり、綱渡り、手品がある。評論壇も今や一種のエノケンのものとなつたのだ。だが、又、それだけに、評論の限りない墮落がこゝにある。これを評論の俗悪化と名づけよう。》

《評論壇は今や教養も、熟練も、貴賓も、思想も、反省も、批判も、呼びかける力もない。》[室伏 1934: 9]

あるいは前述の通り、高橋亀吉の時評のなかでも、当時の総合雑誌の編集プロセスの変化――寄稿者から編集者へのテーマ設定の主導権の移動、執筆期間の短縮化など――を指摘した上で、それが論壇にもたらす弊害を挙げられ

⁶⁵ 見田をはじめとする時評者たちのこうした見解を受けて、『読売新聞』は、『学識者が「壇」の上から、読者に「論」を説く時代は終わり、論壇は拡散し解体したかに見える』と宣言し、「論壇時評」欄を「今月の論点」欄に改称するのである[読売新聞 1976: 5]。とはいえ、その後「今月の論点」で実際に採りあげられたテキストはいわゆる総合雑誌に取材されたものが多く、同時に、それらが論壇としての実定性を欠いていることもたびたび言及される。論壇の不在という語り口の根強さを物語っているともしえる。

ている。

《第一は、問題のあとばかりを懸命に追ふことになつたことだ。売行本位に考へるジャーナリズムに敏感な少数の編集者が題を選ぶのであるから、自然、専門的知識で選題するのと異つて来る。》

《第二は、論文の内容が一般に（すべてとは無論いはぬが）低下して来たことだ。少なくとも筆者の能力に比して低下して来た。けだし、突如として題を与へられ、それを短期間に書くのであるから、自分自らこれを書かう […] と考へて執筆する場合とでは、内容は少なからず低下してくるのが普通である。況んや、第一候補者がこれを断ると、雑誌社は第二、第三の候補にこれを持ち回つて、無理矢理に、その問題を紙面にださうとする。》[高橋 1932b: 5]

論壇時評なる閑説の様式のなかで、論壇なるものに対しては、さまざまな意義や特性が読みこまれ、それを前提にして関連づけが行われるが、時間軸を導入した上での通時的閑説においては、その意義なり特性なりは「いまはもうないもの」として過去へと投影される。こうした過去への投影は、ここまで確認してきたように、論壇時評生成のころから繰り返し励起されてきたのである。

第3節. 社会的カテゴリーとしての現実味と疑念

ここまで、論壇時評という事後的な閑説の様式が帯びている特性を、月評という様式が指示する一ヵ月間の「共時的地平」の枠内に見られるものと、その「地平」を越えるような通時的閑説に見られるものとに分類して考察してきた。最後に、それらの諸特性に通底する側面についてあらためて検討して、本章を終えよう。

・不可能事の了解と論壇の全体性の触知

論壇時評の共時的・通時的閑説の様式を通して重要な役割を果たしているのは、実は、「論壇時評」による関与性^{レリバンシー}の設定が（少なくとも事実レベルでは）端から「不可能なプロジェクト」であるという了解である。かかる了解が時評の中でさまざまなかたちで反復的に言明され、織り込まれていくことによって、逆に暫定的な関与性^{アドホック レリバンシー}の設定が励起されるという関係にある。たとえば時評の主たる対象と一般的に想定されている「総合雑誌」に対する閑説を想起すればわかりやすい。それは一九三〇年代に論壇時評なる様式が生成されたときから、「読めない」、「読まない」メディアとして閑説されてきたのであった。『中央公論』や『改造』、『文芸春秋』といった雑誌の登場から一定の年月が経ち、『経済往来』その他の新興雑誌群もかなりの厚みを形成していた時期であった。また後述する（元）学者層のジャーナリズムへの大量進出などもあり、産出されるテキスト群も膨大・多量なものとなっていた。これまでに何回か言挙げされてきた表現ではあるが、この一九三〇年代も「個人の情報処理能力の飽和」を語る資格を持った時代ではあったのである。この「不可能である」という了解は、たとえば論壇に^{レリバン}とされる「時論」なるものの性質を特定しようという際にも、あるいは論壇に^{レリバン}と関与的なテキストを産出した「論者」を討議主体として措定しようとする際にも、同じように看取されている。

しかしながら、こうした「情報処理能力の飽和」「不可能なプロジェクト」という了解は、事後的閑説を通じた論壇なるものの措定を妨げるものではなく、むしろそれを賦活する条件であったことに注意する必要がある。様式に沿ったかたちで閑説という実践が試みられる過程で、事実レベルでの種々の困難や不可能性が了解され、主題化されることによって、可能態としての論壇なるものが反実仮想的に措定されるという構造になっているのである。論壇時評なる様式においては、論壇なるものは、その「内包」の一義的定義は先送りさせつつ、それに関与的なもの（メディア・テキスト・^ベ人称性^ソ位格）をその「外延」として数え上げていくことによって措定されてきた。すなわち、実際の関連づけによって関与性が設定されているテキスト群の背後に、まだ実際には^{レリバン}と関連づけされていないがやはり関与性が設定できる（はず）の潜在的なより広い存在が感取せられることによって、論壇なるものは

措定される。先に挙げたさまざまな事実としての不可能性は、この実際の^{コミュニケーション}関連づけと潜在的なより広い^{コミュニケーション}関連づけとの格差を意識させるものとして機能しているのである。

これを裏返すと次のようないいかたもできる。たとえばテキストに個人が逐一当たって^{レリバンシー}関与性を設定することが具体的には不可能事であることがあらかじめ前提とされいながら、にもかかわらず何となく「論壇」全体に^{レリバン}関与的とされる^{コミュニケーション}関連づけが緩く許されるしくみが、論壇時評という関説の様式である、と。この「何となく」という緩さを組み込むための仕組みとして、論壇時評という様式のなかには、個人の「選択」や「主観性」というかたちであらかじめ一定の自由度も設定されている。いかなるメディアやテキストを採りあげるか、あるいは「論者」や「評者」としていかなる振る舞いをなすかといった場面で、かなりの程度個人の選択や嗜好が許容されるのである⁶⁶（主張しても^{レリバン}関与的なものと了解される）。

・通時的関説と共時的関説との通底

最後に、論壇時評という関説の様式における、通時的関説と共時的関説との関係についても検討しておこう。その共時的関説のパターンとして、論壇時評においては繰り返し「論壇の変質・消滅」「いまはもうないものとしての論壇」が関説されてきた。通時的関説のパターンと併せて検討してみると、今や両者を整合的に理解することができよう。

繰り返しになるが、共時的関説のパターンにおいて、論壇なるものは、「内包」の定義は先送りにしながら、種々の要素についてその^{レリバンシー}関与性を設定し「外延」の算え上げを続けることによって、潜在的なもの・反実仮想的なものとして析出するのだった。このとき種々の要素について事実^{レリバンシー}レベルでなかなか^{レリバンシー}関与性を設定できるものが見つからなかったとしても、それが「外延」の算え上げの「途中」として意識されていれば、論壇なるものの措定を妨げるものではない（「今月の論壇は低調。見るべき論文がない」）。

「変質・消滅」という語り口は、懐古的視線を持ち込むことによって、この共時的関説のパターンをいわば時間軸上に投影したものといえる。すなわち過去の「かつてあった論壇」が、共時的関説のパターンにおける潜在的・反実仮想的な論壇なるものに該たるのである。「変質・消滅」によって「本来の論壇」が過去へと投影されれば、今現在論壇なるものの措定・数え上げに齟齬を来したとしても、論壇なるものとしての了解可能性は将来に対して開かれたままになる。ある意味で「変質・消滅」を言挙げすることこそがその「延命」に棹さす行為であるともいえるのである。

⁶⁶ たとえば、「非典型的」な時評で、対象となるテキストの範囲をどこまで^{イレリバン}拡げればもはや論壇と非関与的と感じられるか、その「限界」なるものを想像されたい。

第四章 「起源」と「変貌」

第四章では、今日、論壇時評欄なる様式から措定される論壇なるものがいかなる「文脈」から生成されたか、時評欄の成立前後にしばって検討する。

第一節では、時評様式が定立をみる以前の論壇の含意の変遷を追跡する。

第二節では、一九三〇年代の論壇時評欄定立の機序を、ほぼ同時期に人気を博した短評欄を補助線として検討する。この短評欄は、従来から間テキスト性の含意を含みもっていた「文芸」「文壇」と論壇とを同一平面へと位置づける媒介的な役割をはたした様式と考えられる。

具体的には、まずこの時期の短評欄の歴史を概観し、論壇時評欄とのその並立・補完的な性格を明らかにする。

その上で、論壇時評欄と短評欄とに類似する様式的特性をとりあげて検討し、その類似性から今日に至る論壇時評欄の生成機序を明らかにするとともに、両者の異質性から三〇年代固有の文脈を明らかにする。

第1節 語源への逆行

第三章までで確認したように、論壇時評という事後的閑説の様式から見ると、論壇なるものは、近似的には「総合雑誌」を中心とする雑誌に掲載された「論」が指し示す論調のごときものとして捉えられている。もちろん、そうした了解を出発点にして、事実態としての「総合雑誌」に否定的な閑説をしながら、可能態としての「論壇」を語るという運動が繰り返し励起されることになるが、そこでも閑説性^{レリパシブ}を設定できる特定のテキストの連なりとして論壇がイメージされていることに変わりはない。

このように書かれたテキスト（の連なり）に定位して論壇を捉えるという了解は、少なくとも『中央公論』や『東京朝日新聞』で「論壇時評」が開始された一九三一年には一般的になっていたと考えられる。しかしながら語源的にみれば、上記の意義での「論壇」はそれほど古い時代までは遡れるものではない。この事実、論壇時評に代表されるように、論壇を事後的閑説に開かれたものとしてとらえる了解が成立するにあたって、文壇という隣接領域との関係――テキストに閑説する（メタ）テキスト：「批評」との接触――が大きな役割を果たしたことを示唆しているように思われる。そこで以下では、語源論的な考察に抛りながら論壇時評以前の「論壇」についての了解を検討する。

・「壇上」への批判

論壇なるものが時評のなかなどで否定的に閑説される際、時折登場するモチーフに「高み」を象徴するものとしての「壇」がある。

前述の通り、見田宗介は七〇年代に伝統的な総合雑誌を中心とする既成の論壇の失効を主張したが、そのときに批判の俎上にのぼったのが《生活の思想の頭上に》存在する「壇」のイメージであった。「壇」の語に論壇の高踏的・権威主義的性格の象徴を見ろというこうした感覚は、見田個人にかぎられたものではなかった。当時、見田とともに評者を担当した河合秀和も、ロッキード事件を契機とするジャーナリストと読者の意識の交流に論壇の消滅を見ているが、その際より直接的に《有識者が「壇」の高みに立って一般読者に向かって「論」を垂れる》ことが《大正以来、文壇という言葉とともに誕生した論壇の本来の意味》だと述べている [河合 1976: 7]。

近年では、一九九三年に毎日新聞が暫時の中断の後に論壇時評欄を復活させた際に、やはりこの「壇」のイメージに触れられている。毎日新聞は《かつて「論壇」といわれた言論の舞台を見る》という立場から、「雑誌を読む」を標題としているが、評者である森まゆみや田中明彦の発言⁶⁷を見ると、やはり「論壇」には上方のイメージが投影されていることがうかがわれる。

《森まゆみさん 論壇の「壇」を降りて、面白い、生き生きしたものをできるだけ拾えたらなと思います。論だけでなく、現象として面白いものも取りあげたいですね。

田中明彦さん 論壇というと、権威主義的響きのゆえに、逆に論じることが圧殺される面があるという感じがします。できるだけ論じることを重視したい。》 [橋爪・森・田中 1993a: 6]

一見すると、これはやや奇妙にも映る。通常「論壇」や「文壇」に用いられる「壇」は《社会における専門家の範囲》（広辞苑）などの意で解されており、だからこそ新聞などでも「画壇」や「歌壇」、「俳壇」、「楽壇」など幅広く使われていると解されるからである。河合秀和は論壇と文壇とを併記しながら「高みとしての壇」について論ずるが、「文壇」の場合は、同じくその高踏性や閉鎖性、権威主義体質などが批判される場合でも、「壇」が「高み」と解釈されることは稀なように思われる。しかしながら、語源論的にそれぞれの語彙の成り立ちを見ると、「論壇」

⁶⁷ この時期の「雑誌を読む」は橋爪大三郎を加えた三人の評者の座談会形式で行われていた。

にかぎって「壇」の「高み」のイメージを強調する解釈にも成立する余地がある。『広辞苑』の「論壇」の項には先の意味に加えて《意見を論述する場所》の意も示されている。さらに『日本国語大辞典』を引けば、「論壇」の第一の意味は《意見を論じ述べる壇。議論を戦わせる場所》となっている。確かに、「論壇」には高みとしての物理的な「壇」の意も存在するのである。

実は同事典で確認されている初出例で比較すれば、上記の物理的な「壇」の意味（初出は一八六六年刊の末弘鉄腸『雪中梅』）の方が、《議論を戦わす人々の社会。評論家の社会。言論界》の意味（初出は一九〇五年刊の角田浩々歌客「此興詩を論ず」）よりもかなり早くから用いられている。もちろん同事典の記述だけで断定することは困難だが、「論壇」については前者の意味の方が原義で、後者は後になって付加された可能性が示唆されるのである。これは、同事典でも《作家・批評家などの社会。文筆家の社会。文学界》の意味しか掲載されておらず、確認されている初出も江戸期にまで遡る⁶⁸（一八四四年の野村篁園『篁園全集』）「文壇」とはかなり対照的な出自といえる。結局「界・社会」の意で「壇」が用いられるのは、「論壇」よりも「文壇」の方がかなり早い。したがって、将来「論壇」に「解・社会」の意味が付与されていくときにも、先在する「文壇」との分立関係が常に意識されていくことになる。

『日本国語大辞典』を適宜補足しながら、初出の状況をいま少し検討してみよう。第一の意味で確認された初出としてあげられている『雪中梅』は、成島柳北の「朝野新聞」でジャーナリストとして活動し、後に政治家となった末弘鉄腸（重恭）が国会開設前に著した政治小説である。事典での引用個所は以下の通りである。

《是れ我が此の論壇に上りて諸君の注意を喚起せんと欲する所以なり。》[末弘 1886: 50, 強調は引用者]

これは自由民権運動の演説会で青年壮士の演説中に出てくる表現である。したがって、ここにいう「論壇」とはまさに物理的な「演壇」を指していることになる。こうした「論壇」なる語と壮士の実践・直接的政治行動との結びつきは、同辞典以外でも確認できる。『雪中梅』の刊行から間もない一八九〇年には上毛青年連合会より『上毛青年の初陣—廃娼論壇第一戦闘』（強調は引用者）なる書籍が刊行されている[下山 1890: 11]。徳富蘇峰も序を寄せているこの書は、現在の群馬県の青年団体が宣言・演説運動を通じて県会に廃娼を働きかけ知事に建議させるまでの記録であり、演説筆記などが取められている。実は本文中では論壇なる語は用いられておらず、その意味するところは明確ではないが、（物理的演壇を指すかどうかは別にしても）やはり壮士の実践と結びついた語彙になっていたことがうかがわれる。

その意味では、後代の論壇時評のなかで評者が「論壇」なる語を「壇上」という意味での「高み」と捉えて批判するのは、こうした壮士の実践が残響していると捉えることができるかもしれない。しかしながら次に問題となるのは、論壇時評が閑説し措定するような「あの論壇」の意味—しばしば「論調」や「論点」などとも形容されるテキスト間の諸関係—にはそれではいつどのようにして転態するのか、という点である。

・「壇」の錯綜

『日本国語大辞典』が第二の意味、すなわち《議論を戦わす人々の社会。評論家の社会。言論界》の意で用いられている初出として挙げているのは、一九〇五年の角田浩々歌客（勤一郎）「此興詩を論ず」である。角田は新聞記者・編集者で評論活動も行った人物だが、指示された引用個所には《請ふ先づ一時論壇の問題となれる象徴詩について定論を得ん》[強調は引用者]とある。「人の集まり」かより抽象的な「テキストの連関」かはこれだけでは判然としないが、逆にいえば、この時期においては文芸評論のなかで「論壇」の語を用いることが可能であったこ

⁶⁸ 同事典によれば、文壇なる語は中国でもこの意味の用法が元々あったとされ、出典として清朝初期の李漁の随筆『閑情偶寄』の記述が挙げられている。

第四章 「起源」と「変貌」

とがわかる。

また同時期には、新聞社主筆から評論家・歴史家として活躍した山路愛山（彌吉）が一九〇六年に『講壇と論壇』（強調は引用者）なる評論集を著している。この書籍は山路が信濃毎日新聞の主筆時代に書いた論説をまとめたものであるが〔坂本 1988: 140-54〕、本文中では一切論壇の語を用いておらず、その意味を確定することはできない。しかしながらそこに収められた「学校壁外の青年」といった論文の内容から推測すると、高等教育機関に通う都市部青年と自学をする地方青年とが、それぞれ「講壇」と「論壇」に対応づけられていると考えられる。

ただし雑誌を当たると、いまだ少し早く一九〇〇年に、総合雑誌『太陽』に次のような記述が見つかる。

《論壇の刺客にでもなりしつものにや、急所を衝く、急所を衝くと、さても物騒な掛け声、お気の毒にも、進化論のきたひあげたなまくら刀、殊に太刀筋おぼつかなく、急所をさへはづれたれば、仏教徒も耶蘇教徒も、倫理学者も、何らの痛痒をも感ぜざるべし。》〔大町 1900: 23, 強調は引用者〕

（無断）アンソロジー雑誌である『日本大家論集』の発行が一八八七年、『太陽』発行が一八九五年、『中央公論』への改称が一八九九年であるから、確かに二〇世紀までには将来論壇時評が関説することになる雑誌論文も、それに対する関心もすでに存在していたといえよう。ただし上記引用は、いまだ間テキスト性を感じさせる用例ではない。ちょうどこの号の『太陽』には誌面改革の広告が掲載されていて、これが日本で「時評」の語を初めて用いた例だとされるが〔谷沢 2002〕、この広告案からも後年の広汎な論壇概念とは対極の強い分類志向が感じられる。

参考. 太陽, 1900, 「明治三十四年雑誌大改良広告」

銅版口絵	名家譚叢	農業世界
論説	小説雑俎	社会事情
人物月旦	文苑	時論綱要
文芸時評	歴史地理	寄書
政治時評	家庭叢談	海外事情
経済時評	科学世界	海内彙報
宗教時評	商業世界	英文
教育時評	工業世界	

このように二〇世紀に入るところには、「論壇」の語には壮士的实践と切り離された用法が現れていることがわかる。しかしそれはなお、かなり多義的かつ散逸的な概念にとどまっていた。論壇時評という様式から措定されるような論壇の用法が成立したことを示す指標としては、文芸との相補的關係の成立や、間テキスト性を顧慮する必要があるが、それにはなお後代を探索する必要がある。

第2節 短評欄という坩堝

・「^{ミッシング・リンク}喪われた環」としての雑誌短評欄

第三章で確認したように、論壇時評成立後、そのテキストへの事後関説から措定された論壇なるものについては、次のような構造的な特性があった。たとえば「総合雑誌の時論的テキスト」を一応の範例としながらもその他種々のテキストにも関与性を設定しうる超ジャンル性。また、関説の対象となる個々のテキストの「内容」のみならずその「文脈」、分けても「編集」という局面を主題化するメタ・コミュニケーションへの志向。あるいは、「筆者」や「評者」の主観性・主体性を強調しながら同時に「請負」というかたちでそれを脱臼させる特異な「人称=位格」の前景化。こうした特性は、時評欄の成立した一九三〇年代から今日に至るまで、メディアやテキスト、人物などに論壇との関与性を設定する際に、それを規定してきたものであった。

しかしながら語源的に遡ると、論壇なる語には、元来は特定のテキストや「人称性＝位格」に^{レリバンシー}関与性を設定し相互に関連づけるような意義は希薄で、そもそもは明治期の壮士の・口演的实践と強く結びついて了解されていたことが明らかになった。またそれ以降も、「言論界・批評家の社会」という意味で不安定に用いられたことはあっても、「テキストが相互に織りなす関連性＝論調」なる意義が成立していたことはいまだ確認できない。このことは、現在まで続いている^{コミュニケーション}関連づけの様式としての論壇が生成されるにあたって、了解構造にある種の転換が生じたことを示唆している。

本節では、論壇に関するこの認識枠組みの転換の機制を分析するために、新聞に掲載される「雑誌短評欄」という補助線を引く。私見では、「論壇」なる語が「言論機関や人の集合、社会」の意義ばかりでなく、「テキストそれ自体によって構成される関係性＝論調」の意義を獲得するにあたっては、具体的な関説という実践が十分に稠密に行われる必要があった。その際、論壇時評と「似て非なる」^{コミュニケーション}関連づけの様式であるこの雑誌短評欄が、「文壇」とのあいだのジャンル横断的な関説を活発にすることによって「論壇なるもの」についての了解の転換を促した、いわば「^{ミッシング・リンク}喪われた環」にあたると思われる。

(A) もう一つの事後的関説様式

・「豆戦艦」という画期

雑誌短評欄・匿名批評欄が新聞紙上で流行するきっかけとなったのは、一九三一年一二月から『東京朝日新聞』で連載が開始された「豆戦艦」欄であった。同紙で「論壇時評」が開始されたのは同年一月のことであるから、この二つの様式はほぼ同時期に生成され、以後三六年五月に「豆戦艦」欄が終了するまで約四年間併載されていたことになる。この「豆戦艦」欄は、関説の対象とするテキストや種々の構造的特性に関して、「論壇時評」欄と特殊な対応関係にあり、「論壇なるもの」についての了解の転換を分析する上で重要な位置にあるといえる。

「豆戦艦」については、その主たる匿名寄稿者である杉山平助に焦点をあてるかたちで、すでに山口功二や森洋介のすぐれた先行研究がある〔山口 1974, 山口 1975, 森 2002, 森 2003〕。こうした先行研究に依拠しながら、当該コラムを導入として、まず新聞掲載の雑誌短評欄の沿革を概観していこう。

《○君、氷川烈とか、横手丑之助とか、杉山平助とかいふ男があるが、いつたいどれが本名なんだ。

△もちろん、杉山平助だよ。昔「一日本人」といふ小説を出したこともあるー

○最近大いに売り出してるやうだが、この男の出方はちよつと変つてるね。

△ラヂオのアナウンサー、例へば野球放送の松内とか河西とかが有名になつたのと同じだよ。名前も顔もわからないが、やつてるうちに追々ファンができて、あれはいつたい誰だといふことになり…》〔読売新聞 1933: 4〕

「豆戦艦」は匿名評者による雑誌短評欄で、『東京朝日新聞』に一九三一年一二月二日から三六年五月二日まで連載された⁶⁹。論壇時評や文芸時評と同様に、朝刊のいわゆる学芸欄に掲載されている。副題には「～月の雑誌から」とあり、その内容は、一回あたり一～三誌を採りあげて、雑誌毎にその内容を六～七〇〇字程度で批評するというものである⁷⁰。対象となる雑誌はきわめて幅広く、総合雑誌、文芸雑誌から経済誌、婦人雑誌、大衆誌、専門誌、左翼雑誌、趣味の雑誌、受験雑誌などにまで及んでおり、最盛期には一月に九～十回掲載された。

⁶⁹ 青野季吉が『東京朝日新聞』に提案してはじまった「×月の雑誌」を前身に、それを改組して始まったものとされる〔青野 1958: 131-2, 森 2005: 234〕。また、三三年四・五月号を対象にした雑誌短評のみは高野二郎名義の「アンダーライン」という別題になっている。この一次的改題は当時杉山平助の匿名が露見したことが影響していると推測される。森〔2005: 227-9〕を参照。

⁷⁰ ただし、三四年の三月～九月号を対象にした「豆戦艦」は、テーマ別に雑誌を横断して批評するスタイルを採った。

第四章 「起源」と「変貌」

参考. 「豆戦艦」が採りあげた雑誌（一九三三年六～九月号対象）⁷¹

	六月の雑誌から	七月の雑誌から	八月の雑誌から	九月の雑誌から
1	5.26 婦人公論, 主婦の友	6.27 文芸春秋	7.27 若草, 令女界	8.22 若草, 令女界
2	5.28 中央公論	6.29 中央公論	7.28 改造	8.26 婦人公論, 婦女界
3	5.29 改造	6.30 婦女界, 婦人公論	7.29 文芸春秋	8.27 改造
4	5.31 文芸春秋	7.1 改造	8.1 新潮, 三田文学	8.28 中央公論
5	6.2 新潮, 人物評論	7.2 婦人倶楽部, 主婦の友	8.2 中央公論	8.29 主婦の友, 婦人倶楽部
6	6.3 現代	7.3 新潮, 作品	8.4 婦人の友, 婦人画報	9.3 新潮, 経済往来
7	6.4 経済往来, 経済知識	7.9 外交時報, 国際評論	8.6 経済往来, 思想	9.4 文芸春秋
8	6.12 話, モダン日本, 週刊朝日	7.11 三十三人集	8.15 話(中央公論)	9.8 仏蘭西文学, 海豹, 芸術科
9	6.13 キング, 日の出	7.15 赤い鳥, 子供の科学	8.19 郷土教育, 精神分析, 大衆文学	9.14 富士, 講壇倶楽部, オール読物号
10	6.19 あらくれ, 文化集団, レフト			9.15 キング, 日の出

こうした短評欄と並んで文芸時評や論壇時評もそれぞれ月四～五回にわたって掲載されていたことを考え合わせると、三〇年代前半の『東京朝日新聞』の学芸欄には、相当の頻度で、雑誌に掲載されたテキストに関連する何らかの記事が見つかったことになる。

さて、「豆戦艦」では論評されるテキストの内容も限定されておらず、総合雑誌の場合であれば小説などの創作、随筆やルポなどの読み物、論文がそれぞれ数本とりあげられて短評が付された。したがって、関説されるテキストが「豆戦艦」と「文芸時評」、「論壇時評」とで重なるという事態も当然起こる。ただし前者は匿名批評であり、スペースも少ないことから、たとえば次のような惹句を多用した断定調の文体が採用されていた。

《マルクス主義と自由意思の問題（大森義太郎）[…] そこの通俗解説書にでもザラにころがつてある程度の議論だが、こんなことを論じてるのが今日の学界レベルなのかと思ふと、我々門外漢も大いに意を強うするに足る感のあるのは滑けいだ。》
[氷川 1933: 5]

そして、こうした独特の文体が（匿名批評にもかかわらず）評者の杉山平助をして盛名を博せしむる一因となる。

「豆戦艦」の評者の名義は氷川烈、横手丑之助、大伴女鳥、玉藻刈彦などと遷移し、最終年はめまぐるしく変わるが、このうち前二者が杉山平助の匿名で、大伴姓については杉山と評論家青野季吉との共同名義だとされる [青野 1958: 131]。そのセンセーショナルな筆致は人気と批判をもろともに呼び込み、ほどなく杉山の匿名は暴露される。しかし、「豆戦艦」において文学的な小説・評論から政治・経済的な論文、風俗をあつかった随筆までをひとしなみに批評しえた「評論家」杉山平助の活動範囲は、その暴露によってかえって拡大し、やがて総合雑誌・新聞・文芸雑誌・婦人雑誌などきわめて広汎なメディアに登場していくことになる [山口 1975: 79]。と同時に、創作についても論文についても同一地平で関説しうる批評——「対象領域の面白さを捉えつつ渡り歩くという超ジャンル批評」 [山口 1977: 77] なる様式 [山口 1975: 74] もまた、散種されていくのである。

・「論壇時評」を代補

この超ジャンル批評の苗床となったのが、「豆戦艦」の成功以来、各新聞に常設されるようになった常設の匿名批評欄であった。この新聞の匿名批評欄において雑誌掲載のテキストへと関説するという様式は、折から新聞紙上の論壇時評が消滅していくなかで、それをいわば代補するかたちとなる。

たとえば第二章で検討したように、『読売新聞』は三三年二月から論壇時評を掲載するが、同年一一月からは匿名批評欄「告知板」にて「豆戦艦」と同形式で総合雑誌も採りあげられるようになっていた。論壇時評欄自体は一九三五年一〇月を最後に中絶するが、その後も「告知板」の後進である「壁評論」のなかで、「×月の諸雑誌」と題した雑誌ごとの批評欄が月数回掲載され、総合雑誌に掲載される小説・随筆・論文などのテキストがそれぞれ三

⁷¹ 太字は当時論壇の主要雑誌に数えられていた『中央公論』、『改造』、『文芸春秋』、『経済往来』の四誌。なお八月一五日の『中央公論』への論評は同月二日分の補足記事。

～四行ずつの寸言によってひとまとめに閑説されるかたちが続いた⁷²。また論壇時評欄がわずか二～三回の試行の後、三四年二月に消滅した『東京日日新聞』の場合も、入れ替わるように同年一月二七日に新設された匿名批評欄「蝸牛の視角」が、文芸雑誌や総合雑誌から特定のテキストを採りあげ、言及するスペースを提供することになった。

一方、その筆致に対する批判の高まりもあってか、『東京朝日新聞』の雑誌短評欄「豆戦艦」は三六年五月二二日に終了し、杉山を含む社外の識者が実名で評論する「槍騎兵」欄に置き換えられる⁷³。「論壇時評」が不定期掲載になったこともあり、同欄では同年九月から雑誌別の実名短評が行われるようになるが、これも翌三七年に「論壇時評」ともども一旦中絶する。しかし、二年後の三九年一月に「槍騎兵」のなかに竹賢人名義の匿名雑誌短評欄が復活し、総合雑誌掲載の各種テキストがふたたび閑説されることとなった。

さらに敗戦後、新興総合雑誌が簇生する一方で、用紙配給の影響で新聞紙面が非常に限られた時期に、新聞紙上で雑誌掲載のテキストに閑説する様式として多用されたのが、やはり匿名批評であった。『朝日新聞』を例にとれば、雑誌への閑説は、一九四六年、四七年に中野好夫による実名での論壇時評が散発的に掲載された他は、「雑誌評」という匿名批評の形態をとっている。四七年二月までは複数の雑誌から選んだテキストにまとめて閑説する様式を、同一〇月からは雑誌別に評する様式をそれぞれとっているが、いずれの場合も評者は匿名で、総合雑誌のテキストが論文・随筆・小説等のジャンルで分けられることなく閑説されている。またその文体も、内容紹介のみを旨とするものではなく、断定調を多用した読みものの価値を志向したものと評価される。その意味では、「豆戦艦」に代表される戦前の匿名雑誌短評欄の系譜に配するのが適当といえよう。同様の性格をもつものとしては、一九五〇年五月まで『毎日新聞』に掲載された「総合雑誌評」欄がある。

しかし、このように戦後復興した匿名評者による雑誌短評という様式は、五〇年代に入って実名の評者が担当する論壇時評が各主要紙に定期的に掲載されるようになると、徐々に紙面への登場が減り、論壇時評欄との性格の相違が強調されていくことになる。たとえば『朝日新聞』は、論壇時評欄の復活後も、若干の中断はあるものの、七〇年代前半まで「偏光鏡」や「素描」、「季節風」、「標的」といった匿名短評欄を設けていた。特に「季節風」や見田宗介も匿名評者として寄稿していた「標的」は、毎回雑誌を一冊採りあげて批評する形態をとっており、表面的には戦前の匿名雑誌短評欄との連続性を見てとることも可能である。しかし実際には、採りあげられている雑誌は専門誌や週刊大衆紙、業界誌などに限られ、文芸時評や論壇時評とは扱うテキストが明確に分離されており、またゴシップ的色彩はほぼ皆無で特定の「人称性＝位格」が前景化することもなかった。また『毎日新聞』は論壇時評欄をふたたび廃した七〇年代後半に、新たに雑誌短評欄「まがじん」を設けるが、やはり戦前や敗戦直後の短評欄とくらべて、その性格を大きく変えている。『中央公論』や『思想の科学』、『諸君』など（もはや「総合雑誌」と総評しにくい）論壇誌から、文学雑誌、あるいは趣味の雑誌まで多様なジャンルからテキストが採られる点こそ共通するが、それが《非常に要領のいい雑誌の紹介》[安江他 1977: 21]として当該テキストの内容の要約・紹介のみを志向している点で、批評的価値を志向してきた「豆戦艦」以来の系譜とは決定的に異なっているのである。

その意味では、雑誌に掲載される多様なジャンルのテキストに閑説して、それぞれに短い語句で批評的評価を付与していくタイプの雑誌短評は、時期的には、一九三〇年代に論壇時評なる様式が生成・普及するも一旦中絶し、戦後になって確立するまでのいわば揺籃期に対応しているように見える。

⁷² もっとも『読売新聞』の場合、まだ「論壇時評」欄が存在した三三年の時点で、それと並行して匿名批評欄「告知板」にて雑誌別の批評を行っていた。西銀三名義で行われるこの雑誌評は、様式的にはやはり「豆戦艦」を模したものであった

⁷³ 「豆戦艦」で杉山平助の批評の俎上にのぼることもあった林房雄は、後身たる「槍騎兵」欄で次のように述べている。《匿名批評の積極的役割は「東朝」の豆戦艦に終り「読売」の壁評論に僅かに名残をとどめてある。他は恥知らずの小遣ひ稼ぎにすぎない。「東朝」が他に先んじて署名短評を開始したことは卓見であり、従つて文壇に新しい空気を導き入れた。他紙もこれに倣ふべきである。》[林房雄 1937: 7]

第四章 「起源」と「変貌」

・論壇時評と匿名短評との相互（不）通交

しかし、そもそもこの二つの関説の様式はどのように区別されていたのか。「豆戦艦」は、連載開始から半年ほど経過した三二年七月二五日に、「筆者申す」と題して記事の位置づけや狙いを明らかにする一文を掲載する⁷⁴。

《この欄は月々の雑誌の簡単な内容紹介をその主要な役割とします。しかしかにかに要約の才に富む者がゐたにせよ、百枚の論文がいつも三四行に紹介しきれるといふわけにはいきません。そこで時に片言隻句の批評がとび出し感想がはさまれることになるのです。そこらのあん配に筆者の苦慮があるところとお察し願ひたい。》

この欄は新聞記事としての性質上、また読物として興味をも要求されてをります。従つてこの欄に厳密な学術的批評の態度を求められるのは途方もないお門ちがひです。

この欄はその建前からこゝに問題とする一切の雑誌の存在を肯定してかゝります。その商業的立場をも顧慮せねばなりません。「キング」や「朝日」と共に、左翼雑誌の存在をも肯定し、できることならその一冊もよけいに売れる事を助けたいのです。何も辛辣さや悪口が売物ではありません。しかし読書に対する忠実はあくまで守らねばなりません。従つて広告文そのままのお役目はつとめかねます。

しかしながら、いったいそんな思想的立場といふものがあるものでせうか。そこが蛙が蛇を飲む手品といふものでせう。》

[横手 1932: 9]

匿名雑誌短評欄は、単なる雑誌内容の紹介にとどまらず、読み物として独自の価値を志向する。だからこそ、辛辣さや悪口とも見まごう短くも印象深い批評や感想が不可欠となる。それは学問的な批評の手續きとは異質な操作であり、だからこそ、この短評記事は《サロンの批評》として《れつきとした文芸時評や論壇月評》と区別される必要があるのである [横手 1932: 9]。

ここでは、匿名雑誌短評欄と論壇時評（や文芸時評）との関係が、読みものの価値と学術的価値とをそれぞれに追求する、ある種の「水平分業」の相でイメージされている。実際「豆戦艦」についていえば、総合雑誌などのテキストで関説の対象となるものは、併置されている論壇時評とかなりの程度重なるにもかかわらず、批評相互に関説が及んだ例はほとんど確認できなかった。二種の事後的関説の様式によって設定された関与性^{レリバンシー}の地平は基本的には交差せず、したがってそれぞれの平面における「関説するテキスト」と「関説されるテキスト」との階層性もひとまずは維持される。二つの時評欄のあいだに関説が生じた数少ない例も、上記の「分業」イメージの相での了解が《れつきとした》論壇時評の側にも成立していることを示唆する、以下のようなものであった。

《以上雑観、自ら攻撃の不足を承知しつゝ筆を収む。いはゞ「特務艦」的出現だ。攻撃は専ら「豆戦艦」の鋭い速射砲に委ぬるを以て戦略の要となす。》 [伊藤 1934c: 9]

しかしながら、制度的にその目的が雑誌批評に限定されていない匿名短評欄にまで視野を拡げると、稀にはあるが《れつきとした》論壇時評とのあいだに、より実質的な関説／被関説の関係が生じることもある。

《室伏高信は、こんにちなほ大総合雑誌が経済論文をあがめたてまつてゐて、いつかう政治論文に力を致さないのを見て、理由のある不平を漏した。》 [潮 1935: 10]

《こゝでちょっと注意しておきたいが、しばらく前の本欄の「壁評論」に矢内原氏の論文を批評するにあつて […] 匿名批評などわざわざ取り上げるのは如何にも仰々しすぎるが、かういふ知りもせぬでたらめは訂正しておいた方がいゝと思ふから、序でに書いておく。》 [大森 1935a: 4]

⁷⁴ 森洋介 [2003: 100] によれば、「豆戦艦」の辛辣な批評が関心と批判をよび、「初代」評者の氷山烈の正体が杉山平助であることが暴露されたため、杉山が筆名を横手丑之助に改め、同時に同短評欄の主旨を明らかにしたのがこの一文だとされる。

いずれも『読売新聞』の例であり、前者は同じ文芸欄に三日前に掲載された論壇時評（「二月号の雑誌から」）に匿名短評欄が関説した例であり、後者は逆に先に掲載された匿名短評欄に論壇時評が事後的に関説した例である。関説が肯定的になされているか否定的になされているかという点で分けても、二つの例は対照的と映る。しかしながら、新聞外のテキスト（前者では総合雑誌に掲載される政治・経済論文、後者では矢内原忠男の論文）に関説する際に、それと並行して当該テキストに関説した新聞紙上の（メタ）テキスト（前者では室伏の「二月号の雑誌から」、後者では「壁評論」）にもさらに関説する点で、両者は共通しているのである。ここでは二種の事後関説様式によって設定される関与性の地平が交叉しうる--あるいは重なりうる--ものとして了解されている。別なる「関説する（メタ）テキスト」もまた、自身にとっては「^{レリバンシー}関与的な＝関説される（べき）テキスト」たるやもしれぬ。とはいえ、「わざわざ取り上げるのは如何にも仰々しすぎる」とわざわざ注記しなければならない程度には、論壇時評による関与性の設定と匿名短評によるそれとの「種差」^{レリバン}についての了解がなおそこにはたらいっているのも事実である。そこには似て非なるものとして、あるいは非なるが似るものとして、論壇時評と匿名短評という二種の事後関説様式のあいだには、微妙な距離が看取せられていたように思われる。

この微妙な距離が作用することによって、二つの関説様式はある時は「使い分け」として、またある時は「混交」として了解される。実は、二番目の例で「論壇時評の評者」として登場する大森義太郎自身が、二つの関説様式の「使い分け」ないしは「混交」を象徴する「^{ペルソナ}人称性＝位格」なのである。そもそも東大辞職から一年後の一九二九年、『文芸春秋』に連載された「当世学者気質」で激しい個人攻撃を展開した匿名子X-Y-Zの正体とされるのが大森である〔竹内 2001: 95-107〕。その後新聞紙上でも、『読売新聞』で広津和郎と展開した論戦が匿名短評欄「壁評論」で関説されるや、大森自身も（実名のままだが）「壁評論」に登場し、匿名評者を痛罵する⁷⁵。

《広津さんはなかなか忠実な番犬を飼っておられると見える。[...] おい、白、いやお前は青か、へまやると、おせんべのかから貰へぬぞ!》〔大森 1935: 10〕

この応酬から一月も経たずに、今度は同紙「論壇時評」に評者に登用されたときの言が、先の矢内原擁護の論なのである。

大森義太郎なる「^{ペルソナ}人称性＝位格」の下で、字句のレベルでは論壇時評的関説と短評的関説とが区別される一方で、所作のレベルでは「混交」ないしは「使い分け」がなされている。かかる微妙な距離が、先に指摘した論壇時評揺籃期において匿名短評が占めていた位置価にどのようにかわってくるか。それを明らかにするには、いくつかの構造的な特性についていまい少し立ち入って検討する必要がある。

(B) 二重構造の異同

区別されかつ往還可能なものとして、一九三〇年代に論壇時評的関説様式と短評的関説様式がほぼ同時期に成立したことは、その類縁性と異質性のそれぞれに注目することで二つの意義を持つ。まず前者に注目した場合、現在にまで至る論壇時評なる様式が示す特性が三〇年代に成立した当時の文脈を、短評という補助線を引くことによってより立体的に理解することができる。一方、後者に注目した場合、現在まで論壇時評が更新されてくる過程で喪われていった三〇年代固有の条件、様式レベルでの連続性ゆえに不可視になっている側面の観察が期待できるのである。以下、論壇時評なる様式が歴史通底的にそなえていた三つの特性を選んで、そのそれぞれについて三〇年代の短評の関説と比較し、その異同から現在の様式を「為した文脈」とそれによって「見えなくなった文脈」につい

⁷⁵ 大森が『改造』に掲載した知識階級論に広津が関説したことによって論争が開始され、『読売新聞』は双方に紙面を提供した。その後「壁評論」には当該論戦についての鳴滝彦名義の短評を掲載している。大森の「お前は青か」のくだりは鳴滝彦の正体を青野季吉と知っていて当てこすったものとも推測されるが、本文でも指摘したように、直後に同紙の論壇時評を担当していることなどを考えあわせると、「内輪受け」の印象は否めない。それは大宅壮一がいう戦前の論争の《スポーツ的性格》〔大宅 [1949] 1981: 241〕を示唆するものかもしれない。

第四章 「起源」と「変貌」

て考察してみよう。

・「^{メタ・コミュニケーション}脈絡語り」への志向

論壇時評なる事後的関説の様式は、文芸時評などに比較して、雑誌掲載論文を中心とした個々のテキストの「内容」のみならず、その「文脈」についてもより頻繁に関説する。第三章で検討したように、特に「総合雑誌」という事実態はしばしば論壇時評の主題としてとりあげられてきた。なぜなら、総合雑誌に焦点をあてることで関与的なテキストの探索が促進されることに加えて、その実定性を否定する（たとえば「現実の総合雑誌は論壇の体をなしていない」と言挙げする）ことによって、反実仮想的に論壇なる全体の措定を促す効果ももつためである。

一方、匿名短評なる事後的関説の様式は、スペース的には論壇時評よりもはるかに制約されており、ために個々のテキストに対する批評＝関説も、短くかつ訴求力のある断定調となるほどである。だが、そうした稀少なスペースにもかかわらず、匿名短評もまた個々のテキストのみならず、その「脈絡」についても大きく取り扱う傾向がある。たとえば森洋介は、「豆戦艦」の初期には唯一の評者であった杉山平助について次のように述べている。

《つまりその眼は作品や作家の批評であることを越えて、出版界や編輯陣といった文学の環境へと向かってみたわけで、その意味での「ジャーナリズム（に就ての）批評」でもあったのだ。》[森 2002: 8]

実際雑誌単位での批評が多かった「豆戦艦」においては、少ないスペースのなかで、折にふれて、論文や小説といった個々のテキストのみならず、雑誌全体の編集方針など、その文脈的情報にまで関説が及んだ。

《『中央公論』と『改造』では、どういふ存立上の相違があるかといふ問題は政友会と民政党の政策が根本的にはどちらがふかかという質問に等しく、それ以上に答へにくいものであらう。論文、中間物、創作欄といふ陣立ては型でうちだしたやうに同一だしそのスタッフも羽左衛門が東劇へもでるし歌舞伎へも顔をだすといつた調子に、融通自在で何等の特殊性も見出されない。》[氷川 1932a: 9]

《従来の「婦女界」は「婦人公論」と「主婦之友」の中間に行くものゝように見えたのであるが、それが最近いちじるしく後者の色彩を多量に加へることによつて、従来の特色を失ひつゝあるがごとく見えるのは惜しい。》[氷川 1932b: 5]

個々のテキストに限らず雑誌総体にも関説対象としての単位性を認めるこの特性は、他紙が匿名短評欄という様式を導入する際にあわせて踏襲される。たとえば『読売新聞』の「告知板」や「壁評論」欄のなかで雑誌別の短評が行われる際、論文や作品に対する寸評に加えて次のように付言されることがある。

《雑誌ジャーナリズムの秘術をつくした新年号が年末狂騒曲の中にズラリと公開され、サラリーマンのポケット・マネーを狙つてゐる。中央の「おまけ」・お年玉は新企画の「中央公論年表」たる別冊。改造のお年玉-「世界政治経済地図」と拮抗。》[西 1933: 4]

《「行動」はひと頃総合雑誌の色彩を濃厚にしたが、この号などは文学雑誌の色が濃くなった。どちらでもいからぐらつかないで押して行くがよらしい。》[烏丸 1935: 10]

こうした関説がなされる時、そこで想定される話者の立ち位置は、テキストごとの「内容」に志向する意識的・選択的な読者というよりは、目次をなぞる浮動層的な読者、ないしは自ら執筆はせず企画を立て寄稿を依頼する編集者と近いものになるだろう。同じ匿名の雑誌短評欄でも、七〇年代後半に『毎日新聞』に登場した「まがじん」欄の場合、特定の記事を取りあげて客観的にその内容を紹介するもので、編集方針の評価や雑誌総体としての位置づけなどに言及されることはなく、この点でも戦前や戦後直後に見られた匿名短評欄とその性格を大きく異にしている。

では文脈的情報の主題化という特性に注目したとき、この時代の匿名短評と論壇時評という二つの関説様式との

関係はどのように評価されるか。両者のあいだの類縁性は比較的容易にみてとれる。改めて確認すれば、二つの様式のいずれも、雑誌掲載の個々のテキストの「内容」と同じ階層の一階のコミュニケーション（その「内容」の正否などの評価など）のみならず、当該テキストの「文脈」をめぐる二階のコミュニケーション（執筆や発注の理由・正否・効果の評価など）をも志向している。「編集者に対する註文」という体裁が頻繁にとられるのもこの点が関係している。

その一方で、「^{メタ・コミュニケーション}脈絡語り」という観点からみて二つの関説様式には相違点も認めることができる。まず論壇時評という様式においては、個々のテキストに^{レリバント}関与的な「文脈」の^{スケール}単位は、必ずしも個別具体的な雑誌にとどまらず、そのいわば「類概念」たる「総合雑誌」にまで拡張されて関説されることが多い。もちろんこの「総合雑誌」は、事実態としてさまざまな矛盾や欠陥、限界がそこに「発見」されるかぎりではイデアルなものではないが、個々の雑誌を包摂する「類的」な存在ではある。だからこそ、それは可能態としての論壇に一対一対応するものとして観念される。これに対して、匿名短評という様式においては、個々のテキストに^{レリバント}関与的な「脈絡」の探索は個別具体的な雑誌の水準までで停止することが多い。これはそもそも雑誌ごとの批評という形式に規定されていること、また、与えられた紙幅に強い制約があることを考えれば当然である。そこでは、「総合雑誌」などという「類的存在」は措定されないため、それに対応した「論壇」なる抽象的・理念的存在も後景化したままとなる。むしろ、一九三〇年代の匿名短評という様式において、より直接的に「文脈」の位置に措定されているものは、個々の雑誌にとって具体的な環境となる「市場」であったと考えた方が理解しやすい。ここで措定される「市場」は、「商業主義批判」といった抽象的なレベルでは処理しきれぬほど実質性を具えたものとして前景化している。たとえば杉山平助は『読売新聞』に雑誌界の動向について寄稿して次のように述べている。

《従つて編集者がお互に、やったな!抜かれたな!といふやうな神経の対立は、文化の根強い進展と次第に縁の遠いものになり、たゞその火花を散らすやうな競争が一種の玄人的な興味を刺激するやうな状態に立ち至つてゐる。おそらく雑誌そのものがコムマーシアリズムから脱却しない以上、編集方針がこゝから逸れることは、望みのうすいことで、私などは、もうかうなつた以上は、どこまで行けるものか、飽くまで徹底的にやつてのけるのがいゝとさへ思つてゐる。》[杉山 1933: 4]

擬悪趣味にも映るこうした表現⁷⁶が一応新聞記事として成立し、かつこうした記事自体が読者から人気を博し消費されていくのが戦前の短評的な関説様式だったのである。

注意すべきは、抽象的・理念的な論壇が後景化している場合、「論者」に対する主体性・内発性^{レリバント}は関与的な要求とはならない点である。テキストに関して需要と供給の合致、その効果こそが主題化され、「請負」についてもそこに有^{ステージ}徴性が認められることはない。

こうした現在から見ると異形とも映る関説の様式と相補的に成立したという歴史的な文脈が捨象されることによって、戦後の論壇時評なる様式は生成・更新されてきたといえる。

・超ジャンル性

第三章で検討したように、論壇時評なる事後的な関説様式においては、論壇なるものへの^{レリバンス}関与性を認められうるテキストの範囲について「評者の裁量」に委ねられるかたちで一定の自由度が組み込まれており、実際に採りあげられたテキストの範囲は相当多岐にわたる。「ジャーナリズム／アカデミズム」という評価軸上においては、主に総合雑誌に掲載されたルポルタージュや解説記事から、時事的あるいは相当に理論的な論文までもが論壇との^{レリバンス}関与性を設定され、時評において関説された。他方で、制度的に組み込まれた「非典型的」な時評においては、「総合雑

⁷⁶ もちろん、かかるテキストを産出する杉山平助は、単純な商業主義礼賛者でもない。「商品としての文学」や「批評の敗北」[いずれも水川 1933]といった評論では出版資本の集中や、批評家の性能の商品化といった主題を取り扱っている。

第四章 「起源」と「変貌」

誌の時論」を指標とした関与性の設定に「限界」を指摘するかたちで、小説や随筆から専門誌、機関誌、大衆誌、趣味的雑誌に掲載されたテキストまで関与性の設定範囲が拡大されることになる。

このように一九三〇年代に登場した論壇時評という様式から検討すると、そこで措定されている論壇なるものは、評者の関心によって対象領域を横断していく超ジャンル性とも呼ぶべき外貌を有している。しかしながら本章前節で検討したように、中国伝来の語として比較的早期から《界・社会》の意が安定していた「文壇」に比較して、「論壇」の語義は元来不安定なものであった。壮士的实践と結びついた「高み」のイメージから、やがて他ジャンルと並列的に「言論界・評論家の社会」の意味へと転じていくが、そうした語義も、上に挙げたテキスト間の超ジャンルの連関性（それは後に論調や論点などと換言されることもあろう）の意からはなお距離がある。人の集合たる「文壇」のみならず、テキストの集積たる「文芸」ジャンルに比肩し、かつ場合によってはその一部をも包摂する超ジャンルのジャンルとしての「論壇」の意義の成立は、論壇時評なる様式の創設に、それほど先立つものではなかったと推測される。

とはいえ、かかる転意の「原因」を詳らかにする作業は本論の能くするところではない⁷⁷。ここでは短評欄という補助線に依拠することで、関連するいくつかの要素を指摘するにとどめよう。短評欄にて雑誌単位の批評が行われることで、編集方針など個々のテキストに対する「文脈」への関心も前景化されたことはすでに述べた。と同時に短評欄での雑誌評は、当該雑誌に掲載される諸テキストをジャンルにかかわらずひとしなみに扱う平面を出現させたことをも意味する。総合雑誌が採りあげられる回には、政治・経済・思想といった分野の難解な論文から随筆、小説まで、それぞれが同一コラム内で等しく取り扱われ寸評を加えられていく。しかもそこには単なる要約にとどまらぬ、《読物としての興味》を誘う《片言隻句》[横手 1932: 9] が挟まれるのである。

もちろん、かかる短評欄の様式が、超ジャンルのジャンルとしての「論壇」の了解可能性を生みだしたなどという因果関係を考えているわけではない。単純にいても、杉山平助の「豆戦艦」の成功と論壇時評欄の誕生はほぼ同時期の出来事なのだから。とはいえ「豆戦艦」式の短評欄での雑誌評が（少なくとも様式として他紙にも波及していく程度には）人気を博したことを以て、消費者たる読者にすでにある種の^{メンタリティー}心^性が存在したことの傍証として捉えることは可能であろう。すなわち「豆戦艦」式の成功は、テキストごとにその「内容」を志向して熟読するのでなく、目次をなぞるようにそのテキスト間の関係の妙や評判を消費することに快を見出す^{メンタリティー}心^性が、（関係者ばかりでなく）すでに読者の側にも定着しつつあったことを物語っているのである。かかる「消費」には、実際の雑誌を手にとらないケースも含まれる。たとえば総合雑誌については、論壇時評での叙述からも明らかなように、それが「読めない」「読まれぬ」ものであることは夙に指摘される場所であった。だが内容志向的な読解が困難なテキスト群であっても、あるいはそうしたテキスト群であればこそ、（当否はともかく）相互の関係性が主題化されることに快を覚えるという感覚は強ち理解できないものではない。純然たる学術世界における閑説（引用）とは異なり、閑説すること自体に、すなわちテキストに閑説する（メタ）テキストそれ自体に欲情しうる「読者」がすでに一定の厚みをもって存在した可能性。一九三〇年代の短評欄の隆盛が示唆するところはこれである。

さて一九三〇年代当時、「論壇」が「超ジャンルのジャンル」として了解されていた可能性があることを示す、今ひとつの傍証を見てみよう。三三年の七月、『東京朝日新聞』は学芸欄に四回にわたって大森義太郎の「論壇の文章」を連載する。

《いつたい、論壇の誰れが文章がうまい彼れが文章がうまいといったところで、文章を本業にしてゐるといふのも変だけれ

⁷⁷ プロレタリア文学の存在を挙げるまでもなく、かかる超ジャンル性を本格的に検討するには、戦前のマルクス主義の影響を（その「亜流」をも含めて）主題的に扱わないことには無理であろう。思えば、山口功二や森洋介が超ジャンル批評と形容した『豆戦艦』の杉山平助ですら、『ノー・イズム』を誦しながらも自己の批評に《唯物論的分析の濃厚なものがある》と嘯き、《しばしば唯物論研究会から入会の勧誘を受ける》などと称するのであるから [杉山 1935: 10]。

ど、人達、つまり文壇の連中に比べれば、まづい。随筆や感想を並んで書いてるのを読むといつもさう思ふ。かういふものがよく書けるのは、ほかのこともあるにしても、まづ文章が優れてゐなくちやできない。》[大森 1933a: 5]

このように断ることによって、テキストの内容とは切り離して、文壇と同一地平上で、堺利彦や大内兵衛、向坂逸郎や美濃部達吉ら多数の論壇人の文体を検討することが可能となっている。たとえば三木清の文体については次のように形容される。

《弱くなよなよとして女の文章みたいである。それに、なるほどよく推こうされてはあるが、文章の輝きといふものに乏しい。》[大森 1933b: 9]

こうした表現は、通常の論壇時評欄ではあまり用いられず、むしろ短評欄の人物評論などに見受けられるものである。現代において、同じようなメタテキストが編集部より発注され、記事として成立しうるかを考えれば、三〇年当時の文脈の異質性をうかがうことができる。ただし、かかる文脈のなかで、現代まで承継されている論壇時評という関説の様式が生成されたこともまた事実である。

・「評者」なる「人称性^ベ＝位格^ソ」の措定

いったい超ジャンル化の傾向は、読者の潜在的嗜好ばかりにではなく、短評欄・論壇時評欄双方に登場する「評者」の側の「出自」にもすでに現れていた。そしてテキストに関説するメタ・テキストへの関心、その商品価値が高まるなか、やがてそうした「出自」も含めて「評者」の「人称性^ベ＝位格^ソ」もまた関説の様式のなかで前景化・主題化していくことになる。

たとえば、匿名雑誌短評欄「豆戦艦」の評者であった杉山平助については、すでに山口、森ともにその執筆活動の原点の特異性に注目している [山口 1974: 44, 森 2002: 9]。一九二九年に『三田文学』に掲載された「下層一断面」なる杉山の初期作品の末尾に、象徴的にも吉野作造との邂逅譚が付されているのである。そこでは、かつて文壇への異和を表明した杉山に対して、吉野が評論を奨める場面が記される。その上で施療病院の風俗を描いた「下層一断面」は《小説態の評論、或は評論態の小説》[杉山 1927: 54]と形容されるのである。その後も『三田文学』や『文芸春秋』などで文芸評論・社会時評の二面に活動した後、匿名で担当したのが『東京朝日新聞』の「豆戦艦」であった。一応は文芸畑の出自といえども、《「文学」という対象の唯一性への懐疑から始まっている》[山口 1975: 77]。

あるいは第三章で紹介した「非典型的」な論壇時評のうちこの三〇年代のものを見ると、ある意味当然のことながら、その「評者」のなかにも超ジャンルの志向性を示す人物がみてとれる。たとえば、新聞の論壇時評欄において雑誌の「文芸時評」に関説した「評者」である大宅壮一は、帝大新人会に所属し社会学科を中退した後、新潮社の『社会問題講座』の編集にたずさわるが、直接その名が世に出たのは、前述の通り、二六年の「文壇ギルドの解体期」[大宅 [1926]1981]にはじまる一連の文芸評論（作品に照準しないという意味では文壇論）をつうじてであった。一方、学術畑出身の「評者」たちのなかにもジャンルを横断して執筆活動を行う者が出てくる。「非典型的」論壇時評の例として、哲学論文や随筆にも関説したことを指摘した大森義太郎の場合も、本来経済学が専門ながら、『東京朝日新聞』で文芸批評を担当している。あるいは三四年二月に『東京日日新聞』で論壇時評欄を担当した戸坂潤は、同年六・七月にかけて同紙で「創作評」を担当し、「街頭社会学と民族社会学」と題して雑誌小説を批評している [戸坂 1934:]。

大森や戸坂のように元来それを業としていない者が文芸批評に進出する現象は、文芸雑誌などでも当時から「局外批評」の問題として注目を集めていた。それは既存の文壇なるものとの対峙関係で捉えられ、その新しい価値基準の導入によって、評価と仕事の差配が部内者^イ＝専門家^イのなかで完結していた文壇のギルド的自己完結性を動揺さ

第四章 「起源」と「変貌」

せる存在として捉えられていた。だが「局外批評」の名付け親でもあるらしい大宅壯一にしろ⁷⁸、あるいは同じく文芸畑から出発した杉山平助にしろ、方向こそ逆とはいえ、批評、すなわちテキストへの関説を通じてギルド的なジャンルの超越を志向する点で大森や戸坂らと親和的な存在であったともいえる。実際、その超ジャンルの志向性は、後年に見られる「非典型的」な論壇時評の^{アーキタイプ}雛型として、すなわち「総合雑誌の時論の〈外〉を関与的なく外延〉として数え上げることによって、〈内包〉の^{レリバント}実定的な定義は避けたまま論壇なるもの〉の存在を指定する」ような関説の様式の^{アーキタイプ}雛型として位置づけることができる。

もちろん、こうした無制限な関説対象の拡大については、当時から批判も寄せられていた。たとえば雑誌ごとに論文にも小説にも等しく寸評を加えていく「豆戦艦」に併置されるかたちで、西洋史学者の今井登志喜の時評は次のように述べている。

《各論文の批評家は仮令通俗的な時であつても相当に夫々の専門家であるべきである。その意味から多くの論文を総捲くりにする如きは本来無理である。それは時として無暗に撫切りにして痛快至極であるが、屢々非専門的な見当違ひに陥るのである。従つて此論壇時評の如きは厳密な意味の批評ではなく、寧ろ非専門的な一読者のその時の問題に関する読後の感想である。しかし各方面の読者の公然の声の聞かれる事は無意義ではあるまい。》[今井 1935: 9]

さまざまな専門のテキストに関説することを様式として強いられる論壇時評は、ここでは本来は不可能事と想定される。それは「読後の感想」の相に割り引かれることによって辛うじて意義が認められるものである。それを等閑視する者は単なる「撫で切り」「見当違い」ということになる。--ある意味で、論壇時評という事後的関説の様式のなかで、戦後今日まで引き継がれる典型的な^{ディスカウント}割引戦術ともいえる。

しかしながら、短評欄という補助線を引くと次の点が見えてくる。すなわち、この時代の超ジャンル志向の強い「評者」たちは、ある意味で論壇時評や短評欄という様式が強いることにもなるこの領域横断性について、後代よりも積極的な意義を認めるのである。そしてこれにより、一九三〇年代の事後的関説様式--それは論壇時評と短評欄との二重構造と捉えられる--において析出する「評者」なる「^{ベレルソナ}人称性=位格」は、この時代固有の相貌を帯び、前景化することになるのである。

「評者」たちが自らの超ジャンル志向の批評に積極的な意義を認めていることは、そうした志向性を「評者」自身がしばしば「批評論」として独立に論じていることからもうかがえる。たとえば戸坂は、自らが「局外批評家」--すなわち文壇の局外にありながら文芸批評もする存在--に算えられた際、その立場を次のように論ずる。

《第三は一般読者による批評、と云ふのは一般読者の立場に立つた文芸時評である。云ふまでもなく一般読者は、文学作品ばかりを読んでゐるのではない。百般の内容に就いての論文も読めば時事的評論も読めば教科書も読む。読者は一般に専門家ではない。夫々の部門に対しては多く素人なのである。》

《一般読者はそれぞれの専門に就いては多くは素人だが、所が不思議なことには、この諸専門部分を統合し統一した世界に就いては、立派な評論家なのである。そこには常識（良識・「健全なる理性」等々）がある。》[戸坂 1935b: 21]

まず戸坂は、専門論文も時事評論も創作もひとしなみに読む超ジャンル志向の批評の基礎に「一般読者」、「素人」を置く。これは一見すると、前述した今井の立場と変わりがなくとも見える。しかしながらそれは^{ディスカウント}割引の様相を呈していない。核となるのは各人がもつ「常識」である⁷⁹。

⁷⁸ 自身も「局外批評家」に数えられている科学史家の岡邦雄によれば、「局外批評家」といふ言葉は、おそらく大宅壯一氏が本誌『新潮』：引用者註の八月号に書いた「局外文芸批評家論」に始まるのではないかと思ふ」とされる [岡 1935: 14]。なおこの岡の評論と同じ雑誌には戸坂と大森もそれぞれ「局外批評家」の立場から寄稿している。

⁷⁹ 戸坂のイデオロギー論において「常識」は、日常性・市井性の原理、ジャーナリスティックな機能と相関する規範的な水準線としてきわめて重要な位置を与えられている [戸坂 [1935a]1965: 250-265]、上記論文では戸坂自身その説明を割愛している。

《まづ第一に、ひとから教へられない自分の趣味に忠実な率直な印象の受け取り方をする。そして自分の常識のどの点に触れたためにこの印象が結ばれたかを、彼は追跡する。》[戸坂 1935b: 21]

そこでは日常性に根ざした《普遍的な批評の体系》《総合的で統一的な批評そのもの》[戸坂 1935b: 21]なるものの存在が前提されている。「素人」的万能性はいまや闇雲に卑下されるべきものではなく、「評者」としての「人称性＝位格」はいまや固有の価値を持つ陶冶されるべきものとして位置づけられる。このように自己の立場を定義した戸坂が別稿「常識・合理主義・弁証法」の冒頭で《近来、常識といふものに多少反省を加えてゐるもの》に挙げたのが杉山平助だとされる [戸坂 1935c, 森 2003: 103]。

三章で検討したように、一般的な論壇時評においては「個人による情報処理の飽和」についての了解が、論壇の措定の重要な契機となっている。事実態として「読まない」「読み切れない」ことのたえざる確認が、可能態としての論壇なるものの措定を促しているということである。しかしながら三〇年代の閑説様式に見られる超ジャンル性志向の批評は、専門性に閉じていない個人の資格、すなわち「人称性＝位格」に強い負荷をかけることによって成立している。それは、一旦「^{エクスキューズ}弁明」を入れてからあまりに多様なテキストへと閑説していくことになる現代の論壇時評者に措定されている「人称性＝位格」とは、かなり異質な存在なのである。

以上見てきたように、三〇年代に事後的閑説様式として論壇時評と並行して生成・普及した短評欄という閑説様式は、この時期の論壇時評欄という様式の成立を考察する上で、重要な位置値をもっていると考えられる。まず、まだ論壇時評なる閑説の様式が十分に定着していなかった頃から、文壇にまで渡るような超ジャンルの閑説を励起することによって、「論壇」なる語の「テキスト間の関係性＝論調」なる意義を確立させる働きをした。また、論壇時評なる閑説の様式が今日なお帯びているいくつかの特性について、それらが生成する原初の状況を類推する手がかりを与えてくれる。さらに、現在の論壇時評という様式を過去に投影する事によって見えにくくなっている歴史的な文脈を推測するのもも有益な存在である。こうした死角に入っている過去の文脈――論壇以上に実定的な「文脈」として措定される「市場」、テキスト以上にメタ・テキストを欲望する「読者」、万能性を引き受ける「評者」の「人称性＝位格」――は、現在の論壇がこういった要素を捨象することによって成立しているかを考える上でも重要なものといえる。

おわりに

本論は、論壇なる社会的カテゴリーによる区別の歴史具体的様態を追跡することを目的としてきた。

論壇時評欄や短評欄といったメディアの様式性に視点を限定して、あるいはあるべきだったやもしれない思想史的検討を意識的に捨象した結果得られた結論が、本当に^{レリバント}関与的か否か判然としないものを数え上げる繰り返しによってのみ、直接は確認できない論壇なるものの存在を触知しようという記号の運動だったことはある意味当然だったのかもしれない。ただし「起源」にして、今からみれば相当な異形性をも帯びているという意味で「反起源」でもあった一九三〇年代の状況を再確認できたことは、個人的な収穫であった。

本章第四章の主要登場人物の一人であった大宅壮一は、その後評論活動を離れて戦時中は満洲やジャワへ渡り、敗戦前後しばらくは農業に専念していたとされる。大宅と同様に文芸批評欄や論壇時評欄、まれに短評欄にまで寄稿していた大森義太郎・戸坂潤・杉山平助の三人は、大宅がふたたび執筆を再開した五〇年頃にはすべて病死または獄死している。言論活動の商品的側面を臆さずに対象化するメタ・コミュニケーションへの志向や、「テキストに關説するテキスト」たる批評を欲望し消費する需要構造、素人的・常識的普遍性に投企するような批評スタイルといった一九三〇年代の關説様式にみられた特徴は、この頃までに大きく変貌したように見える。そのさらに五年後に『「無思想家」宣言』を記し、みずからタレントを宣言した大宅の航跡をたどることで、かかる転態が論壇時評的な關説様式にもたらした影響まで検討したかったが力不足で筆が及ばなかった。

恐らくは他メディア的状况を視野に入れなければ扱えないであろう戦後も含めた近代的な「語り口」のさらなる検討は（それがあれば）他日を期したいと思う。

(東京) 朝日新聞論壇時評欄評者一覧

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1931											猪俣津南雄	河上肇	
1932	赤松克麿	長谷川如是閑	山川均	大森義太郎	谷川徹三	高橋亀吉	向坂逸郎	土方成美	佐々弘雄	有沢広巳	住谷悦治	馬場恒吾	5.15事件
1933	本位田祥男	新明正道	杉森孝次郎	青野季吉	戸坂潤	山川均	恒藤恭	大宅壮一	笠信太郎	馬場恒吾	長谷川如是閑	猪俣津南雄	
1934	上田貞次郎	室伏高信	伊藤正徳	石浜知行	末弘毅太郎	林癸未夫	高橋亀吉	栗生武夫	向坂逸郎	津村秀松	新明正道	戸坂潤	
1935	猪俣津南雄	大森義太郎	宮沢俊義	山川均	河田嗣郎	中野正剛	猪谷善一	鈴木義男	戸坂潤	土屋喬雄	今井登志喜	谷川徹三	
1936	馬場恒吾	向坂逸郎	青野季吉	林癸未夫						向坂逸郎			2.26事件
1937						美濃部亮吉			戸坂潤				
1938													
1939						(山川菊枝)						(清水幾太郎)	
1940													
1941													
1946		中野好夫											
1947									中野好夫				
1951			高橋義孝:1								林健太郎:3		月1回、題目に「総合雑誌」
1952		大内力:3		緒方富雄:1	遠藤湘吉:3			日高六郎:6					
1953			福原麟太郎:3			吉田精一:3		相良守峯:3			本多顕彰:3		
1954			城戸又一:6					白井吉見:3			竹内好:2		7月~11月分まで上下2回
1955		中村哲:2		陸井三郎:1	白井吉見:1:再	福田定良:6							
1956	荒正人:1	加藤子明:2		中野好夫:9									
1957	城戸又一:6:再						中島健蔵:30						
1958													
1959													
1960	桑原武夫:12												題目が「論壇時評」に、9月より上下2回
1961	猪木正道:12												2月より上中下3回
1962	都留重人:24												1月より上下2回
1963													
1964	猪木正道:12:再												11月より夕刊に移転
1965	都留重人:12:再												
1966	猪木正道:12:再々												
1967	長洲一三:28												
1968													
1969						河野健二:12							
1970						坂本義和:12							
1971						久野収:16							
1972								河野健二:17:再					
1973													
1974		鶴見俊輔:24											
1975													
1976		武者小路公秀:12											
1977		中野好夫:12:再											
1978		松下圭一:24											
1979													
1980		宮崎義一:12											
1981		高島通敏:24											
1982													
1983		山本満:24											
1984													
1985		見田宗介:24											
1986													
1987		佐和隆光:24											
1988													
1989		佐々木毅:39											
1990													
1991													
1992						高橋達:24							
1993													
1994								「論壇時評」青木保:24					
								「ウォッチ論調」芥沢俊輔:36					
								「私が選んだ3点」毎回三人の選者					
								「論壇時評」					
1995								「ウォッチ論調」					
								「私が選んだ3点」					
								「論壇時評」					
								「論壇時評」山崎正和:24					
1996								「ウォッチ論調」宮台真司:12					
								「私が選んだ3点」					
								「論壇時評」					
1997								「ウォッチ論調」松原隆一郎:24					
								「私が選んだ3点」					
								「論壇時評」					
								「論壇時評」米本昌平:24					
1998								「ウォッチ論調」					
								「私が選んだ3点」					
								「論壇時評」					
1999								「ウォッチ論調」荒田清一:12					
								「私が選んだ3点」					
								「論壇時評」					
2000								「ウォッチ論調」					
								間宮陽介					
								「私が選んだ3点」					

参考文献

- 青野季吉, 1958, 「『豆戦艦』時代」『週刊朝日--二〇〇〇号突破記念 奉仕版 朝日新聞からみた明治・大正・昭和 三代の社会史』63(21).
- 有山輝男, 1992, 『徳富蘇峰と国民新聞』吉川弘文堂.
- 朝日新聞社社史編修室, 1970a, 『朝日新聞編年史--大正八年』.
- , 1970b, 『朝日新聞編年史--昭和六年』.
- , 1971, 『朝日新聞編年史--大正九年』.
- , 1972, 『朝日新聞編年史--大正十年』.
- , 1973, 『朝日新聞編年史--大正十一年』.
- Boorstin, Daniel J., 1962, *The Image; or, What Happened to the American Dream*, Atheneum = 1964, 星野郁美・後藤和彦訳『^{イメージ}幻影の時代』東京創元新社.
- Charle, Christophe, 1990, *Naissance des "Intellectuels,"* Les Editions de Minuit. = 2006, 白鳥義彦訳『『知識人』の誕生--1880-1990』藤原書店.
- 遠藤知己, 2003, 「メディアそして／あるいはリアリティ--多重メビウスの循環構造」『思想』956, pp.65-83.
- 長谷川如是閑, 1930, 「ブルジョア・ジャーナリズム」『総合ジャーナリズム講座(第一巻~第二巻)』内外社, 1930年
- Habermas, Jürgen, 1990, *Strukturalwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp = 1994, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換--市民社会の一カテゴリーについての探求--第2版』未来社.
- , und Niklas Luhmann, 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Suhrkamp. = 1984, 佐藤嘉一・山口節郎・藤澤賢一郎『批判理論と社会システム理論--ハーバーマス=ルーマン論争』木鐸社.
- 水川烈 [杉山平助], 1933, 「批評の敗北」『春風を斬る』大畑書店.
- 橋元良明・福田充・森康俊, 1997, 「慎重を期すべき「街頭の声」の紹介--テレビ報道番組におけるイグゼンプラー効果に関する実証的研究」『新聞研究』553, pp.62-65.
- 法政大学大原社会問題研究所編, 1969, 『新人会機関誌 デモクラシイ/先驅/同胞/ナロード--日本社会運動史料機関紙誌篇・第1回発売』法政大学出版局.
- 稲田雅洋, 2000, 『自由民権の文化史: 新しい政治文化の誕生』筑摩書房.
- 石浜知行, 1931, 「論壇時評」『中央公論』46(3): 113-122.
- 伊藤正徳, 1947, 『新聞五十年史』鱒書房.
- 井上勲, 1975, 「幕末・維新期における「公議輿論」概念の諸相--近代日本における公権力形成の前史としての試論」『思想』609, pp.354-367.
- 石田佐恵子・小川博司編, 2003, 『クイズ文化の社会学』世界思想社.
- 川端康成, 1924, 「月評家気焔」『芸芸春秋』2(3). (再掲: 1982, 『川端康成全集第三十巻』新潮社.)
- 木村直恵, 1998, 『<青年>の誕生--明治日本における政治的実践の転換』新曜社.
- , 2003, 「<批評>の誕生--明治中期における<批評><改良><社会>」『比較文学』45.
- 北田暁大, 2003-4, 「『かたち』の向こう側--陰謀する社会とメディア」『d/sign』太田出版, 5・6・7号
- , 2004, 「引用学--リファアすること/されることの社会学」『<意味>への抗い--メディアエーションの文化政治学』せりか書房.
- , 2005, 『囁く日本の「ナショナルリズム」』日本放送出版協会.
- 小林康達, 2005, 『七花八裂--明治の青年杉村広太郎伝』現代書館
- 香内三郎, 1982, 『活字文化の誕生』晶文社.
- , 2004, 『「読者」の誕生--活字文化はどのように定着したか』晶文社.
- 小島亮, 2003, 『ハンガリー事件と日本--一九五六年・思想史的考察』現代思潮新社.
- Luhmann, Niklas, 1972, "Interaktion, Organization, Gessellschaft, in Luhmann, 1975, *Soziologische Aufklärung 2*, Westdeutscher.
- , 1996, *Die Realitat der Massenmedien*, 2., erw. Aufl., Opladen: Westdeutscher Verlag. = 2005, 林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社.
- 前田愛, 1989, 『幕末・維新期の文学・成島柳北--前田愛著作集第一巻』筑摩書房.
- , 1989, 『幻景の明治』筑摩書房.
- Manheim, Kahl, 1925, "Das Problem einer Soziologie des Wissens," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozial politik*, Bd. 53. = 1973, 「知識社会学問題」秋本律郎・田中清助訳『マンハイム シェラー 知識社会学--現代社会学大系8』青木書店.
- Marshall, P. David, 1997, *Celebrity and Power: Fame in Contemporary Culture*, Univ of Minnesota P. = 2002, 石田佐恵子訳『有名人と権力--現代文化における名声』勁草書房.

参考文献

- 松沢弘陽, 1991, 「公儀輿論と討論のあいだ—福沢諭吉の初期議会政観」『北大法学論集』41(5・6): 2475-2530.
- 三木清, 1932, 「文学と論壇」『鐵塔』1(1). (再録: 1967, 『三木清全集 第十二巻』岩波書店, 29-40.)
- 森洋介, 2002, 「ジャーナリズム論の一九三〇年代—杉山平助をインデックスとして」平成一四年度日本大学国文学会総会研究発表.
(<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Library/1959/GS/journalism02.pdf>, 2007.1.3)
- , 2003, 「一九三〇年代匿名批評の接線—杉山平助とジャーナリズムをめぐる試論」『語文』日本大学国文学会, (117): 97-114.
- , 2005, 「『文藝春秋』附録『文壇ユウモア』解題及び細目—雑文・ゴシップの系譜學のために」『日本大学大学院国文学専攻論集』(2): 195-266.
- 永江朗, 2004, 『批評の事情—不良のための論壇案内』筑摩書房.
- 岡邦雄, 1935, 「局外批評家の立場」『新潮』32(11): 14-18.
- 小熊英二, 2002, 『民主と愛国—戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- , 2003, 『清水幾太郎—ある戦後知識人の軌跡』, お茶の水書房.
- 小野秀雄, 1922, 『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社・東京日日新聞社.
- 大井浩一, 2004, 『メディアは知識人をどう使ったか—戦後「論壇」の出発』勁草書房.
- 大町桂月, 1900, 「加藤博士に質す—時事評論・教育界」太陽, 1900, 「太陽第六巻第十五号目次」博文館, 6(15)
- 大塚英志, 2001, 「論壇誌でばくはいかに語ったか」『戦後民主主義のリハビリテーション—論壇でばくは何を語ったか』角川書店, 7-26.
- 大宅壮一, 1926, 「文壇ギルドの解体期」『新潮』23(12). (再掲: 1981, 『大宅壮一全集 第一巻』蒼洋社, 230-241.)
- , 1949, 「思想の功利化と投機化」『改造』30(2). (再掲: 1981, 『大宅壮一全集 第六巻』蒼洋社, 240-250.)
- , 1955, 「『無思想人』宣言—“思想商売”ならわたしにも“手持ち”はあるが」『中央公論』70(5): 246-254.
- Q・Q・Q, 1946, 「新聞学芸欄批判」『新潮』33(7).
- 蜷山政道, 1933, 「杉森氏に答ふ(下)」『東京朝日新聞』1933.3.14, 朝刊9.
- 坂本多加雄, 1988, 『山路愛山』吉川弘文館.
- 佐藤俊樹, 1997, 「マスメディアするインターネット」『神奈川大学評論』(27): 36-43.
- , 2005a, 『桜が創った「日本」—ソメイヨシノ起源への旅』岩波書店.
- , 2005b, 「閉じえぬ言及の環—意味と社会システム」『<社会>への知/現代社会学の理論と方法(上)—理論の現在』勁草書房: 120.
- , 2005c, 「深く浅い世界と私—コミュニケーションのメタ自由をめぐる」『大航海』(56):103-111.
- , 2006, 「コミュニケーション・システムへの探求—kをめぐる問題」『Intercommunication』15(3): 27-36.
- 清水幾太郎, 1949, 『ジャーナリズム』岩波書店. (再掲: 1992, 清水礼子編『社会心理学・ジャーナリズム他—清水幾太郎著作集9』講談社.
- , 1951, 『社会心理学』岩波書店. (再掲: 清水礼子編『社会心理学・ジャーナリズム他—清水幾太郎著作集9』, 講談社.
- 清水礼子, 1992, 「解説」『流言蜚語・青年の世界・人間の世界—清水幾太郎著作集2』講談社.
- 下山勇司編, 1890, 『上毛青年の初陣—廃娼論壇第一戦闘』上毛青年聯合会.
- Smith II, Henry Dewitt, 1972, *Japan's First Student Radicals*, Harvard University Press: Cambridge, Mass. = 1978, 松尾尊兌・森史子訳『新人会の研究—日本学生運動の源流』東京大学出版会.
- 末広鉄腸, 1886, 『雪中梅 上』博文館.
- 杉村楚人冠, 1936, 「総合雑誌の将来」『改造』25(9):192-202.
- 杉山平助, 1927, 「下層一断面」『三田文学』2(5): 38-54.
- , 1934, 「氷河のあくび—朝にレビューを論じ夕に文学を論ず」『氷河のあくび』日本評論社, 17-25.
- 高田里恵子, 2005, 『グロテスクな教養』筑摩書房.
- , 2006, 『文学部をめぐる病—教養主義・ナチス・旧制高校』筑摩書房.
- 竹内洋, 2001, 『大学という病—東大紛擾と教授群像』中央公論新社.
- , 2005, 『丸山真男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム』中央公論新社.
- 田中紀行, 1999, 「論壇ジャーナリズムの成立」青木保・川本三郎・筒井清忠・御厨貴・山折哲雄編『知識人—近代日本文化論4』岩波書店, 177-194.
- 谷沢永一, 2002, 「文芸時評隆盛期—文芸放談「雑書」蒐集50年 3」(<http://yushodo.co.jp/pinus/53/tanizawa/bu3.html>, 2006.11.30)
- Terdiman, Richard, 1985, *Discourse/ Counter-discourse: The Theory and Practice of Symbolic Resistance in Nineteenth-Century France*, Cornell University Press.
- 戸坂潤, 1932, 『イデオロギー概論』理想社出版部. (再録: 1965, 『戸坂潤全集 第二巻』勁草書房.)

- , 1935a, 『日本イデオロギー論--現代日本における日本主義・ファシズム・自由主義・思想の批判』白揚社。(再掲:1965,『戸坂潤全集 第二巻』勁草書房.)
- , 1935b, 「局外批評論」『新潮』32(11): 18-22.
- , 1935c, 「常識・合理主義・弁証法」『セルパン』1935.2.
- 東京朝日新聞, 1927, 『東京朝日新聞小観』.
- 土屋礼子, 2002, 『大衆紙の源流--明治期小新聞の研究』世界思想社.
- 山口功二, 1974, 「マス・ジャーナリズムとしての批評(一)--杉山平助をめぐって」『評論・社会科学』同志社大学人文学会, (7): 38-59.
- , 1975, 「マス・ジャーナリズムとしての批評(二)--杉山平助と昭和期ジャーナリズム」『評論・社会科学』同志社大学人文学会, (9): 65-88.
- 山路愛山, 1906, 『講壇と論壇』山陽堂.
- 山本武利, 1973, 『新聞と民衆--日本型新聞の形成過程』紀伊國屋書店.
- , 1981, 『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局.
- , 1990, 『新聞記者の誕生』新曜社.
- 編, 2006, 『メディアのなかの日本--岩波講座「帝国」日本の学知 第4巻』岩波書店.
- 安江良介・植田康夫・池田昌二・高野昭, 1977, 「座談会--文化 その創出と伝達」『新聞研究』310: 8-23.
- 吉田精一, 1953, 「六月号の総合雑誌」『朝日新聞』1953.5.29, 朝刊 4.

- 青木保, 1996, 「社会の未来--いま下されている判断の結果を考える作業が必要 論壇時評」『朝日新聞』1996.3.28, 夕刊 15.
- 朝日新聞, 1946, 「雑誌評」1946.6.24, 朝刊 2.
- , 1994, 「青木保氏に交代／『ウオッチ論調』欄も新設--論壇時評」1994.3.31, 夕刊 11.
- 馬場恒吾, 1932, 「最善の批評・最後の批評--十二月の論壇 一」『東京朝日新聞』1932.12.1, 朝刊 9.
- 福田定良, 1955, 「『保守新党』には懐疑的--政治・芸術とその地盤の問題 十二月の総合雑誌評」『朝日新聞』1955.6.22, 朝刊 7.
- 橋爪大三郎・森まゆみ・田中明彦, 1993a, 「『論じない政治』の行方--これは『国際化』なのか 雑誌を読む 7月」『毎日新聞』1993.7.26, 夕刊 6.
- 橋爪大三郎・中西輝政・山下悦子, 1996, 「『21世紀』論・猿岩石現象--雑誌を読む 12月」『毎日新聞』1996.12.19, 夕刊 8.
- 林房雄, 1937, 「匿名批評撲滅論--槍騎兵」『東京朝日新聞』1937.3.19, 朝刊 7.
- 林健太郎, 1951, 「講和論をめぐって--総合雑誌評」『朝日新聞』1951.10.21, 朝刊 4.
- , 1958, 「思索と説明の両極ですぐれた二論文--埴谷雄高と大河内一男 論壇時評」『読売新聞』1958.10.20, 夕刊 3.
- , 1959, 「粗末な外交特集『世界』--渡辺の“東西軍勢力”『中公』は有益 論壇時評」『読売新聞』1959.5.15, 夕刊 3.
- 林癸未夫, 1934, 「自由主義者の占拠--六月の論壇 (一)」『東京朝日新聞』1934.6.2, 朝刊 9.
- , 1936, 「二・二六事件--四月の論壇(1)」『東京朝日新聞』1936.4.6, 朝刊 9.
- 日高六郎, 1952, 「“里程標”から“道しるべ”--九月号総合雑誌から」『朝日新聞』1952.8.23, 朝刊 2.
- 土方成美, 1932, 「農村窮乏対策--高橋氏の専売制度論を読む」『東京朝日新聞』1932.8.8, 朝刊 5.
- 氷川烈 (杉山平助), 1932a, 「『中央公論』と『改造』--豆戦艦 三月の雑誌」『東京朝日新聞』1932.3.2, 朝刊 9.
- , 1932b, 「『婦人公論』『婦女界』--豆戦艦 五月の雑誌」『東京朝日新聞』1932.5.4, 朝刊 5.
- , 1933, 「改造--豆戦艦 八月の雑誌評 (2)」『東京朝日新聞』1933.7.28.
- 広津和郎, 1935, 「売言葉・買言葉 大森義太郎氏に」『読売新聞』1935.2.1, 朝刊 10.
- 本多顕彰, 1967, 「まず明快な文章を--福原、宮沢両氏を範として 論壇時評 上」『読売新聞』1967.3.20, 夕刊 7.
- 今井登志喜, 1935, 「自由主義を繞る--十一月の論壇 1」『東京朝日新聞』1935.11.3, 朝刊 9.
- 猪木正道, 1961, 「あいかわらず“不毛”--革新インテリの発想・論壇時評・上」『朝日新聞』1961.6.25, 朝刊 9.
- 猪俣津南雄, 1931, 「ファッション横行--十一月の雑誌を読んで 論壇時評 [一]」『東京朝日新聞』1931.11.8, 朝刊 9.
- , 1935, 「農村問題--一月の論壇 (3)」『東京朝日新聞』1935.1.9, 朝刊 9.
- 伊藤正徳, 1934a, 「雑誌のトン数--欧米の一流誌に比べて 三月の論壇 (一)」『東京朝日新聞』1934.3.4, 朝刊 5.
- , 1934b, 「心の修正を望む--郷男の資本主義修正論 三月の論壇 (二)」『東京朝日新聞』1934.3.5, 朝刊 9.
- , 1934c, 「巻頭論文の春--三井座談会と番町会 三月の論壇 (四)」『東京朝日新聞』1934.3.7, 朝刊 9.
- 樺山紘一, 1980, 「『私』の視点を明確に--ルポルタージュに求められる事実への熱意と懐疑との相克 今月の論点 下」『読売新聞』1980.4.26, 夕刊 5.
- , 1982, 「庶民の知恵的確に分析 『言語』『ことわざの世界』--主体性欠き、その存在忘れる 『青年心理』『賭ける』 今月の論点 下」『読売新聞』1982.12.24, 夕刊 7.
- , 1984a, 「『政治空間』創造を提唱--『中央公論』の佐々木論文 利益政治では摩擦回避できぬ 今月の論点 上」『読売新聞』1984.5.29, 夕刊 11.
- , 1984b, 「美味論に新しい言説--火つけ人 山本益弘、佐原秋生 料理人きたえる客の批評眼 今月の論点<下>」『読売新聞』1984.12.25, 夕刊 11.
- 加藤周一, 1960, 「過去と未来--今月の論調 (上)」『毎日新聞』1960.4.15, 朝刊 7.
- 鳥丸求女, 1935, 「行動と早文 (八月の諸雑誌)--壁評論」『読売新聞』1935.8.9, 朝刊 10.
- 河合秀和, 1976c, 「舞台と観客の間--疑わしきは罰せよ・高島氏の構造汚職論・『週刊ピーナッツ』・“観客が書き始めた”効果」『読売新聞』1976.5.28, 夕刊.
- 高坂正堯, 1970, 「“守備範囲”守ること--篠原論文のころよき 論壇時評 下」『読売新聞』1970.1.23, 夕刊 7.
- 陸井三郎, 1955, 「積極的な主張欠く--外交問題をめぐって 四月号の雑誌論文から」『朝日新聞』1955.3.24, 朝刊 5.
- 久野収, 1971, 「『沖繩』に『60年安保』の迫力なし--知識人の指導性低下 地盤沈下する総合雑誌 論壇時評 上」『朝日新聞』1971.11.25, 夕刊 7.

- , 1972, 「日共 50 周年の評論分極--“近代主義”組織の危機 『草の根』 盛込みが課題』『朝日新聞』1972.7.28, 夕刊 7.
- 桑原武夫, 1960, 「総合誌への注文--面白くない 週刊誌への傾斜とともに思想誌への上昇意図を 論壇時評六月号』『朝日新聞』1960.5.22, 朝刊 9.
- 間宮陽介, 2000, 「自己愛からの脱却--『差別意識』 抑圧した差別 『個人的には』の落とし穴 論壇時評』『朝日新聞』2000.4.26, 夕刊 15.
- 松原隆一郎, 1999, 「論壇崩壊?--話題の論考減り、熱気去る 争点示し、作法守る努力を ウオッチ論調』『朝日新聞』1999.3.30, 夕刊 5.
- 見田宗介, 1976a, 「自己疎外の清浄感覚--ロッキード的状况を生む 日本の底辺つく谷川氏らの論考 論壇時評【下】』『読売新聞』1976.4.28, 夕刊 7.
- , 1976b, 「『脱領域』の時代--野生社会科学の胎動 『思想の科学』 栗原氏 『中公』の高橋氏ら 民衆つぶす権力を告発 論壇時評・下』『読売新聞』1976.5.31,夕刊 5.
- , 1985a, 「大江健三郎氏の『この項続く』 --『明るさ』の虚構つく 次代との接点手さぐり 論壇時評 上』『朝日新聞』1985.1.28, 夕刊 7.
- , 1985b, 「草たちの静かな祭り 人間主義の限界問う 『障害者の思想』の現在』『朝日新聞』1985.5.31, 夕刊 7.
- 宮沢俊義「美濃部達吉論--三月の論壇（一）』『東京朝日新聞』1935.3.5, 朝刊 11.
- 村松剛, 1969, 「学生過激化の背景--ニヒリズム、疎外感、言葉の喪失 論壇時評<上>』『読売新聞』1969.1.21, 夕刊 5.
- 室伏高信, 1934, 「素人の登場--新しいジャアナリズム 二月の論壇（一）』『東京朝日新聞』1934.2.4, 朝刊 9.
- , 1935, 「批判の進歩性と反動性--二月号の雑誌から（四）』『読売新聞』1935.1.31, 朝刊 10.
- , 1936a, 「総合的評論への道--槍騎兵』『東京朝日新聞』1936.7.9, 朝刊 9.
- , 1936b, 「総合雑誌の新傾向--槍騎兵』『東京朝日新聞』1936.8.16, 朝刊 7.
- 武者小路公秀, 1976a, 「左翼論へ新鮮な提起 丸山輝雄氏--スト権ストを学際分析 富永健一氏ら 論壇時評 上』『朝日新聞』1976.1.29, 夕刊 3.
- ,1976b, 「打開めざすなぞ解き--「中国」素材の中兼論文 論旨は論壇全体に妥当 論壇時評 上』『朝日新聞』1976.7.26,夕刊 3.
- , 1976c, 「『論壇』は現実はどう対応--情報面では現実遊離 総合雑誌思想より商品性 論壇時評 上』『朝日新聞』1976.10.28, 夕刊 5.
- 中野好夫, 1946, 「やうやく軌道へ--二月の総合雑誌評』『朝日新聞』1946.2.18, 2.
- , 1947, 「雑誌評』『朝日新聞』1947.9.1, 2.
- , 1956, 「『日ソ交渉』と『中国』に焦点--総合雑誌 11 月号評』『朝日新聞』1956.10.15, 朝刊 4.
- , 1977a, 「目にあまる悪文・難文--思考が生煮えの人ほど 論壇時評 上』『朝日新聞』1977.1.27, 夕刊 5.
- , 1977b, 「果たして何人が理解--ページ数も多すぎぬか 論壇時評 下』『朝日新聞』1977.1.28, 夕刊 5.
- , 1977c, 「過剰生産の弊害歴然--訴えかける意欲薄れる 論壇時評 上』『朝日新聞』1977.5.30, 夕刊 7.
- 中村哲, 1955a, 「選挙待ちの政治特集--二月号の雑誌から』『朝日新聞』1955.1.22, 夕刊 5.
- 中村菊男, 1961a, 「構造改革への批判--田口氏の『日本社会党論』 論壇時評 上』『読売新聞』1961.1.16, 夕刊 3.
- , 1961b, 「鋭い観察力と柔軟性--大宅氏の『共産主義の人間像』 論壇時評 上』『読売新聞』1961.10.20, 夕刊 3.
- 西銀三, 1933, 「『中央公論』 --告知板』『読売新聞』1933.12.22, 朝刊 4.
- 緒方富雄, 1952, 「小さな別室の『論議』 --総合雑誌五月号評』『朝日新聞』1952.4.30, 朝刊 4.
- 大木卓, 1949, 「編集者失格--96 頁の総合雑誌』『朝日新聞』1949.4.5, 4.
- 大熊信行, 1938, 「総合雑誌の危機--槍騎兵』『東京朝日新聞』1938.3.11, 朝刊 7.
- 大森義太郎, 1932a, 「ファツシズム論はもう片づいたか--論壇の推移について 論壇月評 [一]』『東京朝日新聞』1932.3.30, 朝刊 5.
- , 1932b, 「最も活躍してゐる論壇の花形--異色ある小倉氏の随筆 論壇月評 [三]』『東京朝日新聞』1932.4.1, 朝刊 9.
- , 1933a, 「堺さんの名文--論壇の文章（一）』『東京朝日新聞』1933.7.23, 朝刊 5.
- , 1933b, 「マルキストの難文--論壇の文章（三）』『東京朝日新聞』1933.7.25, 朝刊 9.
- , 1935a, 「学術的な論文--二月の論壇 [一]』『東京朝日新聞』1935.2.2, 朝刊 13.
- , 1935b, 「財政・凶作・官吏--二月の論壇 [二]』『東京朝日新聞』1935.2.3, 朝刊 9.
- , 1935c, 「時評ふうの論文--二月の論壇 [三]』『東京朝日新聞』1935.2.4, 朝刊 9.
- , 1935d, 「ベルグソン論など--二月の論壇 [四]』『東京朝日新聞』1935.2.5, 朝刊 9.
- , 1935e, 「文学的論文--二月の論壇 [五]』『東京朝日新聞』1935.2.6, 朝刊 9.
- , 1935a, 「矢内原氏の宗教論-論壇時評（3）』『読売新聞』1935.3.5, 朝刊 4.
- , 1935f, 「知識階級論批判--論壇時評（5）』『読売新聞』1935.3.7, 朝刊 10.
- , 1936, 「雑誌編集者の新課題--槍騎兵』『東京朝日新聞』1936.7.10, 朝刊 9.

引用新聞記事

- , 1939, 「宛名のない手紙」『都新聞』1939.12.26. (: 2001, 竹内洋『大学という病--東大紛擾と教授群像』中央公論新社.)
- 大内力, 1952, 「大衆との距離--二月号の総合雑誌から」『朝日新聞』1952.1.28, 朝刊 4.
- 大宅壮一, 1933a, 「文芸批評不振--後退を示す新人連 八月の論壇三」『東京朝日新聞』1933.7.31, 朝刊 5.
- , 1933b, 「自由主義者の弁--清沢氏の所論を読む 八月の論壇四」『東京朝日新聞』1933.8.1, 朝刊 5.
- , 1933c, 「京大事件の清算--十月の中間読物と論文 (二)」『東京日日新聞』, 朝刊 14.
- 相良守峯, 1953, 「食いつきやすい『文春』--各誌にソ連肅正問題 九月号総合雑誌評」『朝日新聞』1953.8.26, 朝刊 6.
- 坂本二郎, 1970, 「多い“半ばもの”--『情報』として読むと」『読売新聞』1970.3.26, 夕刊 7.
- 坂本義和, 1970, 「想像力こそ必要な時--総合雑誌をしかる 桑原論文 新しい革新の姿 久野・松下対談 論壇時評 上」『朝日新聞』1970.11.23, 夕刊 5.
- , 1971, 「ベンダサン『日本人とユダヤ人』--視点・表現は見事だが“根おろし”実践こそ課題 論壇時評 上」『朝日新聞』1971.4.26, 夕刊 7.
- 向坂逸郎, 1936, 「論争の多きは問題の摘発に原因--論壇展望 (1)」『東京朝日新聞』1936.10.7, 朝刊 7.
- 佐和隆光, 1988, 「活力薄らぐ「論壇」 殿堂にこもる「学者」「論者」との緊張関係必要」『朝日新聞』1988.12.27, 夕刊 5.
- 芹沢俊介, 1994, 「息苦しさの質--のんびり暮らし穏やかに死にたい ウオッチ論調」『朝日新聞』1994.4.27, 夕刊 9.
- 末弘厳太郎, 1934, 「人物評論の意義--低劣なるゴシップ記事 五月の論壇 (四)」『東京朝日新聞』1934.5.9, 朝刊 9.
- 杉森孝次郎, 1933a, 「自由主義末期--鯨山氏の連盟論 三月の論壇(1)」『東京朝日新聞』1933.3.4, 朝刊 5.
- , 1933b, 「ミネルワの梟と曉鶏と」『読売新聞』1933.12.3, 朝刊 4.
- 杉山平助, 1933, 「雑誌界の諸相と支配傾向【下】--現代文化の構成を解剖する(12)」『読売新聞』1933.10.17, 朝刊 4.
- , 「ノー・イズム--思想界の無籍者 わが信ずるイズムと人 [8]」『読売新聞』1935.7.25, 朝刊 10.
- , 1936, 「評論・小説と読者--槍騎兵」『東京朝日新聞』1936.7.7, 朝刊 9.
- 杉田敦, 2006, 「二分法を越えて--『友か敵か』では閉塞 新たな道を探る試みを」『朝日新聞』2006.4.25, 夕刊 10.
- 鈴木義男, 1935, 「指導的論策--田中氏の文化問題論 八月の論壇 (1)」『東京朝日新聞』1935.8.5, 朝刊 9.
- 高島通敏, 1982a, 「ソ連脅威論と軍拡--米戦略の意図を抽出 対応異なる欧州と日本 論壇時評<上>」『朝日新聞』1982.1.29, 夕刊 5.
- , 1982b, 「ポーランド『連帯』運動の挫折--権力機関を過小評価 ワレサ氏ら知識人不振 論壇時評 下」『朝日新聞』1982.12.28, 夕刊 5.
- 高橋亀吉, 1932a, 「雑誌の使命--社会指導の論文が無い 論壇月評 (一)」『東京朝日新聞』1932.5.31, 朝刊 5.
- , 1932b, 「雑誌編集者へ--根本的改革の必要 論壇月評 (二)」『東京朝日新聞』1932.6.1, 朝刊 5.
- , 1934, 「日蘭会商問題--示唆に富む脇村氏の論文 七月の論壇(4)」『東京朝日新聞』1934.7.6, 朝刊 11.
- 高橋義孝, 1951, 「判断の材料を提供せよ--ジャーナリズム本来の使命 総合雑誌論」『朝日新聞』1951.3.7, 朝刊 4.
- 竹内好, 1954, 「中国問題の基本的考え方--十二月号の雑誌論文から (上)」『朝日新聞』1954.11.23, 朝刊 5.
- 玉城哲, 1978, 「民族主義を見なおす--“日本型”の反省から 今月の論点 上」『読売新聞』1978.6.26, 夕刊 7.
- , 1979, 「“日常の変革”反映せず--鶴見氏、総合雑誌の“歯がゆさ”指摘 今月の論点 上」『読売新聞』1979.1.26, 夕刊 7.
- 田中美知太郎, 1962, 「現在を考え直す時期--われわれ自身の歴史から 論壇時評 上」『読売新聞』1962.1.19, 夕刊 5.
- , 1963, 「物価問題へ関心を--豊富な『中公』の共同執筆」『読売新聞』1963.7.26, 夕刊 7.
- 田中明彦, 1999, 「社会の知的指針--日本の『魅力』の回復 グローバル化に対抗 安保でも視野拡大を 雑誌を読む 4月」『毎日新聞』1999.4.22, 夕刊 9.
- 谷川徹三, 1932a, 「常識の限界 [上] --『法律の社会性』について 論壇時評 [一]」『東京朝日新聞』1932.5.3, 朝刊 5.
- , 1932b, 「下らぬ巻頭論文--哲学的論文を採り上げよ 論壇月評 [三]」『東京朝日新聞』1932.5.5, 朝刊 5.
- , 1932c, 「誤解された哲学--イデオロギーとしての哲学 論壇月評 [四]」『東京朝日新聞』1932.5.4, 朝刊 9.
- , 1932d, 「哲学界の一傾向--『哲学時評』を讀みて 論壇月評 [五]」『東京朝日新聞』1932.5.7, 朝刊 5.
- 戸坂潤, 1934, 「街頭社会学と民族社会学--七月創作評 (1)」『東京日日新聞』1934.6.30, 朝刊 15.
- , 1937a, 「人物批評論--【一】批評精神の昂揚について」『東京朝日新聞』1937.3.8, 朝刊 7.
- , 1937b, 「人物批評論--【二】批評精神の弛緩でもある」『東京朝日新聞』1937.3.9, 朝刊 7.
- 都留重人, 1962a, 「きびしい課題『物価』--輸出振興で新鮮な藤山氏の指摘 『独禁政策...』(中公)は収穫 論壇時評 下」『朝日新聞』1962.5.23, 朝刊 9.
- , 1963a, 「花咲いたドゴール論--嬉野氏の掘下げに敬意 気になる総合雑誌のあり方 論壇時評 上」『朝日新聞』1963.3.26, 夕刊 11.
- , 1963b, 「少ない大胆な予見--鋭く明快な尾高氏の論旨 印象に残る『外国視察記』」『朝日新聞』1963.10.27, 朝刊 11.

- , 1965, 「日本の近代にとりくむ 堀田氏--想像力探求と『美』の現実 加藤・水尾氏 論壇時評 下」『朝日新聞』1965.1.22, 朝刊 5.
- 鶴見俊輔, 1974, 「変わった『日本らしさ』--他の文化の目と交わる 論壇時評 上」『朝日新聞』1974.1.28, 夕刊 3.
- , 1975a, 「遠くから見た日本--上野英信『迎え歌<われら棄民の民>』 祖国美化せぬ移住者 いまは進出企業に追われて 論壇時評 上」『朝日新聞』1975.1.30, 夕刊 3.
- , 1975a, 「巻頭論文の衰弱--熟慮抜きの刺激→反応 敗戦直後に及ばぬ射程」『朝日新聞』1975.8.28, 夕刊 3.
- , 1975b, 「日本の生命線--強権主義への警戒を 戦前と同じ問題に当面 論壇時評 上」『朝日新聞』1975.10.30, 夕刊 7.
- , 1975c, 「人間見つめた数学者--遠山啓 失われた想像力求めて 羽仁進氏 論壇時評 下」『読売新聞』1975.12.26, 夕刊 3.
- 上田貞次郎, 1934, 「期待を裏切らる--評論家総動員の時期 一月の論壇 [一]」『東京朝日新聞』1934.1.4: 5.
- 上野千鶴子, 1987, 「経済の時代 上--臆面ない現状肯定の新保守派 展望」『毎日新聞』1987.4.17, 夕刊 4.
- 潮鳴彦, 1935, 「政治論文に飢える--壁評論」『読売新聞』1935.2.1, 朝刊 10.
- 山川均, 1935, 「春風未だ至らず--四月の論壇 1」『東京朝日新聞』1935.3.31, 朝刊 11.
- 山本満・なだいなだ, 1977, 「総合雑誌めぐって」『読売新聞』1977.6.27, 夕刊 7.
- 山崎正和, 1996, 「総合的思索--冷戦後に見えてきた矛盾 自由と安定の調停策探る 論壇時評」『朝日新聞』1996.4.30, 夕刊 5.
- 横手丑之助 (杉山平助), 1932, 「筆者申す--豆戦艦」『東京朝日新聞』1932.7.25: 朝刊 9.
- , 1933, 「経済往来 思想--豆戦艦 (7) 八月の雑誌評」『東京朝日新聞』1933.8.6, 朝刊 9.
- 米本昌平, 1998, 「環境ホルモン--思想の側面も含む新問題 世紀単位の視野で整理を 論壇時評」『朝日新聞』1998.4.30, 夕刊 13.
- 吉田精一, 1953, 「六月号の総合雑誌」『朝日新聞』1953.5.29, 朝刊 4.
- 読売新聞, 1933, 「文壇相場放送--文壇二人暗諺」1933.8.16, 朝刊 4 .
- , 1976, 「今月の論点」『読売新聞』1976.6.29, 夕刊 5.